

「ほう！」

「多すぎますか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチはぶるつとした。

「腕環だけにするんですね、百ルーブルも出してね。」

パーヴェル・パーヴロヴィチは逃げ返つてしまつた。彼はなるべく金をかけて、「一揃ひ」をつくり買ひたかつたのである。で彼はさかんに駄々をこねた。とにかく二人は商店に立ち寄つた。ところがとどのつまりは、腕環を買つただけのことになつてしまつた。それすら、パーヴェル・パーヴロヴィチの買ひたいと思つた品ではなしに、ヴェリチャーニノフが指した方だつたのである。パーヴェル・パーヴロヴィチは両方とも買ひたかつた。最初は腕環一組で百七十五ルーブルと吹つかけて来た店の主人が、やがて百五十ルーブルまで折れて出たときには、彼は却つて残念な氣さへしたのである。向ふでもし二百と吹つかけたとしても、彼は喜んでそれだけ拂つたに相違ない。それほど金をかけたかつたのである。

「私がこんなに急いで贈物をするからつて、べつに差障りはないんですよ」と、再び馬車が動き出してから、彼はいい氣持でべらべらやりはじめた。「だつて先方は何も上流でも何でもなし、ごく普通の家庭なんですからね。それに無邪氣なお嬢さんといふものは、贈物が好きなものでしてねえ」と、彼は狡るさうに、しかも楽しさうにやりとして、「あなたは先刻、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、

相手が十五だと私が申したとき、妙な笑ひ方をなさいましたつけね。ところが私は、實にそこんころに惚れ込んぢまつたといふ譯でしてね、——つまりその、雑記帳だのペンだのはいつてゐる小つちやな鞆をぶら下げて、まだ女學校へ通つてゐる、實にそこんころなんですよ、へ、へ！ この小つちやな鞆が私をぼおつとさせちまつたんですよ！ 實際あの無邪氣といふ奴が私にはもう堪らん魅力なんでしてね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。それに比べりや、お面の美しさなどは、私にとつちや大した問題ぢやないんですよ。友達と一緒になつて、隅の方できやあきやあ笑ひ轉げてるんです。その笑ふことといつたらもう、それこそ放圖がありませんよ！ 何しろあなた、仔猫が筆筒の上からベッドへ跳びおりて、そこできくるくと丸まつた……それだけでもう大笑ひなんですからねえ。おまけに新鮮な林檎の匂ひがするんですよ！ とところで、喪章はいつそ外したもんでせうかねえ？」

「どうとも御隨意に。」

「ぢや外しませう！」

彼は帽子をぬいで、喪章を引つばがすと、そのままぼいと窓の外へ抛り出した。そして彼がふたたびその帽子を、禿げあがつた頭にかぶり直したとき、その顔に實にあかるい希望の色が輝き出たのをヴェリチャーニノフは見逃がさなかつた。

「この男は一たい、本當にこれだけの人間なのかしら？」と彼はもう正真正銘の憎惡に驅られながら

心に思つた、「俺を引張り出したことには、本當に何の下心もないのかしら？ 本當に俺の好意に甘えただけのことなのかしら？」——彼はこの最後の假定に、殆んど立腹せんばかりになつて、想像をつづけた。「この男は—たい何者なんだらう？ 道化か馬鹿か、それとも例の「永遠の良人」つていふ奴なのか？ いやいや、結局何が何だか分かつたものぢやないぞ！……」

十二 ザフレービニンの家で

ザフレービニンの家は、先刻もヴェリチャーニノフが言つてゐた通り、實際「なかなかきちんとした家庭」だつたし、當のザフレービニンも頗る確實な地歩を占める官吏で、上長の氣受けも極めてよかつた。とはいへ又、先刻パーヴェル・パーヴロヴィチがこの家の収入を評して、「なるほど見た目にはいい暮らしをしてゐるが、あれである人にもしものことがあつて御覽なさい、あとには一文だつて残りはしませんやね」と言つたのも、何ひとつ掛値のない話だつた。

ザフレービニンは、いそいそと愛想よくヴェリチャーニノフを迎へて、昔日の「仇敵」は今やまつたく友人に一變してしまつた。

「いやお目出たう、まづまづ結構でしたなあ」と、彼は氣持のいい毅然とした顔つきで、最初からさう切り出した、「私も實は示談にするやうに主張してゐた譯でしてな。しかしあのピョートル・カールロヴィチ（ヴェリチャーニノフの辯護士）は、かうしたことにかけちや全く國寶的存在ですなあ。どうです？ 六萬といふ金が、勞せず、長引きもせず、いがみ合ひもなしで、まんまと貴方の手に轉げ込むんですからなあ！ 大丈夫三年は長引きさうな事件でしたよ！」

ヴェリチャーニノフは直ぐまたザフレービニナ夫人にも引き合はされた。これはお人好らしい、疲れたやうな顔をした、五十恰好のひどく肥満した婦人であつた。やがてお嬢さんたちも、一人づつ或ひは二人づつ手を取り合つて、しづしづと裳を引きながら現はれて來た。ところが順ぐりに現はれ出たお嬢さんの數は頗る多數にのぼつて、いつの間にか十人か十二人ほどになつてゐたので、ヴェリチャーニノフはもう算へることも出來ない始末だつた。はいつて來るお嬢さんがあるかと思へば、入れ代りに出て行くお嬢さんもある、だが實のところは、この中には近隣の別荘友達が大概混つてゐたのであつた。一たいザフレービニン家の別荘といふのは、何やら得體の知れない、しかし妙に凝つた建て方をした大きな木造の家で、そのうへその時々建増しが目につくのだつたが、總じて頗る廣大な庭に臨んでゐた。ところがこの庭に臨んでゐるのは、この別荘一つではなくて、なほ三四軒のよその別荘が、思ひ思ひの方角から同じ庭に面してゐた譯なのである。つまりこの廣大な庭は、それ

らの別荘に共通のものなので、したがって自然この娘たちが、隣近所の別荘の娘と接近することにもなつたのであつた。

ヴェリチャーニノフは最初の二た言三言のやりとりの間に、自分の今日の來訪があらかじめ先方で待ち受けられてゐたことや、自分がパーヴェル・パーヴロヴィチの親友としてこの家庭とお近づきになり來訪するといふことが、殆んど鳴り物入りで宣傳されてゐたらしいことを、早くも見てとつた。それのみならず、この道にかけてはなかなか鋭敏でもあり老練でもある彼の眼光は、間もなくその場の雰圍氣に、何かしら一種特別のものが漂つてゐることまで見破つてしまつた。老夫婦の餘りにも慇懃を極めるあしらひといひ、娘たちの何か妙にとつてつけたやうな顔つきから、その着飾りやうといひ——（尤もちようど祭日には違ひなかつたけれど）——彼の腦裡に一抹の疑念を呼び醒まさすには措かないのであつた。こりやあパーヴェル・パーヴロヴィチに一杯喰はされたぞ、もちろん正面切つてそれとは言はなかつただらうけれど、私はまあさう思ひますね位のところで暈がかしながら、奴さん俺のことを、やれ資産のある紳士だとか、『上流社會』の、闊淋しさをかこつてゐる獨身者だとか、だから今すぐとは行かないだらうけれど、そのうちどうかした拍子に急に『發心』して、家庭をもつ決心を起こさんものでもない、いやその可能性は十二分にあるとか、『殊に今度かうして遺産も、轉げ込んでんですからねえ』とか、さんざこの連中に氣を持たせたのに相違ない。——さう思つて見ると、

一ばん上のザフレービニナ嬢、つまり先刻パーヴェル・パーヴロヴィチが『素晴らしい美人』といふ言葉で表現してゐた、例の二十四になるカテリーナ・フェドセーヴナに、どうやらさうした氣構へが仄見えるのであつた。彼女はその着付けといひ、房々した髪の一種風變りな結ひ上げぶりといひ、妹達を抜いて一段と際立つて見えた。その一方、妹たちや他の令嬢たちはどうかといふと、ヴェリチャーニノフが今日お近づきに訪問して來たのは『カーチャ姉さまがめあて』なので、つまり姉さまを『見に』やつて來たのだといふことは、私達ちやんと知つてゐると云はんばかりの顔をしてゐた。彼女たちの眼差しや、その日のうちにうっかりと口を滑らした言葉の端々までが、やがてこの想像がまんざら根のないことではないことを、彼に確信させたのであつた。

カテリーナ・フェドセーヴナは脊の高い、それでゐて勿體ないほど丸々と肥つた金髪の令嬢で、非常に愛くるしい眼鼻だちをしてゐた。見るからにおだやかな、おつとりした、いや寧ろほおつとした氣性であるらしい。『これほどの娘が今まで賣れ残つてゐるとは可笑しいな』と、さも樂しげに彼女の方をちらちら眺めながら、ヴェリチャーニノフは思はずさう考へずにはゐられなかつた、『なるほど持參金もあるまいし、また間もなくぶくぶくに肥つちまふに違ひないことは目に見えてゐる。だが今のうちなら、望み手は降るほどありさうなものだがなあ……』。残る妹たちもやはり相當の縹緞だつたが、別荘友達のなかにも二三かなり踏める顔や、それどころかなかなかの別嬢さんもまじつて

ゐた。そんな品定めをしてゐるうちに、彼は次第に楽しい氣持になつて來た。とはいへその一方にまた、或る特別の關心をいだいて此の家の閫をまたいだ彼だつたのである。

六番目のナヂェーヅダ・フェドセーヅナ、これは例のまだ女學校へ通つてゐる、そしてパーヴェル・パーヴロヴィチが貰ふつもりにしてゐる花嫁であるが、肝腎のこの娘は待たせるばかりでなかなか出て來なかつた。ヴェリチャー・ニコフは待ち遠しさのあまりちりちりしてゐたが、やがてその自分自身に愕いて、ひそかに自嘲の笑ひを漏らした。そのうちにやつと彼女が姿を見せると、靦面に一座はさつと色めき渡つた。彼女は一人で出て來たのではなく、マリヤ・ニキーチシナといふ滑稽な顔つきをした、栗色髪の、すこぶるお俠まがで口先の達者な女友達と連れだつてゐたが、パーヴェル・パーヴロヴィチがこの友達をひどく煙たがつてゐることは、一目でそれと分かつてしまつた。一たいこのマリヤ・ニキーチシナは、もう二十三にも手が届かうといふ、人を小馬鹿にしたやうなすこぶる才はじけた娘で、近所同志の家庭で小さな子供達のお相手をつとめるお傳役だつたが、もうずつと前からザフレービンのところでは家の者も同然の扱ひを受けて、ひどく娘たちの間に人氣を博してゐたのである。特に今となつては、ナーヂャにとつても無くてはならぬ人物であることは、明らかに見てとられた。ヴェリチャー・ニコフはそもそもの最初の一瞥で、この家の娘たちばかりでなくその友達までが、まるで申し合はせたやうにパーヴェル・パーヴロヴィチを白い眼で見つてゐることを看破してゐたが、やが

て愈々ナーヂャがはいつて來た段になると、この娘もやはり彼を嫌つてゐるのだと、心に斷定せざるを得なかつた。同時にまた、パーヴェル・パーヴロヴィチがその事實に氣づかずにある、乃至は氣づくことを欲してゐない、といふことも見てとつた。

このナーヂャが姉妹ぢうで一ばんの縹緞よしなことは、抗ふ餘地がなかつた。——栗色の髪をした小娘で、野生のままの女のやうな顔つきをし、ニヒリストのやうな大膽さを具へてゐる。燃えるやうな眼ざしと、魅するやうな微笑と（尤もそれは屢々邪惡な色を帯びるのであつたが）すばらしい唇と齒とを持ち、細そりと、均齊のよくとれたからだつきをした、小狡るさうなやんちや娘で、その燃え立つやうな表情にはすでに思春の情がたゆたつてはゐるものの、同時にまだほんの子供つぽい顔附であつた。十五といふ年は流石に、その歩む一步にも、その口にする言葉の端々にもあらはだつた。やがての會話で分かつたことだが、パーヴェル・パーヴロヴィチがはじめて彼女を見たときには、實際に蠟びきの布の小さな鞆をぶら下げてゐたのださうである。しかし今では、もうそんなものは下げてゐなかつた。

やがて腕環の贈物をする段になると、これは大失敗に終つたのみならず、不快な印象をさへ生じさせてしまつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは花嫁の御入來と見てとるが早いか、にやにやしなながら早速その傍へ寄つて行つたのである。そして、『先日伺つた折りには、ピアノの伴奏であなたがお歌

ひになつたあの快い小曲ポンスのおかげで、大へんに楽しい氣持にならせて頂きました。實はその御禮のしるしに……』といつた前口上で、例の贈物を差し出したのである。ところが中途でしどろもどろになつてしまひ、絶句した儘まるで自失した人のやうに、差し出した腕環のケースをナチエージタ・フェドセーヴナの手に押しつけて、つつ立つてゐた。こちらはそれを受けとらうとはせず、恥かしさと怒りとにさつと顔を紅らめて、両手をうしろへ引いてしまつた。そして當惑の色をありありと浮かべてゐる母親の方へ、彼女はきつと顔を向けると、大きな聲でかう言つたものである。

「あたし厭ですわ、ママ！」

「頂戴してお禮を申しあげなさい」と父親は、穩やかなかに嚴しさを含めた聲で言つたが、彼も内心では矢張り不満だつたのである。『困りますなあ、こんなことをなすつちやあー！』と、彼はパーヴェル・パーヴロヴィチの耳もとで、訓すやうな調子で呟いた。

ナーチャはしよることなしにケースを受けとると、伏眠になつて、小さな女の子の流儀で膝頭のお辭儀をした。つまり、いきなり體を沈めたかと思ふと、急にまたぜんまい人形みたいにびよこんと跳ねあがる、あれをやつた譯である。そこへ姉のなかの一人が腕環を拜見に近寄つて來ると、ナーチャはまだ開けてもないケースをそのまま渡してしまつて、自分は見るのも厭だといふ氣持を示した。やがて腕環は取りだされて、一座のもの手から手へと渡りはじめた。しかしみんな黙然として拜見す

るだけで、中には露骨な嘲笑の色をうかべてゐる者もあつた。ただ一人母親だけが、まあ大そう可愛らしい腕環ですことなどと、しきりにもぐもぐと唇を動かしてゐた。この散々の體たらくに、パーヴェル・パーヴロヴィチが穴があれば這入りたいやうな思ひでゐるところを、ヴェリチャー・ニノフが助け舟を出した。

彼は行きあたりばつたり心に浮かんだ事がらを手蔓にとつて、矢庭に大聲を出して、さも熱心さうに喋り立てはじめたのである。そしてものの五分とはたためぬうちに、まんまと客間ぢうの視聽をさらつてしまつた。彼は社交場裡の座談術を、みごと身につけた男だつたのである。それは他でもない自分を磊々落々な人鬪ひとと他人に思はせると同時に、こちらの方でも聽手一同を自分と同様の磊々落々な人達と心得てゐるといつた振りをする、一種の技巧なのである。彼はなほ必要と見れば、天下御免の太平樂な幸福人に化けさせて、しかも些かたりとも不自然の跡をとどめなかつた。また彼は話の急所急所に、ひりりと來る辛辣な警句や、陽氣な當てこすりや、頓狂な駄洒落やを巧みに織り込むことにかけても頗る心得たものであつた。しかもその皮肉にしろ駄洒落にしろ、またそもその話全體にしてからが、恐らくはとうの昔から貯藏され謄記され、すでに再三實地に應用されたものに相違なかつたにも拘はらず、全くひよいとした機みに飛び出したといつた具合に、さり氣なくやつて退けるのであつた。しかも今の場合は、彼の技巧に加ふるに、自然の情の流露までが手傳つてゐたのである。

つまり彼は、自分がさうした気分になつてをり、何ものかが彼をぐんぐんと牽きすつて行くのを感じてゐたのであつた。また彼は、もう數分もすれば必らず満座の眼を己れ一身に集めて見せる、満座の耳をただ己れ一身に集めて見せる、ただ俺だけを相手に話をするやうにして見せる、俺の話にだけ笑ひ興するやうにして見せる——といふ、燃えるやうな絶對の信念を、身うちにひしひしと感じてゐたのであつた。

と、果たせるかな、間もなくどこかで笑ひ聲が聞こえ、だんだんに他の連中までが話に口を出すやうになり、——（彼はまた、他人を話の中に引き入れることにかけても、入神の腕前をもつてゐた）——やがて三人四人の話し出す聲が、一どきにかち合ふまでになつた。ザフレイベーナ夫人の懶げな疲れたやうな顔つきも、今では殆んど喜悅の色に輝きはじめた。恍惚として彼の話に聞き入り、彼の顔に見入つてゐるカテリーナ・フェドセーヴナの面上にも、やはり同じ色が見てとられた。ナーヂャは上眼づかひに、射抜くやうな鋭い眼光を彼に注いでゐた。それによつて見ると、彼女はあらかじめ彼に對する反感を植ゑつけられてゐたらしかつた。その様子が、ヴェリチャーニノフの雄辯にいよいよ油を注ぐことになつた。例の『根性まがり』のマリヤ・ニキーチシナになると流石に見上げたもので、話の隙をうかがつてまんまと一丁、かなり手痛い厭がらせを彼に浴びせかけた。つまり彼女は、昨日ここでパーヴェル・パーヴロヴィチが彼のことを竹馬の友として披露に及んだといふ仕組みを豫

め考へついで、それをさも眞實らしく相手に思ひ込ませて置いてから、彼の年齢を七つも上に——もちろん明らかに指さなかつたが、はつきりそれを匂はせて——見積つて見せたのである。とはいへ、そのマリヤ・ニキーチシナでさへ、仕舞ひには彼に好意をもつてしまつた。

パーヴェル・パーヴロヴィチはこの有様を見て、全く呆氣にとられてしまつた。もちろん彼にしても、この友人の有する手腕についてはまんざら知らぬわけではなく、最初のうちはその着々として收められる成果を寧ろ喜んで、自分でもくすくす笑ひをしたり、話に口を出したりしてゐたのであつたが、しかもどうした譯だか、そのうちだんだんに物思はしい氣分に沈むやうになり、やがての果てにはすつかり憂鬱になつてしまつた。それは彼の惑亂した形相にありありと現はれてゐた。

「いやこれは、あなたはこちらでお接待するまでもない、至極手のかからないお客様ですなあ」と、やがてザフレイベーナ老は椅子を立ちながら、さも愉快さうな面持ちでさう斷定を下した。彼はこれから二階の書齋へ引き取らうといふので、そこには祭日だといふのに、彼の檢閲を待つ幾通かの書類がすでに用意されてゐたのであつた。——「それをどうでせう、この私と來たら貴方のことをつい今の今まで、この頃の若い人のなかでも一等陰氣くさいヒポコンデリー患者だと睨んでをりましたよ。

——いやはや飛んだ感違ひをすることがあるものですて！」

廣間にはピアノが据ゑてあつた。ヴェリチャーニノフは、誰方が音楽をおやりになるのかと訊ね、

そしていきなりくるとナーチャの方を振り向いた。

「あなたはたしか聲樂の方をおやりでしたな？」

「まあ、誰が申しまして？」とナーチャは切つて返した。

「パーヴェル・パーヴロヴィチが先刻さう言つたぢやありませんか。」

「嘘ですわ。あたしのはほんの御座興よ。聲だつて悪いんですもの。」

「私だつて碌な聲ぢやありませんがね、とにかく歌ひますよ。」

「ぢや、あなた歌つて下さいませわね？ さうしたらあたしも歌ふことにしますわ」とナーチャは眼を輝やかせた。「けど今は駄目よ、夕御飯が済んでからね。本當をいふと、あたし音楽はもう澤山なんですの」と彼女は附け加へた。「殊にあのピアノと來たら、もうそれこそうんざりですわ。だつて朝から晩まで、みんなして弾いたり歌つたり、そりや大變な騒ぎなんですもの。———どうにか聞けるのはカーチャ姉さまだけなのよ。」

ヴェリチャーニノフは得たりとばかりその言葉尻をとらへて、根ほり葉ほり訊くうちに、結局姉妹のなかで眞面目にピアノの稽古をしてゐるのは、カテリーナ・フェドセーヴナ一人といふことが分かつた。彼は早そく彼女に向かつて、一曲どうぞと所望に及んだ。彼がカーチャ姉さまに話しかけたのを見ると、一座はみるみる晴れやかな氣分になつて來た。中でも母親などは、嬉しさのあまり顔を紅

めたほどであつた。カテリーナ・フェドセーヴナはにこやかに席を起つて、ピアノの方へ歩を運んだが、俄かにこれも、吾ながら思ひもかけず、さつと耳の根まで紅くなつてしまつた。そして自分がこんなに大きな、もう二十四にもなる立派な大人で、しかもこんなに肥つななりをしながら、まるで小娘みたいに紅くなつたりして———と思ふと、急にひどく恥かしくなつてしまつた。さうした氣持は、ピアノの前に腰をおろした彼女の顔に、はつきりと書いてあつたのである。彼女は何かハイドンのものを弾いたが、よし餘韻は失はれてゐたとはいへ、極めて正確な彈奏ぶりを示した。しかし彼女が固くなつてゐたことも争はれぬ事實だつた。彼女が弾き終へると、ヴェリチャーニノフは彼女の彈奏ぶりをではなしに、ハイドンを、それも彼女の弾いたその小作品のことを、さかんに褒めちぎり始めた。———すると彼女の顔にはありありと喜びの色が漂ひはじめ、自分へではない、ハイドンへの讃辭を、いかにも有難さうに樂しげな面持ちで、じつと聽いてゐるのであつた。これには流石のヴェリチャーニノフも驚いて、今までよりも一層の優しさと注意の籠もつた眼差しで、思はず彼女を見直さざるを得なかつたのである。「おや、これほど素晴らしい娘だとは？」———と彼の眼が語つた。そして満座の者は一齊にこの彼の眼色を読みとつたらしかつた。殊にカテリーナ・フェドセーヴナ自身が一倍。……

「實に大したお庭ですわ」と、彼はバルコンの硝子扉に眼を轉じて、急に一同に向かつて言ひかけ

た、「いかがです、ひとつ皆さんで庭へ出て見ようぢやありませんか！」

「参りませうよ、参りませうよ！」と、娘たちの甲高い歡聲がそれに應じた。それはまるで、彼が一座の者のひそかに希望してゐたところを、びつたりと言ひ當てたかのやうであつた。

一同は夕食までのあひだ庭を逍遙した。とうから晝寢をしい別間へ退きたく思つてゐたザフレエビニナ夫人も、その時やはり皆と一緒に庭へ出てひと歩きして見たくてならなかつたが、また考へ直してバルコンに居残つて休息をとることにし、そのまま早速ぬむりをはじめた。庭に出ると、ヴェリチャーニノフと少女たち一同との仲は、一そう親しさの度を増した。間もなく彼は、庭つづきのそここの別荘から、二三人の非常に若い青年が出て来て、彼等の仲間に加はつたのを認めた。一人は大學生だつたが、もう一人の方はまだほんの中學生(譯者註。八年制の中學校)に過ぎなかつた。彼等はすぐさま自分の少女の傍へ走り寄つたし、その少女があるからこそ彼等が出て来たことは一見して明かであつた。更にもう一人の『青年』は、頗る陰氣くさい、頭髮を蓬々にして、大きな青眼鏡をかけた二十歳ほどの子であつたが、出てくるや否やマリヤ・ニキーチシナやナーヂャを相手に、眉の根を寄せながら何やら早口にひそひそ話をしはじめた。そして彼は儼しい眼つきで、ヴェリチャーニノフの方をぢろぢろ見るのであつた。打ち見たところ、彼に對して極度の輕蔑的な態度をとることを、自分の義務とも心得てゐるらしい。二三人の少女が、早く何かして遊びませうよと言ひ出した。何をして遊ぶんで

すと云ふヴェリチャーニノフの問ひに答へて、彼女たちは、鬼ごつこをはじめどんな遊戯でもするけれど、夕方には諺ごつこをするのがまづ普通だと言ふのだつた。この諺ごつこといふのは、みんながひと塊まりに坐つて、一人だけが一時その場を外してゐる。そして坐つてゐる連中が相談をして、何か一つの諺、例へば『急がば廻れ瀬田の長橋』を選び出す。そこで離れてゐた一人を呼び戻して、いめいが順々にそれぞれ一句づつを考へて、それを鬼に話して聞かせる。一番目に口を開く者は『急がば』といふ言葉のはいつてゐる文句をいひ、二番目の者は『廻れ』といふ言葉のはいつてゐる文句を言ふ、といつた工合に運んで行くのである。そこで鬼は、それらの文句をみんな寄せ集めて、問題の諺を當てなければならぬ。——ざつとかうした遊戯ださうである。

「そりゃきつと面白いでせうね」とヴェリチャーニノフは言葉を挿んだ。

「あら厭だ、とつても詰まんないのよ」と二三人の聲が一齊に反對した。

「でなければ、芝居ごつこをすることもありますわ」と、ナーヂャが彼に向かつて口を挿んだ、「ほらあすこに、ぐるりにベンチの置いてある大きな樹があるでせう？ あの樹のうしろを樂屋に見立てて、役者が坐るんですの。王様もあれば女王様もゐるし、王女だの青年だの——みんな好き好きの役を選んで、臺詞を思ひついた人から順に舞臺へ出て来て、口から出任せに喋るんですの。それでもどうにか芝居らしいものが出来ますわ。」

「それは素晴らしい！」と、再びヴェリチャーニノフは讃辭を呈した。

「あら嘘、とても詰まらないのよ！ 初めのうちこそ、いつもなかなか面白く出来るんですけど、お仕舞ひの方がきつと出鱈目になつちまふんですわ。だつて誰一人しめくりの附けられる人がゐないんですもの。でも貴方がいらしたら、もつと面白く行くに違ひありませんわね。實をいふと、あたしども貴方のことをパーヴェル・パーヴロヴィチのお友達とばかり思つてゐましたのよ。今になつて考へると、あれはみんなあの人の大風呂敷だつたんですねえ。あたし、あなたがいらして下つたので本當に嬉しいのよ……それにはちゃんと譯があるの——と彼女はひどく眞面目な。印象の深い眼つきでヴェリチャーニノフの顔をぢつと見たかと思ふと、すぐさまマリヤ・ニキーチシナの方へ行つてしまつた。

「きつと今晚は、諺ごつこがはじまりますわ」と、今まで彼がほとんど目にも留めなければまだ口を利いても見なかつた隣家の娘が、いきなりヴェリチャーニノフの耳に口を寄せて、さも内證話でもするやうな調子で囁いた、「今晚はきつと、皆んなであのパーヴェル・パーヴロヴィチをからかふに違ひありませんわ、あなたもさうなさいますわね。」

「あなたが来て下すつたんで、本當に嬉しいわ。あたし達いつもそりや詰まんないんですもの」と、また別の近所の娘が、さも親しげな調子で彼に話しかけた。これなどは今まで彼が完全に無視し去つ

てゐた娘で、それがひよつこりとこの時、どこからか姿を現はしたのでつた。赤つちやけた髪の毛をした少女で、雀斑だらけの顔を、暑氣と歩行とのため滑稽なほど上氣させてゐる。

そのあひだにも、パーヴェル・パーヴロヴィチの不安な氣持はますます募るばかりだつた。庭の散歩が終りに近づいた頃には、ヴェリチャーニノフはもうすつかりナーヂャと仲好しになつてしまつた。彼女はもう先刻のやうに白い眼でぢろぢろ眺めるどころか、どうやら彼の思想を仔細に點検することもやめにしたらしかつた。そしてただもう大聲で笑つたり、跳ねたり躍つたり、甲高い聲を立てたりして、彼の手を二度ほどぎゆつと握りしめさへしたのであつた。彼女はひどく楽しい氣持になつてゐて、パーヴェル・パーヴロヴィチの方などは相變らず見向きもせず、まるで目にも留まらないといつた様子だつた。ヴェリチャーニノフは、これはもう確かに何事かパーヴェル・パーヴロヴィチに對する陰謀が企まれてゐるに違ひないと見てとつた。現にナーヂャをはじめ一群れの少女が、ヴェリチャーニノフをとり圍んで離れた方へ連れて行き、他の別荘友達の一群体が色んな口實をつけてパーヴェル・パーヴロヴィチを別の方角へ誘つて行く——といつたことも、幾度となく繰り返されたのであつた。しかしその都度、パーヴェル・パーヴロヴィチは圍みを破つて、すぐさまヴェリチャーニノフやナーヂャのゐる方へ一目散に飛んで来て、不安さうな聽耳を立ててゐるその禿げあがつた頭を、いきなり二人の間につつ込むのであつた。しまひには彼はもう遠慮も會釋もなくなつてしまつて、時に

よるとその身振りや動作に、呆れるほどの子供っぽい頑是なさを發揮するのだつた。

一方ヴェリチャー・ニノフは、カテリーナ・フェドセーヴナの様子にも、あらためてもう一ぺん特別の注意を向けずにはをられなかつた。今ではもう彼女の眼には、ヴェリチャー・ニノフが自分を「見」やつて来たところか、もうすつかりナーヂャの方に氣をとられてしまつてゐることは、勿論はつきり映つてゐる筈であつた。それにも拘はらず、彼女の顔には先刻と同じく、依然として優しい柔和な色がたたへられてゐるのであつた。自分もみんなの傍にゐて、新來の客の話に耳を傾けてゐる——それだけでも彼女は十二分の幸福を感じてゐるらしかつた。いじらしいこの娘は、自分ではどうしても巧みに一座の話に割つてはいる術を知らないのだつた。

「あのカテリーナ・フェドセーヴナといふ姉さまは、實に素晴らしい方ですわねえ！」とヴェリチャー・ニノフは、思ひだしたやうにナーヂャの耳に囁いた。

「まあ、カーチャ姉さまのこと！　カーチャ姉さまみたいな美しい氣持には、誰だつてとてもなれはしませんわ。あたし達みんなの天使なのよ。あたしはあの姉さまがとても好きなんですの」と、ナーヂャは嬉しくて堪らなさうな顔で答へた。

やがて五時の夕食の時刻になつた。そしてやはりこの食事までが、普通の獻立てではなくて、今日のお正客のため特に心をくばつたものであることは、一見して明かだつた。ふだんの獻立てにてつき

り付け加へたものに相違ないと睨まれるなかなか凝つた料理が、二皿も三皿も出て来たし、なかの皿などは實に何とも風變りな料理で、果たして何料理を名づくべきか誰ひとり見當がつかなくなつた程であつた。食卓用の普通の酒類のほか、これもやはり今日のお正客のため特に用意したに相違ないトカイ葡萄酒の一本があつた。おまけに食事の終りごろには、どういふ心算だかシャンパンまでが現はれた。ザフレイベニンは杯の度をすごして、すつかりいい御機嫌になつてしまひ、ヴェリチャー・ニノフの言ふことに一々快い笑聲を立てるやうな始末だつた。やがての果てにパーヴェル・パーヴロヴィチは、たうとう腹を据ゑ兼ねてしまつた。競争心に驅られて、彼は不意に、自分も何か洒落を言つて見ようといふ氣になつて、實際それをやつてのけたのである。彼は遙か末座のザフレイベニナ夫人の傍に坐つてゐたのだつたが、突如としてそこに、すつかり喜んでしまつた少女達の高笑ひが涌き起こつたのである。

「お父様、お父様！　パーヴェル・パーヴロヴィチも洒落を仰しやいましたわよ」と、中の娘が二人して二齊に囁し立てた。「あたし達のことを『驚くに堪へたる妙なる乙女……』ですつてさ。」

「ほほう、トルソツキイさんまでが洒落を言はれるとは！　で、どんな洒落を言はれたのかな？」と、一向振るはぬパーヴェル・パーヴロヴィチを引立ててやるやうに彼の方へ顔を向けて、さてどんな洒落が出るのかと聞かぬ先からにこにこしながら、老人は落ち着きはらつた聲でさう應じた。

「あのね、かう仰しやつたんですわ、私達のことを『驚くに堪へたる妙なる乙女』ですつて。」

「なある！ さてそこで？」老人はまだ解せず、一層人のよささうな笑みを浮かべながら、その續きを待ち受けた。

「まあお父様つたら、お分かりにならないのねえ！ だつてほら、驚くに堪へたると仰しやつて、それから妙なるでせう。『堪へたる』と『妙なる』とは語呂が同じぢやありませんの。驚くに堪へたる妙なる乙女……。」

「は、はあ！」と老人はてれくささうに、音を長く引つばつた、「ふうむ！ いや、——この次はまそつと増しなのが承れるぢやらうて！」さう言つて老人はさも愉快さうにからからと高笑ひをした。

「パーヴェル・パーヴロヴィチ、まったく羅馬は一日にして成らずですわねえ！」とマリヤ・ニキーチシナが透かさず大聲で野次つたが、「あらあ、大變だわ、トルソツキイさんが咽喉に骨を立てちやつた！」と、金切聲をたてて、いきなり椅子から跳びあがつた。

忽ち上を下への大騒動になつたが、それこそマリヤ・ニキーチシナの思ふ壺だつたのである。實のところはパーヴェル・パーヴロヴィチは、てれ隠しに大急ぎで飲んだ酒にむせただけの話だつたのであるが、マリヤ・ニキーチシナは眞顔をして、まはりの人々に向かつて『お魚の骨ですわ、私ちやんとこの眼で見たんですの、お魚の骨を立ててよく死ぬことがあるんですよ』と、しきりに言ひ張るのであつた。

であつた。

「背頸を叩くといひ！」と誰やらが叫んだ。

「全くだ、それが一番ぢやな！」とザフレービニ老も大きな聲で賛成したが、もうその時には志願者が續々として現はれてゐた。曰くマリヤ・ニキーチシナ、曰く例の赤毛の別荘友達（彼女も夕食に招かれてゐたのである——）、つづいてはこの騒ぎに氣も動揺したこの家の主婦といつた具合で、先を争つてパーヴェル・パーヴロヴィチの背頸を叩かうとつめ寄せた。跳びあがるやうに食卓を離れたパーヴェル・パーヴロヴィチは、叩かれまいと身をよじりながら、いやほんの酒に噎せただけですよ、咳だつてちぎに止まつてしまひますと、陳辯これ力めた擧句に、やつこのことで一同も、扱てはマリヤ・ニキーチシナの仕組んだ狂言だつたのかと思ひ當たつたものの、それまでにたつぷり五分はかかつてしまつた。

「まあ、あんたも随分おいたさんねえ！……」とザフレービニ夫人はわざと聲を尖らせて、マリヤ・ニキーチシナをたしなめに掛かつたが、すぐに我慢がなくなつて、ほろろと笑ひ崩れてしまつた。滅多に聲を出して笑つたことのないこの人までが笑ひ出したので、これまた一種のセンチシオンを捲き起こした次第であつた。やがて食事が済むと、一同は珈琲を飲みにとやどやとバルコンへ出て行つた。

「だが實にいい天氣が続くもんですなあー」とザフレービニンは頗る満足さうに庭を眺めながら、しみじみした調子で天の配劑を讚へた、「これで少々雨が降つて呉れさへしたら……では一つ御免を蒙つて、私はあちらへ休息に参ります。皆さん御機嫌よう、大いに愉快に騒いで下さい！ あんたも愉快にやつて下さいよ！」と彼は出て行きしなに、パーヴェル・パーヴロヴィチの肩をぽんと叩いた。ふたたび一同が庭へ下りたとき、パーヴェル・パーヴロヴィチは矢庭にヴェリチャーニノフの傍へ駆け寄つて、ぐいぐいとその袖を引きながら、

「ちよつとお耳を」と、苛だたしげに囁いた。

二人はそのまま、人氣のない庭の脇道へまがつた。

「いや、此家へはもう御遠慮を、いや此家へはもう斷じて……」と、彼は激怒のあまり咳き込みながら、ヴェリチャーニノフの袖をつかんで囁いた。

「何です？ 何のことです？」と、ヴェリチャーニノフは目を丸くして訊き返した。パーヴェル・パーヴロヴィチは無言のまま彼を見つめて、何か物言ひたげに唇を動かし、やがて忿怒に燃えた笑みを洩らした。

「どこへいらしたのよう？ そんな所で何をしてらつしやるのよう？ もうすっかり仕度が出来ましたのよ！」と、二人を呼ぶ待ち遠しさうな少女達の聲が聞こえた。ヴェリチャーニノフはちよいと

肩をすくめて(譯者註。チエツと
いつた風の身振り)連中の方へ歩みを返した。パーヴェル・パーヴロヴィチも小走りに後からついて來た。

「當てて見ませうか、あの人あなたに鼻拭きを借せつて言つたんでせう？」とマリヤ・ニキーチシナが言つた、「こないだも忘れて來たのよ。」

「何時でもさうなのよ！」と、中の妹の一人が透かさず後をつけた。

「ハンカチを忘れたんですつて！ パーヴェル・パーヴロヴィチがハンカチを忘れたんですつて！ お母さま、パーヴェル・パーヴロヴィチがまた鼻拭きを忘れたんですつてよう！——お母さま、パーヴェル・パーヴロヴィチがまた鼻風邪をおひきになつたわよう」と、色んな聲がそれに續いた。

「ぢや何故はやく仰しやつて下さらないんだらうねえ！ ねえ、パーヴェル・パーヴロヴィチ、あなたも随分つまらない遠慮をなさる方ですわねえ！」とザフレービニナ夫人は歌でも唄ふやうに聲をひきのばした、「鼻風邪だつても油断はなりませんよ。今すぐハンカチを持たせて寄越しますわ。だけど、何だつてああ何時も何時も鼻風邪ばかり引いてるんだらうねえ？」と彼女は、家の中に引つ込む機會の生じたのをこれ幸ひとその場を外しながら、獨り言のやうに附け加へた。

「ハンカチなら二枚も持つてゐますよ、それに鼻風邪なんか引いてやあしませんよ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは夫人の後姿へ向けて叫んだが、先方は聞きとれないらしかつた。それから一分

ほどして、パーヴェル・パーヴロヴィチが連中のあとについて、次第次第にめざすナーチャとヴェリチャー・ニコフの方へ近づきながら、ひよろひよろと足を運んでみると、息せき切つた小間使が彼に追いついて、果たしてハンカチを持つて来た。

「さあ始めませうよ、始めませうよ、諺ごつこを始めませうよ！」と、そこから声が起つた。まるで何かしら途轍もない面白いことが、この『諺』から出て来でもしうな、はしやぎ込んだ聲であつた。

ほどよい場所を選んで、みんなはベンチに腰をおろした。マリヤ・ニキーチシナが鬼に當つた。そして、立聴のできないやうに成るだけ遠方に行つてゐるやうに命令された。彼女のゐない留守に、みんなは或る諺を選び出して、なかの言葉の受け持ちをきめた。マリヤ・ニキーチシナは戻つて来ると忽ちのうちに當ててしまつた。その諺といふのは、

『苦しい浮世に神のお恵み』といふのであつた。

マリヤ・ニキーチシナの次には、青眼鏡をかけて蓬々の髪をした青年が、鬼になつた。彼には前よりも一層きびしい用心が要求された。つまり向ふの四阿あつまのところ立つて、おまけに顔をすつかり垣根の方へ向けてゐるやうに申し渡されたのである。陰氣くさい青年は、さも馬鹿馬鹿しいと云つたやうな、多少は道徳的侮蔑をさへ感じたやうな様子で、しぶしぶ皆の言ひつけ通りにした。やがて呼戻

された彼は、全然あてることが出来なかつた。そこでもう一ぺん皆の前を廻つて、二度づつ文句を繰返して貰ひ、そして長いこと陰氣に考へ込んだが、やはり結局ものにならなかつた。で皆んなからさんざからかはれた。その諺は、

『神には祈禱、君には忠義、しよせん無駄にはならぬもの！』といふのであつた。

「ちえつ、なんて厭らしい諺だ！」と、恥を搔かされた青年は、自分の席へ引き退りながら、忌々しげにぼそついた。

「ああ、つまらない！」といふ聲がそここでした。

ヴェリチャー・ニコフの番になつた。彼はもつと遠くへ追ひやられた。そして彼もやはり當てることのできなかつた。

「ああ、つまらない！」といふ聲が前よりも澤山きこえた。

「ぢや今度は私になるわ」とナーチャが言つた。

「だめよ、だめよ、今度はパーヴェル・パーヴロヴィチだわ。パーヴェル・パーヴロヴィチの番だわ」とみんなは口々に叫んで、やや活氣づいて来た。

パーヴェル・パーヴロヴィチは、庭の一ばん隅つこにある垣根のところまで連れて行かれて、向ふむきに立たされた上に、後ろを向かない用心に例の赤毛の娘が見張りにつけられた。パーヴェル・パ

「ヴロヴィチはこの時はもう元氣を取り戻して、殆んど前どほりのはしやいだ氣分に返つてゐたのでこの言ひつけを嚴守するつもりで、垣根を睨んだまま四邊を見廻さうともせず、ちつと切株のやうにつつ立つてゐた。赤毛は二十歩ほど後方の、つまりそれだけ連中のあるところに近い四阿の傍で彼を見張りながら、妙にそはそはした様子で、何かしきりに少女たちと目配せを交はしてゐた。残つてゐる連中もやはり何事かを待ち設けるらしく、幾ぶん不安さうな様子でさへゐることは、明かに見てとられた。つまり何事かが畫策されつつあつたのである。と突然、赤毛が四阿のかけで手を振つた。それを見ると一同は、ぱつと立ちあがつて、別の方角に一目散に駈けだした。

「いらつしやいよ、あなたもいらつしやいよ」と、彼の駈けださないのがさも一大事だといはんばかりの語氣で、十人ほどの聲がヴェリチャーニノフに囁いた。

「どうしたの？ え、どうしたのさ？」と彼女たちに續きながら、彼は尋ねるのであつた。

「しつ、聲を立てちやいけません！ あの人をあのまま立たせて、いつまでも垣根と睨めつくらをさせとくのよ。その間にみんな逃げ出しちまふの。ほら、ナスチャも逃げて來たでせう。」

赤毛のナスチャは、何事か一大變事が突發したやうな勢ひで、一目散に駈けだしながら、しきりに手を振つてゐた。やがて一同は、庭のまるで反對の隅にある池の向ふ側まで駈けて來た。ヴェリチャーニノフもそこまで來てみると、カテリーナ・フェドセーヴナがちやうど少女一同を相手に、殊に

ナーヂャとマリヤ・ニキーチシナを相手に、烈しい口争ひをしてゐるところだつた。

「カーチャ姉さま、お願ひだから怒らないでよ！」と云つて、ナーヂャは姉に接吻した。

「ぢやいいわ、お母さまには申し上げないできますけどね、私はもう向ふへ行きますよ。こんな悪いことをするんですもの。ほんとにお氣の毒な。あの方が垣根のところどころでどんな氣がなさるか、考へて御覽なさい。」

彼女は氣の毒さに堪へ兼ねて、向ふへ行つてしまつたけれど、残つた連中はみんな相變らず、情容赦もない頑固な氣持でゐた。パーヴェル・パーヴロヴィチが戻つて來ても、彼には注意を向けたりせず、みんなと同じにまるで何事もなかつたやうな知らん顔をしてゐること——と、ヴェリチャーニノフも嚴重に申し渡されてしまつた。

「その間にみんな鬼ごつこをしませうよ！」と赤毛が有頂天になつて叫んだ。

パーヴェル・パーヴロヴィチが連中とふたたび一緒になつたのは、それから少くも十五分はたつた後のことであつた。その時間の三分の二は、きつと垣根の傍に立ちつくしてゐたに相違なかつた。鬼ごつこは今しもたけなはで、頗る成功を博し、みんなはきやつきやつと盛んに浮かれ騒いでゐた。忿怒のあまり前後を忘れたパーヴェル・パーヴロヴィチは、いきなりつかつかとヴェリチャーニノフの傍へ歩み寄ると、またもや彼の袖をひつつかんだ。

「ちよつとお耳を！」

「まあまあ、この人つたらまたちよつとお耳をですつて！」

「またハンカチが借りたいんでしょ」と、二人の背後から少女たちは口々に囁し立てた。

「いや、今度こそはもう貴方ですぞ。今度といふ今度は、どうしても貴方ですぞ。あなたのせいですぞ……」とパーヴェル・パーヴロヴィチはさう言ふひまにも、齒をがちがちと鳴らしてゐた。

ヴェリチャーニノフはいきり立つ相手を遮つて、もつと陽氣になりなさい、さもないと連中は愈々いい氣持になつて貴方をからかふばかりだらうと、穏やかな口調で説きなだめた。「みんな面白く騒いでゐる中で、あなただけがぷりぷりしてるもんだから、却つて面白がつてからかふんですよ」と忠告してやつた。するとパーヴェル・パーヴロヴィチは全く豫想外なほど、烈しく彼の言葉や勸告に動かされてしまつた。彼は忽ち鎮まつてしまつたのみならず、いかにも濟まなさうな面持ちでしほしほと連中のところへ戻つて来て、おとなしく遊びの仲間にはいつた。それから暫くのあひだは彼も無事で、みんなは別に彼をのけ者にもせず遊びで呉れたので、三十分とたたない内に彼は再び、ほとんど元どほりの陽氣さを取り戻した。遊びの間ぢう、彼は相手を選ぶ必要のある場合には、自分を裏切つた例の赤毛か、さもなければザフレレービン家の娘の一人を選んで申し込むのであつた。そればかりか、ヴェリチャーニノフが更に意外に感じたのは、パーヴェル・パーヴロヴィチが、ナーチャのす

ぐ傍や程遠からぬあたりに絶えずつき纏つてゐるくせに、殆んど一度も思ひ切つて彼女に話しかけようとはしなかつたことであつた。その様子で見ると彼は少くも、彼女に輕蔑され切つて一顧も與へられずにある吾が境涯を、自分にとつては當然でもあり自然でもあるかのやうに、甘受してゐるのだつた。とはいへ遊びが終りに近づいた頃、彼は又してもみんなに一本乗せられることになつてしまつた。そのときの遊びは『隠れんぼ』であつた。一たん隠れても、許された範囲内ならば何處へなりと隠れ直していいことになつてゐた。こんもりした藪へ這ひ込んで首尾よく隠れた。パーヴェル・パーヴロヴィチは、隠れ直さうとそこを抜け出した途端に、家の中へ飛び込んだらと思ひついた。うしろで叫び聲がした。彼は見附けられたのである。そこで彼は大急ぎで梯子段を傳はつて、中二階へ潜り込んだ。その簞笥のうしろに屈竟の場所のあることを知つてゐたので、そこへ隠れようと思つたのである。ところが赤毛が彼のうしろから昇つて来て、爪先だてて扉へ忍び寄ると、がちやりと錠をおろしてしまつた。一同は直ぐさままた先刻のやうに遊戯を中止して、又もや庭の向ふの隅つこにある池の對岸へ走つて行つた。十分ほどしてから、パーヴェル・パーヴロヴィチは誰も捜しに來ないのに氣づいて、小窓から外を覗いてみた。庭には誰もゐなかつた。寝てゐる兩親の目をさますのも憚られて、彼は大聲をあげる譯には行かなかつた。小間使や女中たちには豫め、パーヴェル・パーヴロヴィチが呼んでも誰も行つてはいけない、返事をしてはいけないと、嚴命が下されてゐた。カテリーナ・

フェドセーヴナなら開けても呉れるだらうが、相憎と彼女は自分の部屋に引きとつて、椅子によつてうつらうつらと夢想に耽つてゐるうちに、やはり何時の間にか寢入つてしまつてゐたのである。といふ次第で彼は小一時間も閉ぢ込められてゐることになつた。やがてそのうちに、偶然そこを通りかかつたやうな振りをして、娘たちが二人三人と、姿を見せはじめた。

「あらパーヴェル・パーヴロヴィチ、あなたどうして私達のところへいらつしやらないの？ 今とつても面白いことをしてるのよ！ 芝居ごつこをしてるところなの。アレクセイ・イヴァーノヴィチが『青年』の役をなすつたのよ。」

「パーヴェル・パーヴロヴィチ、本當にどうしていらつしやらないのよ。あなたこそ驚くに堪へたる妙な方ぢやなくて！」と、通りかかつた他の娘たちが冷かした。

「何ですわねえ、また驚くに堪へたるの何のつて？」と、突然そこへザフレービニナ夫人の聲がした。彼女は今しがた目をさまして、お茶の用意のできるまで庭へ出て、『子供たち』の遊戯を見物しようと、やつとのことで決心して出て来たところであつた。

「だつてそら、パーヴェル・パーヴロヴィチつたら」と言ひながら娘たちの指さした小窓を見ると、そこには憎悪に蒼ざめたパーヴェル・パーヴロヴィチの顔が、歪んだ微笑を浮かべながら外を覗いてゐた。

「まあ物好きな人もあるもんだねえ、みんなが面白く遊んでるのに一人で引込んでるなんて！」と、母親は不満さうに首を横に振つた。

その間にヴェリチャーニノフは、先刻ナーヂャが言つてゐた『あなたが来て下さつて本當に嬉しいわ、それにはちやんと譯があるの』といふ言葉についての説明を、遂に彼女の口から聞く光榮に浴した。その説明はとある人氣のない並木道で行はれた。マリヤ・ニキーチンナは、ヴェリチャーニノフが何かの遊戯に加はりながら既にひどく退屈を覚えてゐる様子を見ると、彼をわざわざ呼び出してこの並木道へ連れて来て、ナーヂャと二人きりにして呉れたのであつた。

「あたしもうすっかり分かつてしまつたのよ」と彼女は、少しも悪びれたところのない辯舌で頗る早口にまくし立てはじめた。「あのパーヴェル・パーヴロヴィチはあなたのことを友達だなんて盛んに自慢してたんですけど、そんなことまるでありませんわね。でね、あたし貴方のほかには誰一人、あたしの大事な大事な願ひを叶へて下さる方はないと思ひますの。それはね、ほら先刻のあの厭な腕環ね」と言つて彼女はかくしから例のケースを取り出して、「これを本當に申し兼ねますけど、すぐあの人に返して下さらないこと。だつてあたし、もう一生あの人とはたとへ何事があつても斷然口を利かないつもりなんですもの。それからね、これはあたしから頼まれたといふことも仰しやつて頂きますわ。それからもうこの先二度とふたたび贈物なんて大それた眞似はして頂きますまいつて、さう

言ひ添へて下さいましな。その他のことは、ほかの人からうんとあの人に言つて貰ふつもりですわ。いかが、あたしの願ひを叶へて下さいますか？ 承知して頂きますか？」

「ああ、そればかりは後生です、勘辨して下さい！」とヴェリチャーニノフは両手を振つて、殆んど叫ぶやうな聲を立てた。

「まあ！ なぜ勘辨ですの？」ナーチャは彼の拒絶に逢つてひどく吃驚してしまひ、眼をみはつて彼を見つめた。落ちつき澄ましてゐた調子は一瞬にして崩れ、今ではもう泣かんばかりになつてゐた。ヴェリチャーニノフはからからと笑つた。

「いや、私だつて別にその何ですよ……お受けしたいのは山々なんですがね……ただあの男とは實はちよつと込み入つた事情が……。」

「あなたがあの人はお友達ぢやないことも、みんなあの人の嘘八百だつたことも、ちやんと承知してゐますわ！」とナーチャは怫然として素早く遮つた。「あたしは決してあの人のお嫁になんかなりませんわ、これははつきり申し上げときますわ！ ええ、決して！ 第一あたしには譯が分からないの、何だつてあの人はそんな大それたことを考へつゝいたんだか……。それはさうとして、兎に角あなたは、この厭らしい腕環をあの人に返して下さいさうなくちやいけませんわ。さもないと、あたしどうしたらいいか分かりませんもの。私どうしても、どうあつても今日のうちに、今日この日のうちにあれを返して来た。」

返してやつて、ぎやふんといふ目に逢はしてやらないぢや承知できないの。もしそれでお父様にでも言つてたりしたら、それこそ益々面白いわ」

するとその時、傍の繁みの中から、例の髪を蓬々にした青眼鏡の青年が、だしぬけにぱつと飛び出して来た。

「あなたは是非ともその腕環を返さなくちやいけませんよ」と彼は、猛烈な勢でヴェリチャーニノフに喰つてかかつた。「女性の権利を尊重する意味からだけでもですな、もし貴方がこの問題の意味を正しく把握なさるならば……。」

しかし彼は最後まで言ひきる暇がなかつた。ナーチャがその袖を力一ぱいぐいぐいと引つ張つて、彼をヴェリチャーニノフから引離したのである。

「まあまあ、何てお馬鹿さんなの、ブレドポスイロフ！」と彼女は叫んだ、「向ふへいらつしやい！ 向ふへいらつしやい、さ、向ふへいらつしやいつてば！ そして立聞きなんかするんぢやありません。ずつと離れて立つてらつしやいと、言つて置いたぢやないの！……。」彼女は小さな足で地團太を踏みながら彼を追ひ立てた。そして彼がふたたび元の繁みの中へ潛り込んでからも、ナーチャは相變らず眼をきらきらと光らせて、両手を前に合はせて組んで、まるで吾を忘れたもののやうに、庭の小徑を筋かひに行きつ戻りつしつづけてゐた。

「あの人達つたら實にお馬鹿さんですわ、貴方にはとても本當とは思へないくらゐ！」さう言つて彼女は、急にヴェリチャーニノフの前にびたりと歩をとめた。「貴方は、ほら、笑つてらつしやるわね。けど私の身にもなつて御覽なさいまし！」

「けれど、今の人は別でせう、今の人は別なんでせう？」と、ヴェリチャーニノフはにやにやした。

「そりや勿論、今の人は別なの。けど、よくお當てになつたわねえ！」とナーチャは微笑んで、ほつと頬を紅らめた。——「あたしの言つたのは、今の人のお友達のことなんです。でもそこが妙なんですのよ、あの人の選ぶお友達と來たら、そりや變てこな人ばかりですの。そのお友達が寄つてたかつて、あの人のことを『未來の大立物』なんて言ふんですけど、私にはさつぱり譯が分かりませんわ。……アレクセイ・イヴァーノヴィチ、あたし誰一人として頼み込む人がありませんの。さあ最後のお返事を聞かせて頂戴、返して下さる、それともお厭？」

「ぢや承知しました、返しませう。こつちへおよこしなさい。」

「まあ、本當にいい方、本當に親切な方」と、彼にケースを渡しながら彼女は俄かにはしやぎ立つた、そのお禮に、あたし今晚ぢゆう歌をうたつて差上げますわね。本當をいふと私とても歌は上手なんですのよ。さつき音楽は嫌ひなんて言つたのは、あれは實は嘘でしたのよ。ああ、せめてもう一度

だけでも貴方が遊びに來て下さつたら、あたしどんなに嬉しいか知れやしませんわ。さうしたら私、もうすつかり何もかもお話ししますわ。今のやうな事だけぢやなしに、何もかもみんなお話ししますわ。だつて貴方はそりや親切な方ですもの。まるで……まるでカーチャ姉さまのやうに、親切な方なんですもの！」

そして本當に彼女は、みんなしてお茶を飲みにかへ戻つてから、小曲を二つも彼に歌つて聽かせた。それはまだ全く磨きのかかつてゐない、ほんの初歩程度の聲であつたが、それなりになかなか氣持のいい、力の籠もつた聲であつた。一方パーヴェル・パーヴロヴィチはどうかといふと、一同が庭から上がつて來たときはもう、分別らしい顔をして主人夫婦と一緒に茶の卓子の前に納まり返つてゐた。その卓子の上には既に家庭用の大きなサモヴァルがしゆんしゆん沸いて、セーヴル焼きの家族用の茶飲み茶碗が列べてあつた。恐らく彼は老夫婦を相手に頗る眞剣な問題を協議してゐたのに違ひなかつた、——何故なら彼は、明後日は當地を去つて、九ヶ月のあひだ戻つては來られなかつたからである。庭から上がつて來た連中、殊にヴェリチャーニノフには、彼は一瞥も呉れなかつた。また同時に彼がまだ『言つけて』はゐなかつたことも明かで、その場の空氣はまだまだ平穩であつた。

ところがナーチャが歌ひだすと、彼も早速みんなのゐるところへ顔を出した。ナーチャはわざと、彼の直接仕掛けてくる問ひには一切返事をしなかつたが、パーヴェル・パーヴロヴィチはそのため當

惑もしなければ動搖の色も見せず、平氣の平左だつた。彼はナーヂャの掛けてゐる椅子の脊のうしろに立つて、これは私の席だ、誰にだつて譲つてやるものか、と云つた顔で澄まし返つてゐた。

「アレクセイ・イヴァーノヴィチがお歌ひになりますよ、お母さま、アレクセイ・イヴァーノヴィチがお歌ひになるんですつて！」と、娘たちが殆んど總がかりでピアノの方へ押し寄せながら、口々に叫んだ。そのピアノの前にヴェリチャーニノフは、自分の歌に自ら伴奏をつけるつもりで、自信たつぷりの様子で腰をおろしたのである。老夫婦も聴きに出て来るし、彼等と一緒に坐つてお茶を注ぐ役をしてゐたカテリーナ・フェドセーヴナも出て來た。

ヴェリチャーニノフは、今ではほとんど誰にも知られてゐないやうな、或るグリンカのロマンズ小曲を選んで歌ひだした。――

よろこびの時おんみが唇をひらきて

鳩よりも甘くわれにささやけば……

彼はこの歌を、自分の肘のすぐ傍に、誰よりも身近かに立つてゐるナーヂャにだけ向けて歌つた。彼の聲にはもはや争ひがたい衰へがあつたが、その残んの聲から推してみても、昔はなかなかいい聲

だつたことは明かであつた。この小曲はヴェリチャーニノフが、二十年ほど昔、まだ學生だつた頃に、この今は亡き作曲家（譯者註。グリンカを指す）の友人の家で、グリンカその人の口から初めて耳にしえた歌なのであつた。それは、その友人の結婚前夜の別宴に文士や藝術家が相集つた席上であつた。興の乗つたグリンカは、自分の作品の中の氣に入つてゐる曲を残らず歌ひ且つ弾じたが、その中にこの小曲（ロマンズ）もはいつてゐたのである。その頃のグリンカもすでに聲は衰へてゐたけれど、ヴェリチャーニノフはその夜のこの小曲から受けた格別の感動を、ながく忘れることができなかった。いはゆる名人とかサロンの聲樂家などといふ連中には、とてもこれだけの感銘は生みつけられる筈がなかつた。この小曲には張りつめた情熱の息吹きが籠もらつてゐて、それが句を趁ひ語を趁つて次第に昂まつて行くのであつた。この異常な緊張の力が籠もらつてゐればこそ、ほんの僅かの調子外れ、ほんの僅かの誇張や不自然――それはオペラの舞臺などでは易易と合格してしまふものであるが――があつても、曲全體の意味は、眞實といふものが是非とも必要であつた、純眞にして充溢した感興が是非とも必要であつた、正銘の情熱、乃至はその完全な詩的攝取が必要であつた。それが缺けてゐると、この小曲はただに失敗に終るばかりでなく、却つてみつともない、殆んど破廉恥ともいふべきものになつてしまふに違ひなかつた。何故といふに、これほどまでの烈しい情熱の緊張の力を、嫌惡の情をそることなしに表白する

ことは不可能な筈ではないか。そこを救ふのがすなはち眞實と、そして誠心の力なのであつた。ヴェリチャーニノフは、曾ては自分も、この小曲を立派に歌ひこなせたことのあるのを記憶してゐた。彼はグリンカの歌ひぶりを殆んど吾が物にし得てゐたのであつた。それが今はどうだらう、そもそも最初の一音から、最初の一行から、はやくも正眞の感興の烈火までが彼の胸に燃えあがり、その聲にうち顫へるのであつた。小曲の一語一語を趁うて、實感はいよいよ力強く迸り、ますます大膽に露はれ、最後の數句になると殆んど情熱の絶叫が聞きとれるばかりであつた。そして彼がぎらぎらと異様に輝く眼差しをひたとナーヂャに向けたまま、小曲の最後の一節――

今ははやためらひもなく御身の眼に見入りて、

睦言を耳に聞く力も失せつ、唇さし寄せて、

われ欲りす、口づけを、口づけを、口づけを！

われ欲りす、口づけを、口づけを、口づけを！

を歌ひ終へたとき、ナーヂャはほとんど畏怖のためぶるりと身を顫はして、心もち身をすさつた程であつた。その頬にはさつと紅のがさし、それと同時にその含羞を帯びた、ほとんど怯氣づいてゐるや

うな可愛らしい顔に、何かかうほだされたやうな色がちらと浮かんで消えたやうに、ヴェリチャーニノフには思はれた。恍惚の色と、同時に當惑の色とは、聴き入つてゐた少女たち皆の顔にも浮かんでゐた。一同は、かうした歌ひぶりは許されぬことでもあり恥づべきことでもある、とでも思つてゐるらしかつたが、その一方ではまた彼女たちの可憐な顔も瞳もきらきらと燃え輝いて、まだ何かさうした曲を待ち望んでゐるやうでもあつた。さうした顔の並んでゐるなかでうつとりと上氣して殆んど凄艶の美をすら帯びたカテリーナ・フェドセーヴナの顔が、ひとしほ際だつてヴェリチャーニノフの眼をかすめた。

「いや、結構な小曲ロマンでしたな！」と、いささか畏れをなしたザフレービニン老が呟いた、「ただその……少々烈しすぎはしませんかな？ 結構ぢやあるが、少し烈し……。」

「烈し……。」とザフレービニナ夫人も相槌をうちかけたが、パーヴェル・パーヴロヴィチが中途でその言葉を邪魔してしまつた。彼は矢庭に前へ躍り出ると、まるで狂人のやうに、吾を忘れるに事缺いて、われと吾が手に禁斷のナーヂャの手をしつかとつかみ、彼女をヴェリチャーニノフの傍から引離して置いてから、つかつかと彼の前へ歩み寄ると、わなわなと顫へる唇をしきりにもづもづさせながら、茫然として彼の顔に見入つた。

「ちよつとお耳を」と、やがて彼は辛うじてそれだけを口にした。

もう一分間もそのままであらば、この紳士は恐らく十層倍も馬鹿げた振舞ひに及ぶ氣になるであらうことを、ヴェリチャーニノフははつきりと見てとつた。で彼は素早く相手の手をとると、満座の者の當惑さうな様子には眼も呉れずに、そのままバルコンへ連れ出し、更に五六歩ほど庭へ下りて行つた。庭にはもうかなり濃い闇が迫つてゐた。

「あなたは今すぐ、猶豫なしに、私と一緒にお歸り願ひます。お分かりですわね！」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは口早やに言つた。

「いいや、分かりませんね……。」

「覚えておいでせうね。」とパーヴェル・パーヴロヴィチは相變らず物狂はしい囁きをつづけた。「覚えておいでせうね、今朝がた貴方は、私の一切のことを、何もかもさつくばらんに、『最後の一言……』をまで打ち明けるやうに、御要求だつたぢやありませんか。ね、覚えておいでせう。ところで愈々その一言を申し上げる時が來たんですよ……だから歸つて下さい！」

ヴェリチャーニノフはちよつと思案し、もう一度パーヴェル・パーヴロヴィチの顔をじつと眺め、それから歸ることを承知した。

不意に二人が歸ると言ひだしたので、老夫婦の驚きはもとよりのこと、娘たちはみんなひどく白けた氣持になつてしまつた。

「ではせめて、もう一杯お茶を召しあがつてから……。」とザフレイベーナ夫人は悲しげな聲を出して引きとめた。

「ねえ君、何をさう激してをられるのかな？」と老人は不満さうな嚴しい語氣で、パーヴェル・パーヴロヴィチに話しかけたが、こちらはにやにや笑ひながら押し黙つてゐた。

「パーヴェル・パーヴロヴィチ、どうして貴方はアレクセイ・イヴァーノヴィチを連れてつてお仕舞ひになるの？」と娘たちは訴へるやうな聲で口々に言ひはじめたが、同時に怒りを含んだ眸を彼に注いでゐた。ナーチャになると、怨みに燃える眼で彼を睨みつける始末に、さすがの彼も今にもべそを掻きさうな顔をしたが、それでもたうとう我を折らなかつた。

「いや實はかういふ譯なんです。パーヴェル・パーヴロヴィチがね、有難いことに、私がすんでのことで忘れるところだつた或る非常に大切な用件を思ひ出させて呉れましたので」と、主人と握手しながらヴェリチャーニノフは笑顔を作つた。それから夫人や娘たちにお辭儀をしたが、カテリーナ・フエドセーヴナの前では何か特別の様子を示し、それが再び満座の眼にうつつた。

「私どもは今日の御訪問を忝く存じてをりますよ。そしてまたのお出でを一同たのしみに致してをりますよ」と、重みのある口調でザフレイベーナは言葉を結んだ。

「ええ、ほんとに楽しみにしてお待ち申し上げますわ……。」と夫人はしみじみした調子で良人のあと

を受けた。

「またいらしてね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ！ またいらしてね！」と、彼がパーヴェル・パーヴロヴィチと並んで馬車に乗り込んだとき、澤山の聲がバルコンから降つて来た。そのなかにまじつて、一ばん小聲で呼ぶ一つの聲が、かすかに耳に傳はつて来た——「またいらつしやいね、大好きな、大好きなアレクセイ・イヴァーノヴィチ！」

「あれは赤毛の犢だ！」とヴェリチャーニノフは心のなかで思った。

十三 重みはどつちに

彼はともかくも赤毛のことを考へる餘裕はあつたものの、一方では腹立たしさと後悔の念が、かなり前から彼の胸に重苦しくのしかかつてゐた。そのみならず、傍目にはいかにも面白可笑しく過した今日の一日ではあつたが、それでゐて憂愁は日ねも殆んど彼の胸を去らずにゐたのであつた。あの小曲をうたふ直前などは、その憂愁が極點に達した時で、彼は身の置き場に窮してゐたのである。だからこそあれほどの熱を籠めて、歌ひ通せたのだらうけれど。

「よくも俺はあまで自分を卑しめることが出来たもんだ……大事なものから身を振りもぎることがな！」と彼はわれとわが身に譴責の筈をあげはじめたが、あはててまた自分の想念を断ち切つた。第一めそめそすることが恥辱だと彼には思はれたのである。そんなことより、早く誰かに向かつて痛癢玉を破裂させた方が、よつほど氣がせいせいする筈だつた。

「ばか野郎！」と彼は、馬車に並んで腰をおろして黙り込んでゐるパーヴェル・パーヴロヴィチを横目に睨み据ゑて、さう毒々しげに囁いた。

パーヴェル・パーヴロヴィチは頑強に黙りこくつてゐた。恐らくは一心を聚中して、言ふべきことの準備をしてゐるのであらう。時折り彼は、さも苛だたしげな手つきで帽子をぬいで、禿げあがつた額をハンカチでごしごし拭いた。

「ちえつ、湯氣を立ててやがる！」とヴェリチャーニノフは憎惡に燃えて呟いた。

尤もただ一度、パーヴェル・パーヴロヴィチは沈黙を破つて、馭者に問ひかけた。雷雨が来るだらうか、どうだらう？ といふのである。

「そりやあもう旦那、來ない段ぢやありませんや！ どうしたつて來ますさ。何しろ一ん日ぢう蒸しましたものね。」

まつたく、空は次第にかき曇つて、遠くの方で稻妻がしきりに光つてゐた。二人が都へ着いたのは

もう十時半だつた。

「私はお宅へお寄りしますよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、馬車がもう彼の宿までさう遠くはないあたりに來かかつたとき、豫告でもするやうな調子でヴェリチャーニノフに話しかけた。

「結構です。ただお断りして置きますがね、私は非常に気分が悪いもんですから……。」

「いや、長居は致しませんよ、長居は！」

馬車を棄てて門をはいりかけたとき、パーヴェル・パーヴロヴィチは、門番の詰所にゐるマーヴラのところへ小走りにちよつと立ち寄つた。

「なんだつて貴方はあそこへ寄つたんです？」と、やがて彼が追ひついて部屋にはいつて來たとき、ヴェリチャーニノフは厳しい語氣で訊いた。

「いや何、別にその……ただ馭者がね……。」

「今夜はお酒は飲ませませんよ！」

返事はなかつた。ヴェリチャーニノフが蠟燭をつけると、パーヴェル・パーヴロヴィチはすぐさま肘掛椅子に陣どつた。ヴェリチャーニノフは眉根を寄せて、その前に立ち塞がつた。

「私の方でも、私の『最後の』言葉を言はうとお約束しましたつけね」と彼は、漸く胸の底に動きはじめたが、まだまだ抑制のできる興奮を感じながら、口火を切つた、「その最後の言葉といふのは斯う

です。——私は良心に顧みて、私たち二人の間のこと是一切お互ひに帳消しになつたものと認める、従つて私たちはもはや何の語り合ふこともないと考へる。いいですか——何の語り合ふこともない、ですよ。であつて見れば、貴方はこのままお引き取りになつた方が好くはないですかね。さうしたら私は、貴方の出て行かれたあとにびんと錠をおろす。」

「ぢや一つ總勘定をつけますかね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは口走つたが、そのくせ何かしら特に柔和な眼つきで彼の眼に見入つてゐた。

「な、なに、總勘定ですと？」ヴェリチャーニノフはひどく愕いた、「妙なことを仰しやるぢやありませんか！ 一たい何の『總勘定』をするんです？ ははあ！ ぢや、それだつたんですね？ それが先刻あなたが……打ち明けようと約束なすつた、あなたの『最後の言葉』なんですかね？」

「正にその通りでさ。」

「だが、この上また總勘定をつけることなんかありませんよ。何しろ私たちは——とつくの昔に總勘定が済んでるんですからね！」と、ヴェリチャーニノフは威高げに言ひ放つた。

「本當にさうお考へですかね？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは何だか妙な具合に手を重ね、指と指とを組み合わせせて、それを胸のところへ當てがひながら、變に眞に迫つた聲を出した。ヴェリチャーニノフはそれには答へずに、大股に部屋の中を歩きはじめた。「リーザは？ リーザは？」といふ

聲が、彼の胸のなかに呻いてゐた。

「ぢや、とにかく伺ひますがね、一體何の總勘定をつけようと仰しやるんです？」と、かなり長い間の沈黙ののちに、彼は眉根を寄せながら相手を顧みた。トルソツキイは依然として胸のところに腕組みをしたまま、その間ぢうずつと彼のあとを眼で追つてゐた。

「もうあの家へは行かないで下さいよ」と、彼は哀願せんばかりの聲で殆んど囁くやうに言つて、いきなり椅子から立ちあがつた。

「何ですつて？ たつたそれだけの事なんですか？」ヴェリチャーニノフは意地の悪い笑聲を立てた。「いやはや、今日は一日ぢうあなたには度膽を抜かれどほしだ！」と彼は毒々しい口調で始めたが、途端にその顔つきはがらりと變つてしまつた。——「まあ聽いて下さい」と彼は物悲しげな調子で、深い率直の情を籠めて言葉をつづけた。「私はかう思ふんです、およそ今日くらゐ自分を卑しめ辱しめたことは、これまでに一度もないとね。——そもそも貴方と一緒に掛けることを承知したのが間違ひのもとだつた。つづいて彼處であつたことに至つては、全く言語道斷でした……。實にくだらない、實に淺ましい限りでした。……私はあんな連中と一緒になつて……。おまけに吾を忘れて……すつかり外道に踏み込んで、卑劣な眞似をしてしまつた。……が、然しです！」と彼は急に言ひ直した。「これだけは承知して置いて下さいよ、今朝あなたは、ちようど私が病氣でいらいらしてゐると

ころを、いきなりあんな風に襲はれたんですからねえ……いや、何れにせよ辯解の餘地はありませんや！ とにかく私はもう二度と再びあの家へは行きません。またあの家に何の未練もないことを、はつきり斷言して置きますよ」と、彼はきつぱりと言葉を結んだ。

「本當ですね、本當ですね？」と波立つ喜悅の情を包まうともせず、パーヴェル・パーヴロヴィチは叫んだ。ヴェリチャーニノフは侮辱の眼差しでその彼をちよつと眺めたが、又もや部屋の中を行きつ戻りつしはじめた。

「どうやら貴方は、是が非でもあの結婚を押しとほす肚と見えますね？」と、彼はたうとう堪へ切れずに一矢を放つた。

「實はさうなんです」とパーヴェル・パーヴロヴィチは無邪氣な調子で、小聲にさう肯定した。

『よしんば此奴が大たわけで、愚かなればこそ咬みついて來るのだとしたところで』とヴェリチャーニノフは心に思つた。『それが俺に何の關係がある？ 俺はやつぱり此奴を憎まずにはをられないのだ——たとへ憎むにも値しない木端野郎にしたところでだ！』

「私は、例の『永遠の良人』つて奴なんですか！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、さもさも自分を卑下したやうな卑屈な薄笑ひを浮かべながら口走つた。「私はね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、この言葉はすつと昔から知つてゐたんですよ。あなたがまだT市で私達と一緒に暮らしてをられた時

分に、あなたから伺つたもんですからね。そのみならず、あの一年のうちに貴方が仰しやつた言葉は、随分色々私の記憶に残つてをりますよ。だからこの前に、この部屋で貴方があの『永遠の良人』といふ言葉をいひ出された時も、私は早速はあと思ひ當たつたんですよ。」

マーヴラがシャンパンの壺とコップを二つ持つてはいつて來た。

「眞平御免なさい、アレクセイ・イヴァーメヴィチ、あなたも御承知のとほり、私はこれがないぢや居られないものでしてね。無禮な奴だなんて思はないで下さいよ。ただほんの路傍の、齒牙にかけるに足らん奴と思つて、お目こぼしを願ひますよ。」

「ええ……」とヴェリチャーニノフは嫌惡の色を浮かべながら承知した、「ただ申し上げて置きますがね、私は気分が悪いんですから……。」

「いや直ぐです、直ぐです、今すぐ、ほんの一分だけですよ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは急ぎ込んで、「後にも先にもたつた一杯だけ。何しろ咽喉がその……。」

彼は食るやうに一息ぐつと飲み乾して、また椅子に腰をおろした——殆んど柔和なと言つてもいいほどの眼つきで、ヴェリチャーニノフをちつと見やりながら。……マーヴラは出て行つた。

「ああ厭なさまだ！」とヴェリチャーニノフは呟いた。

「みんなあの別荘友達が焚きつけるんです」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは見る見る元氣づいて、いきなり威勢のいい聲を出した。

「え？ 何です？ ああさうか、貴方はまだあの事を……。」

「みんな別荘友達のせいでさ！ それに當人はまだほんのねんねですものね。ついそのお上品なところを見せようつてんで、ああして力み返るんでさ、それだけのことですよ！ なあに、却つてもう可愛いくらゐるもので。ところで、いざその——いざ結婚したとなつたら、私はもうあの娘の奴隷になるつもりなんですよ。世の中へ出て、ちやほやされて見りやあ……がらりと人柄が變つちまふもんださあ。」

「ところで、例の腕環を返さにやならんが！」とヴェリチャーニノフは、外套のポケットの中のケースをさぐりながら厭な顔をした。

「あなたは今しがた、私があゝの結婚を押し通す氣だなど仰しやいましたつけね？ いかにもその通り、アレクセイ・イヴァーメヴィチ、私には結婚の必要があるんですよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチはさも打明け話をするやうな、殆んど相手をしんみりさせずには措かないやうな口調で、言葉をつづけた、「でないとしたら、私は一體どうなるでせう？ ほれ、現にこの通りでさ！」と酒壺を指さして見せて、「しかもこれなんぞは、百ほどもある惡癖の中の一例に過ぎないんですからねえ。私は結婚し直して、新たに信念を手に入れない限りは、もう生きては行けないんですよ。信念を手に入れたら、

生まれ變つて眞人間になれると思ふんですよ。」

「だが、何だつてそんな事を一々私に報告なさるんです？」と、ヴェリチャー・ニノフは危く噴き出しさうになつた。とはいへ一方では、實に奇怪きはまることを耳にしつつあるやうな氣がしてゐた。「—「そんなら一つ伺ひたいもんですがね」と彼は叫んだ、「どういふ心算で私をあの家へ引つ張つて行つたんです？ この私を連れてつて、どうしようとなすつたんです？」

「ちよつと試しに……」と言ひかけて、パーヴェル・パーヴロヴィチは、なにやら急にどぎまぎしだした。

「何を試しにです？」

「その、どんな効果を來たすか……。だつて、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、何しろあの家に眼をつけて以來、まだほんの一週間なんですからねえ（彼はますます狼狽して來た）。そこへ持つて來て、昨夕あなたにお目にかかつたので、ふつとこんなことを考へたんです、「さうだ、俺はまだ一度もあの娘を、外部の世界に置いて、といふのはつまり、あの娘が私以外の男性と一緒にゐるところをですな、見たことがないぢやないか……」とね。いやはや今になつて見れば、實以て馬鹿げきつた考へですがね、餘計な考へですがね。ところが例の因果な私の性分で、さうと思つたらもう矢も盾も堪らなくなつちまつたんですよ……」

彼は急に顔を上げたかと思ふと、さつと紅くなつた。

「本當にこの男は本音を吐いてるんだらうかしら？」と、ヴェリチャー・ニノフは呆れて棒立ちになつてしまつた。

「で、結果はどうでしたかね？」と彼は先を促した。

パーヴェル・パーヴロヴィチは、にやりと甘つたるい、それでゐて何處か狡るさうな微笑を洩らし

た。「結局、ほんの可愛らしい子供に過ぎませんでした！ みんなあの別荘友達が悪いんです！——今日の貴方に對するあの馬鹿げた振舞ひだけは、ひとつ許して頂きたいものです、ねえアレクセイ・イヴァーノヴィチ。もう二度とあんな眞似は致しませんよ。それにもう決してあんな御迷惑もおかけしませんから。」

「また私もあの家には行きませぬしねえ。」とヴェリチャー・ニノフはにやりとした。

「その意味も含めて申し上げたんですよ。」

ヴェリチャー・ニノフは些かむつとした。

「ですがね、世間に男は何も私だけぢやありませんぜ」と、苛だたしげに彼は皮肉つた。パーヴェル・パーヴロヴィチはふたたび顔を紅らめた。

「そんな事を仰しやらないで下さいよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、何だか悲しい氣持になつちまひますもの。私が申すのも何ですが、つまりそれほどナヂェーヅダ・フェドセーヴナを尊敬してゐるんですから……」

「いやどうも、これは失禮、別にそんなつもりはなかつたんですよ。——私はただ、あなたがひどくその道にかけての私の腕前を買ひ被つてをられるくせに……しかもその……あれほどまでに誠心誠意わたしの徳義心を信用してかかられたのが……何だか變に思へるんですよ。」

「私があなを信用してかかつたのは、そりやあつまり、以前のこと……過去の事實に照らしてですよ。」

「と仰しやると、もしそれが本當なら、あなたは今でも私のことを、立派な紳士を考へてゐて下さる譯ですね？」さう言つてヴェリチャーニノフは、はたと歩みをとめた。もしこれがほかの時だつたら、彼は恐らく自分の唐突な質問のあまりの素朴さに、ぎよつとしたに相違ない。

「常々さう思つてをりましたよ」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは眼を伏せた。

「いや、その私は何も……そんなことを、つまりさういふ意味で申したんぢやないんですよ。——私が申したかつたのは、あなたがよしどんな……先入主を抱いてをられるにせよ……」

「さうです、先入主を抱いてゐるにもせよ、ですよ。」

「だが、ペテルブルグへいらした時のお氣持はどうだつたんです？」と、吾ながら常規を逸した好奇心を起こしたものだとは感じながら、しかもヴェリチャーニノフはもう、この問ひを發せずにはをられなかつた。

「そもそもペテルブルグへ出て來る時からして、あなたのことは立派な紳士と思つてをりましたよ。私は常々あなたを尊敬してをりましたよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは瞳をあげて、今ではもう少しの當惑の色も見せず、はつきりした眼つきで敵手を見つめた。ヴェリチャーニノフは急に怯氣づいてしまつた。今この際何事が持ち上がつては困る、況してやこれが自分から言ひ出した事柄であつて見れば、それに或る限界を越えて發展されては困ると、彼はひしひしと困惑を感じた。

「私はあなたといふ人が好きだつたんですよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは急に決心がついたやうに言ひ放つた、「あのT市での一年のあひだだつて、矢張り貴方が好きでしたよ。尤もあなたは氣がつかなかつたでせうがね」と、彼は些か顫へを帯びた聲でつづけた。その様子にヴェリチャーニノフは心底から顫へあがつてしまつた。——「私はあなたとはとても比べものにはならん詰まらん人間でしたから、従つてあなたの注意を惹くこともなかつた譯です。それに恐らくは、そんな必要もなかつたんでせうしね。ところで、あれから九年のあひだと云ふもの、

私は絶えず貴方のことが忘れられなかつたんです。何しろ私の一生に、あれほど意味ぶかい年はありませんでしたからね。(パーヴェル・パーヴロヴィチの眼は異様な輝きを帯びて来た。)——私はあなたの口にされた色んな言葉や格言、つまりあなたの思想が、忘れられなかつたんです。私はあなたのことを思ひだすたびに、崇高な感情に對して燃え立ち易い心をもつた教養ある紳士、高い教養と深い思慮とを兼ね備へた方、とそんな風に考へたものです。「大思想は大智よりも大情から生まれる」——これは貴方自身の言はれた言葉でした。あなたは忘れかも知らんが、私はちゃんと覚えてをりますよ。そこで私は、あなたを常々その大情の方と思つてをりました……従つてまた貴方を信じてゐた譯です——たとへ何事があらうともですな……」

ここまで来たとき、彼の下顎は急にわなわなと顫へた。ヴェリチャーニノフは全く怯えあがつてしまつた。相手のこの思ひがけない語氣は、如何なる犠牲を拂つても中斷する必要があつた。

「もう結構ですよ、どうぞパーヴェル・パーヴロヴィチ」と、彼は顔を紅らめて、苛だたしさにじりじりしながら呟いた。「何だつて、一たい何だつて」と、今度は急に大聲になつて、「何だつてあなたは、こんなに神経が興奮して殆んど熱に浮かされたみたいになつてゐる病人を捉まへて、さう絡んで來るんです、そしてぐいぐいと闇の中へ引きずり込むやうな眞似をなさるんです……そのくせ實のところは……實のところは——みんな貴方の描かれる幻影であり、妄想であり、虚妄であり、汚辱で

あり、不自然であるに過ぎんぢやないですか。それに第一、非常に誇張してゐるんだ——この誇張といふことが、何よりも恥づべきことなんですよ！ それに何もかも馬鹿げ切つたことばかりだ。一體われわれは二人とも、罪深い、卑しい、唾棄すべき人間なんですよ。……それに若しお望みとあれば、若しお望みとあれば、あなたは私が好きどころか、あべこべに腹の底から憎んで憎み切つてゐる證據を、立派にお目にかけても宜しい。それなのに貴方は嘘をついてゐるんです、嘘とは知らずに嘘をついてゐるんです。現にあなたが私をあの家へ連れてつたんだつて、花嫁を試さうなんていふへつ、何て思ひつきだ！)滑稽きはまる目的からぢや決してないんだ。——あなたは昨夜この私の姿を見ると、いきなりむらむらつとしちまつて、『へん、どうだい！ この娘が俺のものになるんだぜ。さあ一つ手が出せるものなら出して見ろ！』と、それが言ひたいばかりに、私にあの娘さんを見せて連れてつたんだ、それだけの話なんだ。——つまり貴方は私に挑戦して來たんだ！ そりや或ひは、あなたは自分でもさうとは知らなかつたかも知れない。だが貴方が暗々裡にさうした氣持を抱いてゐた以上、これはどうしてもさうなんだ。……それに又、憎惡の念を抱かずにあんな挑戦を仕掛けて來ることなんか、出来るものぢやないんだ。でつまり、貴方が私を憎んでゐたといふことになるんだ！」

さう大聲にまくし立てながら、彼は部屋の中を足早やにすしすし歩き廻つた。自分がいよいよパーヴェル・パーヴロヴィチ風情と同列にまで身を落としたのだといふ屈辱的な意識が、他の何よりも彼

にとつて腹立たしくもあれば辛くもあつた。

「私はあなたと仲直りをしようと思つたんですよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ！」と相手は突然きつぱりした語氣で、早口に囁いた。彼の下顎はふたたびくびくと顫へだした。一方ヴェリチャーニノフは狂氣のやうな忿怒に捉へられてゐた。まるで、これまで一度として誰からも、これほどの侮辱を受けた例はない、といつた劍幕だつた！

「もう一度言はせて貰ひませう」と彼は咆え立てた、「あなたといふ人間は、神経の苛だつた病人に……絡んで来て、相手が熱に浮かされてるのをいい事に、何か飛んでもない言葉を吐き出させようとかかつてゐるのだ！ われわれはお互ひに……お互ひに別々の世界に住む人間なんです、そこを確と心得て頂きますよ。そして……そして……お互ひの間には一つの墓が横たはつてゐる！」と、狂氣のやうに囁いて、突然はつと吾に返つた。……

「だが、どうして貴方に分かりませう？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは急は引歪んだ顔附をして、みるみる眞蒼になつた。——「どうして貴方に分かりませう、その小さな墓が、私の……ここに……とつてどんな意味を持つてゐるかが？」と叫びざま、彼はヴェリチャーニノフの方へ歩み寄り、滑稽な、しかし慄然とさせるやうな身振りで、拳を固めて心臓の上を叩いた、「私はここにある一つの小さな墓を知つてゐます、そしてわれわれ二人はその墓の兩側に立つてゐるんですが、但し私の方があ

なたの側に比べるとずつと重いんです、重いんですよ……」と、依然として心臓の上を叩きつづけながら、彼はまるで謔言のやうに囁いた、「重いんです、重いんです、——ずつと重いんです……」。

突然そのとき、扉口の鈴がちやりと只ならぬ音を立てて鳴らされたので、二人ははつと吾に返つた。その鳴らしやうの亂暴さといつたら、まるでそこに立つてゐる何者かが、最初の一撃でその鈴を引きちぎる決心でゐるかのやうだつた。

「私のところへ来る人であんな鳴らし方をする人はない筈だが」と、ヴェリチャーニノフは困惑の色を見せて呟いた。

「私のところへだつてそんな人は來ませんよ」と、これも矢張り正氣づいて元のパーヴェル・パーヴロヴィチに返つたトルソツキイが、おぼおぼと囁くやうに言つた。

ヴェリチャーニノフは眉をひそめて、扉を開けに行つた。

「たしかヴェリチャーニノフさんでしたね？」と控間の方から、若々しい、びんびんするやうな、人並外れて鼻つ柱の強さうな聲が聞こえて來た。

「何の御用です？」

「實は」と、びんびんする聲がつづけた、「只今お宅にトルソツキイ某なる者が伺つてゐることを、確かに突きとめて參つた者です。私は是非ともあの男に即刻會見しなけりやならんのです。」

勿論ヴェリチャーニノフは、この鼻つ柱の強い青年を即座に思ひつきり梯子段めがけて蹴飛ばしてやつたら、さぞ痛快だらうと思つた。だが彼はちよつと思案して、身をわきへ寄せると、そのまま彼を通した。

「トルッソツキイさんはあちらにゐます、おはいりなさい……。」

十四 サーシエンカとナーヂェンカ

部屋へはいつて来たのは非常に若い男で、年の頃は十九ぐらゐ、あるひはもう少し下かも知れない——と思はれるほど、その美しい、鼻つ柱の強さうに空うそぶいた顔には、初々^{はつはつ}しさが溢れてゐた。服装も相當なもので、少くもちゃんとした身装^{みづか}りをしてゐる。脊丈は中脊よりすこし高目で、捲毛をなして渦まいてゐる黒味がかつた濃い髪の毛と、ぐりぐりした、眞向から人を見つめる黒眼とが、彼の容貌のなかでは一際めだつてゐる。ただ難をいへば少々あぐらをかいた鼻で、おまけに天井を睨んでゐる。これさへなかつたら、さぞ美男子だらうにと惜しまれた。彼は堂々と威容を作つてはいつて来た。

「私はどうやら、トルッソツキイさんとお話をする——機會——を得たやうで」と彼すがは、落ち着き拂つた明晰な口調で、さも得意げに『機會』といふ言葉にわざと力を入れながら述べ立てた。つまりそれによつて、トルッソツキイ氏と話をすることが彼にとつて、何等の光榮でも満足でもあり得ないといふことを、相手に思ひ知らせようといふ肚と見えた。(譯者註。上掲の文句のうち「機會」の代りに「光榮」も「満足」といふ言葉を置き代へた形が、初對面の挨拶の定式である。)

ヴェリチャーニノフは段々と分かりかけて来た。パーヴェル・パーヴロヴィチもどうやら、臆ろげながら何か思ひ當たるところがある様子だつた。その顔には不安の色が浮かんでゐた。とはいへ健氣にも態度は崩さずにゐた。

「あなたを存じ上げる光榮を持たぬ私としては」と彼は尊大な調子で答へた、「別にあなたとお話をする筋合ひもない筈と存じますがな。」

「いや、先づ私の申上げることをお聴きとり願つて、それから御意見を承るとしませう」と青年は自信たつぷりの調子で、逆に訓すやうに言つてのけると、胸のところ^{むね}に紐でぶら下げてあつた鼈甲の折疊^{ルット}眼鏡を引き出して、それを眼に當てがふと、卓子のうへのシャンパンの壘^トをためつ透かしつた。さて悠々と酒壘の點検を終へると、彼は眼鏡をたたんで、改めてパーヴェル・パーヴロヴィチに向かつて口を切つた。

「アレクサンドル・ロボフ。」

「何ですか、そのアレクサンドル・ロボフといふのは？」

「私です。まだお聞きぢやありませんでしたか？」

「ありません。」

「尤もお耳にはいる譯もありませんからね。私はあなた御自身に關係のある重大問題を抱へて來たんです。ところで、御免を蒙つて掛けさせて頂きますよ、私は疲れて……」

「お掛けなさい」をヴェリチャーニノフは椅子をすすめた。しかし青年は、すすめられる前にちやんと腰をおろしてゐた。

胸のきりきりする痛みは募る一方であつたが、ヴェリチャーニノフはこの厚かましいちんぴら先生が面白くてならなかつた。その美しい、あどけない、薄くれなるの小さな顔には、何かしら微かながらナーヂャに似通つたところがあるな、と彼は思つた。

「あなたもお掛けなさい」と、向ひの席をぞんざいに顎でしゃくつて見せながら、若者はパーヴェル・パーヴロヴィチを促した。

「お構ひなく、私は立つてませう。」

「草疲れますよ。それからヴェリチャーニノフさん、あなたはもし何でしたら席をお外しにならな

でも結構ですよ。」

「外さうにも外し場がありませんね。何しろ自分の家ですから。」

「ぢや御隨意に。實をいふと私は、私がこの方かたと談判をしてゐるあひだ、あなたに立會つて頂きたい位なんですよ。ナヂェージダ・フェドセーヴナがあなたの事を、私の前でさかんに褒めちぎつてゐましたつけ。」

「ほほう！ そりやまた何時の間にそんなことを？」

「あなたが歸られたすぐ後です。私もやつぱりあすこの佳人でしてね。そこでと、トルウソツキイさん」と彼は、相變らずつ立つてゐるパーヴェル・パーヴロヴィチの方を向き直つた。「われわれ二人——つまり私とナヂェージダ・フェドセーヴナとはですな」と、不作法に肘掛椅子のうへにふんぞり返りながら、彼は齒のあひだで投げやりな不明瞭な發音をした。「久しい以前から互ひに將來を誓ひ合つた、相愛の間がらなのです。そこへ貴方が、二人の間へ邪魔にはいられた。で私は、あなたにお立退きをお勧めに上がったわけです。どうでせう、このお勧めに乗つて頂けますかね？」

パーヴェル・パーヴロヴィチはよろよろつとなつた。顔色はちいつと蒼ざめたが、すぐさまその唇には底意地の悪い微笑がにじみ出た。

「いや、とても乗れませんな」と彼はあつさりとい蹴した。

「あれだ！」と若者は脚を組み重ねて、肘掛椅子の中できくりと向きを變へた。
 「どこの誰方とお話してゐるかのさへ分からんのですからなあ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは附
 け加へた。「別にこの上お話をつづけることもあるまいと思ひますよ。」

さう言つてしまふと、彼もやはり腰かけることにした。

「だから草疲れますよと言つたぢやないですか」と若者はぞんざいな調子で一本參つて、「今しがた
 お耳に入れた筈ですがね、私の名はロボフ、そして私とナヂェージダ・フェドセーヴナとは、お互ひ
 に將來を誓ひ合つた仲だとね。——従つてあなたは、いま仰しやつたやうな、どこの馬の骨と話しをし
 てゐるのやら分らん、などといふことは言へない筈ですよ。また同時に、このうへ話を續ける必要が
 ないなどとも、やはり仰しやれる筈がないと思ふんです。假りに私のことは暫く措くとしても、事は
 あなたが鐵面皮にも追つかけ廻してをられるナヂェージダ・フェドセーヴナに關してゐるんですから
 ねえ。この一事を以てしても、既にお互ひにとつくり談判を遂げる充分の根據になるんですね。」

さうした文句を、彼は妙に氣障つぽく齒で漣しをかけるやうな不明瞭な發音で、言つてのけた。そ
 れどころか、まるではつきりと言葉をかけてやるにも足らん奴と、相手をみくびつてでもゐるやうな
 素振りだつた。のみならず又もや例の折疊^{フォルデ}眼鏡^{ネツト}を引つぱり出して、話の最中にちよいと何かの上
 かざして見たりした。

「ですがね、お若い方……」とパーヴェル・パーヴロヴィチは苛だたしげに大聲ではじめかけた。と
 ころがこの『お若い方』は透かさず相手の出鼻を折つべしよつた。

「向後いかなる場合といへども、私は斷じて私のことを『お若い方』などとは呼ばせませんがね、し
 かし今のところは一つ大目に見てあげませう。といふのは他でもない、貴方も御異存はないでせうが、
 私の若いといふことが貴方に對する重大な優越點なんですし、現に今日だつて、例の腕環の贈呈式を
 なすつた時には、せめてもうちよつびりでも若かつたらなあ、しみじみ思はれたに相違ないですか
 らねえ。」

「畜生、よく舌の廻る奴だ！」とヴェリチャーニノフはそつと呟いた。

「いづれにせよですな、あなた」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは言葉に威容を持たせて言ひ直し
 た。「私にはやつぱり、あなたの列擧された根據なるもの、——その、以ての外でもあり、且つはま
 た頗る疑はしい根據なるものが——以て討論を繼續する價值あるものとも思はれません。私の眼から
 見れば、好いたの惚れたのといくら仰しやつたところで、ほんの乳臭い、たわいもないものにか思
 へません。明日になつたら早速あの尊敬すべきフェドセイ・セミョーノヴィチのところへ出向いて、
 その邊のことを問ひ合はせることにませう。今夜はこれで御免を蒙りたいものです。」

「どうです、かういふ男なんだ！」と若者は今迄の調子が持ち切れなくなつて、血相變へてヴェリチ

チャーニノフの方を振り向きざま、相手の言ひ切るのを待ち兼ねたやうに叫んだ、「ペろりと舌を出されて、まんまとあの家から追ん出されたくせに、まだ性も懲りもなく明日は親爺さんのところへこの出かけて、僕たちのことを言いつけるつて言ふんだ！……あんたも随分と譯の分からん人ぢやありませんか（と今度はパーヴェル・パーヴロヴィチに）。そんなことをしたら貴方は、無理矢理に少女を掠奪する氣でゐるといふことを白状するやうなもんぢやありませんか？ それどころか、野蠻な社會状態のおかげで娘の支配權を握つてゐる慾呆け兩親の手から、あの娘ひとを買ふやうなもんぢやありませんか？ あの娘ひとからあんなにつけつけと輕蔑の色を見せつけられたんだから、もういい加減で諦めてもよささうなもんぢやないですかね？ 今日あなたが不作法千萬にも贈物にしたあの腕環だつても、もうちやんと突つ返してあるぢやありませんか？ この上どうしようつて言ふんです？」

「さあね、別に誰からも腕環なんか突つ返された覺えはないですな。第一そんなことがあつて堪るもんですか」とパーヴェル・パーヴロヴィチはぎくりとした。

「『堪るもんですか』もないもんだ。ヴェリチャーニノフさんから受取らないとでも仰しやるんですか？」

「ええ、畜生めが！」とヴェリチャーニノフは思った。

「いや實はね」と彼は顔をしかめて言ひ出した、「先刻ナヂェージダ・フェドセーヴナからね、あな

たにお返しするやうにつてこのケースを預かつたんですよ、パーヴェル・パーヴロヴィチ。私は斷はつたんだが、あの娘が——あんまり頼むもんでね……さあこれ……私も辛いんだが……」

彼はケースを取り出して、まごまごしながら、あまりの事に啞然としてゐるパーヴェル・パーヴロヴィチの前に置いた。

「何だつて今まで渡さずに置いたんです？」と青年は嚴しい語氣でヴェリチャーニノフに喰つてかかつた。

「暇がなかつたんですよ、要するに」と、こつちは厭な顔をした。

「妙ですねえ。」

「なん、何ですと？」

「いや、何としても妙ですよ、それだけは貴方もお認めの筈です。尤も、あなたが何かその——感違ひをなすつてらしたといふことも、大いにあり得ることとして許せますがねえ。」

ヴェリチャーニノフは矢庭に躍りあがつて、この惡たれ小僧の耳朶を引んもぎつてやりたくてならなかつた。しかしその前にもう堪らなくなつて、相手の鼻先へ向けていきなりぶつと噴き出してしまつた。少年の方でも流石に可笑しいと見え、直ぐさま笑ひだした。ところがパーヴェル・パーヴロヴィチは笑ふどころではなかつた。もしもこの時、ロボフ少年に向かつて呵々大笑してゐるヴェリチャー

「ニーノフが、自分の上にじつと注がれてゐるトルソツキイの物凄い凝視に氣づくことが出来たら、——彼はたちどころに、この男が今この瞬間ある戦慄すべき限界を踏み越えようとしてゐることを、悟つたに違ひない。……しかしヴェリチャーニーノフも、この凝視にこそ氣づかなかつたとはいへ、ここらで一つパーヴェル・パーヴロヴィチの肩を持つてやらなければならぬと感づいた。」

「ところでですな、ロボフさん」と、彼は親しげな調子で口を切つた、「まあ今度ナヂェージダ・フエドセーヴナに結婚を申し込まれたに就いては、パーヴェル・パーヴロヴィチとしても色々考へてをられることもあらうと思ふが、さういふことに一々觸れたくもないから、その方の詮議立てはお預かりとして、ただ今回の結婚問題に際してパーヴェル・パーヴロヴィチの身につけてをられる資格といつたものを、御参考までに擧げさせて貰ひたいと思ふんです。——第一には、氏の閱歴が過去から現在に至るまで残る限なくあの尊敬すべき家族に知れ渡つてゐることです。第二に、氏が現在立派な尊敬すべき地位を社會に占めてをられることです。最後に、氏には財産があります。といふ譯ですか、氏があなたのやうな——恐らくは色々立派な美點も具へてをられることでもあらうが、しかし眞面目な競争相手として受取るには何せあまりにもお年の入つてゐない方が、競争相手と名乗つて出られるのを見て、驚き呆れるのはさらさら無理のないことだらうぢやありませんか。……従つてまた氏が、あなたにお引取りを願ふのも、これまた正當のことだと思ひますね。」

「その『あまりにもお年の入つてゐない』といふのは、一體どういふ意味です？ 僕はもう十九歳と一ヶ月になつてゐるんですよ。法律上僕はもうとつくに結婚する権利があるんですよ。これだけ言へば澤山でせう。」

「だが、現在あなたに自分の娘をやる氣になる父親がどこの世界にあるでせうか——よしんば貴方が未來の百萬長者、もしくは未來の人類の大恩人であるにしてもですよ。——十九やそこの年頃では自分の身の始末だつて出来やしません。それをあなたはまだその上に、他人の將來をまで、あなたと同じくまだほんの赤ん坊にひとしい少女の將來をまで、背負つて立つ氣でいらつしやる！ どうもあんまり見上げた考へとは言へないやうですね、え、どうですかね？——私がこんな差出がましいことを申すのも、あなたがさつき御自分でこの私を、あなたとパーヴェル・パーヴロヴィチの間の仲介者のやうにお扱ひになつたからですよ。」

「ああさうか、話は違ふが、この人はパーヴェル・パーヴロヴィチといふんでしたか！」と若者は空つとぼけた、「何だつて僕には今の今まで、ヴァシーリイ・ペトロヴィチつて云ふやうな氣がしてたんだらうな？ いや、ところでですね」と、またヴェリチャーニーノフの方へ向き直つて、「そんなことを仰しやつたつて僕は一向驚きはしませんよ。どうせ貴方がたはみんな、そんなとこだらうと思つてましたからね。だがどうもをかしいなあ、あの家ぢやあなたのことを寧ろ幾らか新らしい人のやう

に言つてましたがねえ。まあしかし、そんなことはどうでもいいとして、要點はですな、僕としては只今あなたから有難い御指摘にあづかつたやうな見下げた考へなんぞは毛頭ないばかりか、寧ろ事實はまつたく逆だといふことです。そこんところを一つ、とつくり御説明申しあげようと思ひます。先づ第一に、われわれは互ひに將來を誓ひ合つた仲なんです。その上になほ僕は、二人の證人を立てて萬一あの女が別の男を愛するやうになるか、もしくは單に僕のところに来たことを後悔して離婚を欲するやうな場合が生じたならば、僕は早速自分が他人の女房と姦通した旨の證文をしたためてあの女に渡す——それによつてつまり、出る場所に出てあの女の離婚の請願を支持してやる、とかうきつばりあの女に約束してあるんです。まだそれだけぢやない、萬一僕が後になつてこの約束を破つて、いまの證文を出すことを拒絶するやうなことが生じないものでもありませんから、その場合あの女に安心の行くやうに、結婚の當日、僕はあの女に宛てて十萬ルーブルの手形を振り出して置く。さうして置けば、萬一僕が例の證文を出し滞りでもしたら、あの女は即座にその手形を他人に譲り渡して、僕をぺちやんこにすることも出来るんですからね！ といつた工合で萬事は安全に保證されてゐるんですから、僕は何びとの將來をも危険に曝してなんかゝる譯ですよ。まづ、第一箇條はさつとこのくらゐです。」

「私は請合ひますがね、そんな入れ智慧をしたのは、あの——何とか言つたつけ——あのプレドポス

イロフでせう？」とヴェリチャーニノフは叫んだ。

「ふ、ふ、ふ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは毒々しげに忍び笑ひをした。

「何だつてそこの紳士は妙な笑ひ方をするんだらう？ いかにも御察しの通りです——これはプレドポスイロフの思ひ附きなんです。それにしてもどうです、巧いもんぢやありませんか。いい加減な法律なんぞは慘として顔色なしですよ。そりや勿論、僕はあの女を永久に愛するつもりですし、またあの女も、お腹をかかへてたもう笑ひ轉げてゐるだけの話です。——しかし何といつたつて、いい智慧には違ひないですし、また今になつては貴方だつても、これが見上げた立派な態度であり、また萬人が萬人敢行しうるものではないことは、御承認下さるでせうね？」

「私に言はせると、見上げたどころの騒ぎぢやない、寧ろ醜惡ですな。」
青年は肩をそびやかした。

「またそんなことを仰しやつたつて僕は驚きはしませんよ」と、彼は暫く沈黙してからやり返した、「僕はもうそんなことには相憎と夙の昔から平氣になつてゐるんですからね。そんなばやばやしたことを仰しやると、あのプレドポスイロフにすばりと切つて捨てられますぜ。——かかる極めて自明なる事柄に對する貴方の無理解は、その淵源するところ、第一には長期にわたる放埒な生活により、また第二には長期にわたる安逸により生じたる、最も普通なる感情および認識力の退化にある——つてね。」

尤もしかし、私たちはまだお互ひに理解するに至つてゐないのかも知れませんね。とにかくあの家で聞いたあなたの評判は馬鹿にいいんだからなあ……。だが、あなたはもう五十ぐらゐですか？」

「ひとつ用件に戻つて頂きたいもんですな。」

「これは出過ぎたことを申して失禮しました、どうぞお腹立ちなく。別に他意あつて言つたわけぢやないんです。ぢや先を續けませう。僕は決してあなたが仰しやつたやうな未來の百萬長者でも何でもありません。（全くあなたも面白いことを考へる人ですね！）僕は御覽のとほり、これだけの人間なんです。しかし自分の未來についてはこれでも十分の自信は持つてゐますよ。僕は英雄になるつもりもないし、また人類は愚か何びとの恩人にもなる氣はありませんが、ただ自分と女房の生活は保障するつもりです。もちろん今の僕には一文もないです。それどころか僕は、小さな時からあの家で養はれて來た男なんです……。」

「と仰しやると？」

「つまり僕は、あのザフレイベニナ夫人の遠縁にあたる者の息子なんです。僕の一家がみんな死に絶えてしまつて、八歳の僕がひとり取残されたのを見ると、あの親爺さんが僕を引き取つて呉れて、やがて中學校に入れて呉れたんです。——これも餘計なことか知れませんが、あの人はあれでなかなかいい人ですよ。……。」

「それは知つてゐます……。」

「はあ。ただ文句をいへば頭が少々古すぎてね。しかし、いい人には違ひないです。今ぢや勿論、もうとうからあの人の後見の下からは離れてゐるんです。他人の世話にもならず、一本立ちの生活がしたかつたものですから。」

「で、いつから獨立されたんです？」とヴェリチャーニノフは好奇の眼を光らせた。

「もうかれこれ四ヶ月になります。」

「ははあ成程、それでよく分かりましたよ。つまり幼な友達つて譯ですわね！　すると就職口は見附かつたんですか？」

「ええ、別に官廳ぢやないんですが、ある公證人の事務所で、手當ては月二十五ルーブルなんです。勿論ほんの一時の腰掛のつもりですが、結婚を申し込んだときにや、何しろこれだけの収入だつてなかつたんですからねえ。そのときは鐵道に勤めて十ルーブル貰つてゐました。だが、こりやあみんな一時の腰掛けなんですよ。」

「すると、結婚の申込までしたと言ふんですか？」

「正式の申込をね。それももう三週間も前のことですよ。」

「で、どうでした？」

「親爺さんは大笑ひをして、それからかんかんに怒つて、あのひとをそのまま中二階に閉ぢこめちまつたんです。しかしナーチャは健氣にも氣持を變へませんでした。ところでこの散々の不首尾も、もとはといへば親爺さんが前々から僕に含む所があつたからなんです。つまり僕が四ヶ月前、まだ鐵道に勤めないうちに、あの人の役所に勤めさせて貰つてゐたのを、自分から追ん出てしまつたからなんですよ。もう一度いひますが、あの親爺さんは全く立派な人間だし、家庭では磊落で面白い人ですがね、いざ役所の鬨をまたぐが早い、途端に人間ががらりと變つちまふんです。その様子と來たらとても御想像も及びませんよ！ まあジュピターよろしくの體でふんぞり返つてゐるんですからねえ！僕は自然、あの人の態度が氣に喰はなくなつたといふ氣持を、あの人の前で見せるやうになりましたが、僕が追ん出ることになつた主な原因は、一に課長次席の奴にあるんです。その先生がね、僕が先生の前で『暴言を吐いた』とかいふんで、上申してやるなんて言ひ出したんですよ。本當のところはただ頭が足りないつて言つてやつただけの話なんですがねえ。そこで僕はあの連中のところを追ん出て、今ぢや公證役場にゐるといふ譯なんです。」

「で、役所ぢや澤山とつてゐたんですか？」

「なあに、臨時傭ひでさ！ 尤も親爺さんがそのほかに食扶持を呉れちやりましたがね。——いや實際親切ない人ですよ。とはいへ、僕たちは斷然頑張り通すつもりです。勿論そりやあ二十五ルーブ

ルぢや生活の保障どころぢやありませんが、間もなく僕は、ザヴィレイスキイ伯爵の亂脈になつた領地の整理に一口乗ることになる筈なんです。さうしたらぼんと三千ははいりますからねえ。それが駄目だつたら辯護士になります。何しろ人物拂底の當節ですからねえ……。おや！ ひどい雷だな、雷雨が來ますね。だが降りださない内に來られてよかつた。何しろあすこから徒歩つて來たんですよ、殆んど駄けどほしでね。」

「だがしかし、目下さういふ雲行きだとすると、何時の間にナヂェージダ・フェドセーヴナと話をする暇なんかあつたんです？ おまけにあの家ぢやあなたを全然寄せつけないとすると？」

「いやあ、垣根越しにだつて話はできるぢやありませんか！ 先刻あの赤毛の娘にお氣づきでしたか？」と彼は笑ひだした。「つまり、あの娘が世話を焼いて呉れるんですよ、それにマリヤ・ニキーチシナもね。ただ、あのマリヤ・ニキーチシナといふのは、相當喰へない女ぢやありますがね！……何だつてそんな擧めつ面をなさるんです？ 雷がお嫌ひなんぢやありませんか？」

「いいえ、氣分が悪いんですよ、ひどく身體の具合がわるいんです……。」

實際ヴェリチャー・ニノフは不意に胸もとがきりきり痛みだしたので、堪らなくなつて肘掛椅子から立ちあがり、部屋の中を歩いてみようとした。

「ああ、それぢや僕は、飛んだお邪魔をしたわけですね。——どうぞ御心配なく、僕はもう失敬しま

す！」と、若者は勢よく立ち上がった。

「邪魔なんかぢやありませんよ、構ひませんよ」とヴェリチャーニコフは痩せ我慢を張つた。

「何の構はないことがあるもんですか、『コプイリニコフのお腹が痛む』のに。——そんな文句がシチェドリンにありましたね、覚えておいでですか？ あなたはシチェドリンがお好きですか？」

「ええ……」

「僕も好きなんです。時に、ヴァシーリイ……おつと違つた、パーヴェル・パーヴロヴィチ、ひとつ話を附けちまひませうぜ！」と彼は殆んど笑ひだしさうな顔をして、パーヴェル・パーヴロヴィチへ話しかけた。「御理解を扶けるため、もう一度要點をつまんで申し上げますよ。あなたは明日、僕の立會ひのもとにあの老人夫婦の前で、ナヂェージダ・フェドセーヴナに關する貴方の一切の御要求を、正式に取消すことを承諾されますか？」

「いや、斷じて承諾しませんよ」と、苛だたしげな、ぷりぷりした顔つきで、パーヴェル・パーヴロヴィチも起ちあがつた。——「なほ、もう一度重ねてお願いするが、これでお別かれにしようぢやないですか……何しろ仰しやることが一々たわいもない、愚にもつかんことばかりでねえ。」

「いいですかね！」と若者は傲慢な微笑を浮かべて、指を立てて威かした、「計算違ひをしないで下さいよ！ この種の計算違ひが、やがてはどんな事になるかご存じですか？ 御注意までに申し上げます

ときますがね、九ヶ月のちには貴方はあすこですつかり財布の底をはたいちまつて、もがきにもがいて、とどのつまり此處へ轉げ込んで來ることになりますよ、——そこで、今度は厭でも應でもナヂェージダ・フェドセーヴナのこと諦めなければならん羽目になるんですよ。萬一それでもまだ諦めがつかんとなると——愈々もつて悲惨なことになるませう。まあ貴方の行手はざつとこんなものですぞ！ 豫めこれだけは申し上げときますがね、現在のあなたの行爲は、乾草の上の犬つころみみたいなもんです——いや失禮、ほんの物の譬へなんですよ——自分の腹の足しにもならんことで、他人の邪魔だてをしてゐるのですぞ。お情けにもう一ぺん言ひませう、——よおくお考へなさいよ。せめて一生に一度なりとも、だらけた自分の心に鞭打つて根本的によおくお考へなさいよ。」

「恐縮だが、くだらん説法はやめにして下さらんか」とパーヴェル・パーヴロヴィチは憤然として叫んだ、「それから今の汚ららしい當てこすりの御禮には、明日さつそく然るべき手段をとりますよ、眼から火の出るやうな奴をね！」

「汚ららしい當てこすりですつて？ 何がさうだと仰しやるんです？ そんなことを考へるやうぢや、貴方こそ汚ららしい人間だ。だが兎に角、明日までお待ちすることにしませうよ。その上でもし……。やあ、また雷だ！ ぢやさよなら、おちかづきになれて大變嬉しいです」とヴェリチャーニコフに目禮するが早いか、彼は一散に駈け出した。雷を抜け駈けて、雨に逢はない先にと歸りを急いで

ゐるらしかった。

十五 總勘定

「どうでせう？ どうでせうね？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、若者が出て行くが早いかわ
エリチャーニノフの傍に走り寄つた。

「さう、まづ運がないものと諦めるんですね！」と、ヴェリチャーニノフはうつかり口を滑らした。
ひどく募つて來た胸もとの痛みが、それほど激しく彼を責め苛んでゐなかつたら、まさかこんな言葉
は口にしなかつたに違ひない。パーヴェル・パーヴロヴィチは火傷でもしたやうにぎくりとした。

「そこで、あなたは——つまり私が可哀相なあまり腕環を返して下さらなかつたんですね——え、さ
うですか？」

「その暇がなかつたもんで……」

「しんから可哀相なあまり、つまり親友の中の親友としてですね？」

「ええまあ、お氣の毒には思ひましたね」とヴェリチャーニノフは怩然と顔色を變へた。

とはいへ彼は、自分が先刻あの腕環を預かることになつた次第、またその時のナーヂャが殆んど強
制的に自分にこの役目を背負はした云々といつたことを、手短かに話してやつて、……

「あなただつて私がどうあつても引受けたくなかつたことぐらゐ、分かつて下さるだらうぢやありま
せんか。それがなくつても、厭なことだらけなんですからねえ！」

「あの娘にほおつとなつて引受けたんですね！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは忍び笑ひをした。

「そんなことを仰しやるのは愚劣ですよ。だがまあ、それも大目に見て上げなければなりませんまい。
だが今しがた自分で御覽になつたぢやありませんか、この事件の張本人は私ぢやなくて他の人間だと
いふことを！」

「それにしたつて、ほおつとなつたには違ひありませんや。」

パーヴェル・パーヴロヴィチは腰をおろして、コップを満した。

「一體あなたは、この私があんな鼻垂れ小僧におめおめ譲るとでもお思ひなんですか？ どうしま
して、厭つとこさあの鼻つ柱を折つべしよつてやりませう！ 明日にも早速出掛けて行つて、根元か
ら折つべしよつてやりますよ。両親と力を協せて、あの餓鬼め子供部屋から燻し出して呉れる……」

彼は殆んど一息に飲みほして、またなみなみと注いだ。概していへば、これまでにない氣輕な振舞
ひをしだしたのである。

「へつ、ナーヂェンカとサーシェンカか、さても可憐な御一對でさあ——ふ、ふ、ふ！」
 彼は燃えさかる憎念に吾を忘れてゐた。前よりも激しい雷鳴がまた聞こえた。目の眩むやうな稲妻が閃くと見る間に、忽ち土砂降りの雨になつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは起つて行つて、開いてゐた窓を閉めた。

「先刻あの男があなたに訊きましたね、『雷がお嫌ひなんぢやありませんか』つて——ふ、ふ！ ヴェリチャーニノフ氏が雷をお嫌ひ、こりやあい！ コプイリニコフが——ええと、どうだつたつて——コプイリニコフが……。それからあの五十歳つて奴はどうです——ええ？ 覚えておいでですかね？」パーヴェル・パーヴロヴィチは盛んに毒づいた。

「だがあなたは、すつかりお神輿を据ゑちまつたもんですね」と、痛みのためろくろく聲も出せず、ヴェリチャーニノフは注意した、「私は横になりますよ……あなたは御随意に。」

「何せこの降りぢや、犬ところだつて追ひ出す人はありませんや！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは赫となつて、相手の言葉を引きとつた。とはいへまた、その赫となる権利の生じたことが、むしろ嬉しいといつた様子だつた。

「そんならまあ、ごゆるりと腰を据ゑて、お飲みなさるがいい……なんなら、お泊りになつても宜しい！」とヴェリチャーニノフは口の中でやつと言つて、そのまま安樂椅子に身を伸ばすと、微かに呻

吟しはじめた。

「泊つてもいいですと？ だがあなたは——怖くはないですかね？」

「何がです？」とヴェリチャーニノフは急に鎌首をもたげた。

「いや別になんですがね。この前々には、貴方が何だかひどく怯えられたやうだつたもんで、それとも私の方でただそんな氣がしたのかも知れんが……」

「あんたも馬鹿だな！」ヴェリチャーニノフは堪へ切れなくなつて、さう浴びせかけると、そのまま腹立たしげにくるりと壁の方へ向いてしまつた。

「なあに、構ひませんや」とパーヴェル・パーヴロヴィチは應じた。

病人は横になつて一分もたつと、急に眠りに落ちてしまつた。それでなくても最近ひどく健康を害してゐるところへ、今日一日の氣の休まる時もない不自然な緊張が、今になつて一時に解けたので、彼はもう赤ん坊のやうに他愛もなかつた。しかしそのうちに再び痛みが勢ひを盛り返して、疲勞と睡魔に打ち勝つことになつた。そして一時間もすると彼は目をさまし、やつとこさで安樂椅子の上につき直つた。雷雨はもう去つてゐた。部屋の中には煙草の煙が一杯にたちこめ、酒壇は空っぽになつてつつ立ち、パーヴェル・パーヴロヴィチはもう一つの安樂椅子の上で眠つてゐた。着のみ着のまままで靴もぬがずに、安樂椅子のクッションに頭を乗つけて、仰向きになつてゐる。例の折疊み眼鏡は胸の

ポケットから抜け出して、紐にぶら下がつたままだらりと床のあたりまで垂れてゐた。同じ床の上には帽子も轉がつてゐた。ヴェリチャーニノフは暗い眼差しで、その様子を見やつて、別に起こさうともしなかつた。もうどうしても横になつてゐることが出来ないのも、痛さに身をねぢ曲げたまま部屋の中を歩きながら、彼はうんうん呻いてゐた。そしてその痛みについて色々と思ひ耽りはじめた。

彼はこの胸部の痛みが心配でならなかつたが、それもさらさら無理はなかつた。かうした発作はもうよほど以前から彼にはあつたのだが、しかしごく稀にしか起こらず、一年に一度か二年に一度程度であつた。この痛みが肝臓から來ることは彼も知つてゐた。起こり初めには、胸のある一點、心窩の下か或ひは少し上の邊に、まだ鈍く大して強くはないが、それでゐて妙に神経にさはる壓迫感が、わだかまるやうな感じである。それが時によると十時間もぶつ通しに次第次第に強まつて行つて、やがての果てにはその痛みが極點に達し、堪へがたいまでに募つた壓迫感のため、病人はもう死ぬのぢやないかとまで考へだすほどであつた。一年ほど前に起こつた最後の發作の時などは、やはり十時間も續いた擧句にやつと痛みが去つた後、彼は急にぐつたりと弱つてしまつて、寢床に横になつたまま手もろくに動かせない始末だつた。で醫者はまる一日といふもの、まるで乳呑兒のやうに、薄めたお茶を茶匙に二三杯と、肉汁にひたしたパンの小切れをしか與へて呉れなかつた。この痛みは色々な拍子から起こるのだつたが、いつも極まつて前以て神経が掻き亂されてゐる場合に限られてゐた。また

その經過も妙だつた。時には普通の罨法をするだけで、起こりはじめの半時間ぐらゐのうちに、一時にさつと引いて行つてしまつた。しかしまた時によると、あの最後の發作の時のやうに、何をやつても利目がなく、吐劑を次第に量を増しながら服用を重ねて、やつと収まるやうなこともあつた。その時の醫者はあとになつてから、てつきり毒を嚥んだに違ひないと睨んだと白狀した。

今はまだ夜の明けるまでには時があるし、よる夜中に醫者を迎へにやるのは厭だつた。それに彼はもともと醫者といふものが嫌ひでもあつた。たうとう彼は我慢がし切れなくなつて、大きな聲で唸りはじめた。その呻き聲にパーヴェル・パーヴロヴィチは夢を破られた。彼は安樂椅子の上に起き直つて、暫くの間さうして坐つたまま、怯えたやうに聽耳を立て、殆んど駈け出さんばかりの勢ひで二つの部屋を往復してゐるヴェリチャーニノフの姿を、きよとんとした眼で怪訝さうに追つてゐた。明らかに平生の酒量を越してゐると見えるまる一本の酒が、ひどくその身に作用してゐたので、彼は長いこと正氣に返れずにゐた。が、たうとう合點が行つたと見え、ヴェリチャーニノフの傍へ駈け寄つた。彼の叫びに、相手は何やら譯の分からぬことを口の中で答へた。

「そりや肝臓から來るんですよ、私は知つてますぜー」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは矢庭に物凄く活氣づいた。「あのピョートル・クージミチも、あのポロスーヒンもやつぱりこれと同じでしたよ、肝臓から來たんです。罨法がいいんですがね。ピョートル・クージミチはいつも罨法で治

してましたつけ。……死なんとも限らないんですぜ！一走りマーヴラのところへ行つて來ませうか——ええ？」

「いいです、いいです」とヴェリチャーニノフは苛だたしげに手を振つた、「何んにも要らないんです。」

ところがパーヴェル・パーヴロヴィチは、どうした風の吹き廻しだか、まるで生みの兒の一命に關することでもあるかのやうに、半狂亂の態だつた。彼は病人の制止も聽かずに、是非とも罨法をやらなくてはいけない、それからまた、薄い茶を二三杯、それも『熱い位ぢや足りませんぜ、煮え沸るやうな奴を』一どきにぐいぐい飲まなくちやいけないと、一所懸命に言ひ張つた。——彼は許しも待たずにマーヴラのところへ走つて行つて、二人がかりで何時もがらんどろになつてゐる臺所に火を起し、ぶらぶらとサモヴァルを吹いた。またその一方では病人を下着だけにして、毛布でぐるぐる巻きにして、寝かしつけることまでやつて退けた。おまけに二十分そこそでお茶もはいるし、最初の罨法具もできあがつた。

「これはお皿を暖めたんです、眞赤に焼けてますよ！」と彼は、熱した皿をナフキンにくるんだ奴をヴェリチャーニノフの痛む胸もとに當てがひながら、殆んど熱狂したやうな聲で言つた、「罨法をやらうにも、この他には何んにもないんです。取り寄せてゐたんぢや暇がかかりますしね。だがこの

皿といふ奴は、何なら首にかけても請合ひますがね、寧ろ一等よく利く位のものなんです。あのピョートル・クージミチで試験済みも試験済み、ちやあんとこの眼と手を使つて見届けたんです。手遅れになつた日にや命とりですぜ。さあ、お茶を飲むんです、がぶりと一呑みに——火傷ぐらゐが何ですか。掛替へのない命ですぜ……御面相なんざ二の次ですよ……。」

彼のお蔭で、寝呆け眼のマーヴラは散々の目に逢はされた。皿が三四分ごとには取り換へられるのである。しかし三枚目の皿が當てられ、二杯目の煮え沸つた茶を一息に飲みほしてしまふと、ヴェリチャーニノフは急に痛みが樂になつたのを覺えた。

「一たん痛みの方で動搖の色を見せたとなりや、こりやもうこつちのもんですぜ、いい徴候ですぜ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは喚聲を上げて、喜び勇んで新しい皿と新しい茶をとりまげ出して行つた。

「痛みさへ壓へつけられたらなあ！痛みさへ撃退できたらなあ！」と彼はのべつに繰り返してゐた。三十分ほどすると痛みはすっかり薄らいでしまつたが、その代り病人の方も困憊の極に達してしまつて、パーヴェル・パーヴロヴィチがいくら拜むやうにして頼んでも『もう一皿』我慢しようと言はなかつた。衰弱のあまり彼の眼はひとりで閉ぢてしまつた。

「寝かして下さい、寝かして下さい」と彼は力無い聲で繰り返した。

「それもさうだな！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは賛成した。

「貴方は泊つてつて下さいね……いま何時です？」

「間もなく二時です、十五分までですよ。」

「泊つてらっしゃい。」

「泊りますよ、泊りますよ。」

一分ほどして病人はまたパーヴェル・パーヴロヴィチを呼んだ。

「あなたは、あなたといふ人は」と、相手が走り寄つて来て自分の顔の上にかがみ込んがとき、病人は呟いた、「あなたといふ人は——私より善人ですね！ あなたのお氣持がすつかり分かりました、すつかり……有難う。」

「お寝みなさい、お寝みなさい」とパーヴェル・パーヴロヴィチは囁いて、急ぎ足に、爪先だてて自分の安樂椅子に戻つた。

病人はうつらうつらしながら、それでもなほ、パーヴェル・パーヴロヴィチがそつと音を忍ばせて寢床を敷き、着物を脱ぎ、やがて蠟燭を吹き消して、ざわざわさせまいと息の根を殺しながら自分の寢椅子に身を伸ばすのを、耳にしてゐた。

疑ひもなくヴェリチャーニノフはうとうとしかけてゐて、蠟燭が吹き消されると間もなくぐつすり

と寝入つてしまつたのであつた。彼は後になつてそれをはつきり思ひ出した。しかしその眠りのあひだちう、再び眼のさめた瞬間まで引きつづいて、彼は自分が眠つてゐるのぢやない、これほどにへとへとに疲れてゐるとはいへ何としても眠れるものぢやないと、そんな風な夢を見てゐたのであつた。やがての果てにその夢は、自分はいま現^まのなかで魔^まされてゐるのだ、そしてそれが單に幻覺に過ぎず決して現實ではないことを、十分に意識してゐるに拘はらず、自分のまはりに群がり寄る幻影をどうしても追ひ拂ふことが出来ないのだ——と、そんな風な夢に變つて行つた。現はれてくる幻影は例によつてお馴染みのものであつた。彼の部屋はもう群衆で一ぱいになつてゐるやうだつた。それに玄關の扉は開け放しで、まだどしどしと人々が家の中へはいつて来て、階段のところを犇めいてゐた。部屋の中央に据ゑてあるテーブルに向つて、ちようど一月ほど前に見た夢と同じ夢に現はれたのと寸分違はぬ一人の男が、腰をおろしてゐた。あの時と同じく、この男はテーブルに頬杖をついて坐つたまま口を利かうとはしなかつた。ただ違つてゐるところは、今日は喪章のついた中山帽子をかぶつてゐることである。『おや？ するとあの時もやつぱりパーヴェル・パーヴロヴィチだつたかな？』とヴェリチャーニノフは心に思つた。——が、その黙りこくつてゐる男の顔を差し覗いたとき、彼はそれが全然別人であることを見てとつた。『何だつて喪章なんぞつけてるんだらう？』とヴェリチャーニノフは不審に思つた。一方そのテーブルのところを犇めき合つてゐる人々の立てる喧騒や話聲や叫喚

は、物凄いほどであつた。打ち見たところこの連中は、この前の夢の時よりは一層烈しい憎念を、ヴェリチャーニノフに對して抱いてゐるらしかつた。彼らはてんで手を振りあげて彼を威嚇し、聲を限り何やら彼に喚きかけるのであつたが、さて一體何を嗚鳴つてゐるのかになると、何としても見當がつかなかつた。

『いや、これは幻覺なんだ。俺はちやんと知つてる筈ぢやないか！』と彼には思はれた、『俺は知つてるぞ、俺はたうとう寢附けなかつたんだ、そして今、苦悶に堪へられなくなつて起きあがつたところなんだ！』……とはいへまた、その叫喚といひ、人々の姿といひ、その身振りといひ、何もかもが實にまざまざと手にとるやうに見え、あまりにも眞に迫つてゐるので、時折にはこんな疑念に捉へられることもあつた。——『本當にこれがただの幻覺なんだらうか？ この連中は俺をどうしようと言ふんだらう、弱つたなあ！だが待てよ……果たしてこれが幻覺でないとしたら、これほどの叫喚に今の今までパーヴェル・パーヴロヴィチが目を覺まさずにある筈があるだらうか？ それ、あの男は眠つてるぢやないか、向ふの寢椅子の上でさ。』——やがて、やはりこれも前の夢と同様に、突然何事かがもちあがつた。一同は階段の方へ突進して、扉口のところで物凄く押し合ひへし合ひを演じた階段口から新しい群衆が、どやどやと部屋へ雪崩れ入つて來たのである。この連中は何か大きな重たさうなものを擔ぎ込んで來るところであつた。それを擔いでゐる連中がどしりどしりと梯子の段々を

踏み鳴らす音や、喘ぎ喘ぎ叫び交はすあはたらしい人聲やが聞こえて來た。部屋の中にゐた連中が口々に、『持つて來たぞ、持つて來たぞ？』と叫びだし、一同の眼はきらきらと光を帯びて、ヴェリチャーニノフの上に注がれた。一同は脅かすやうな身振りをしながら、それ見たかと言はんばかりの顔をして、階段の方をてんでに指さして見せるのだつた。愈々これは幻覺ではなく現實なのだといふことを、今ではもう些かも疑はずに、彼は爪先立ちに伸びあがつて、群衆の頭越しに一刻も早く、その連中の擔いで來たものを見きはめようとした。彼の心臓ははち切れさうに高鳴つた。と突然——この前の夢のときと全く同じに、扉の鈴を三度力一ばいに鳴らす音が響いた。そして又してもその響きは、どうしてもはや單なる夢とは受けとれないほど、ありありと眞に迫つて、聽覺を貫きとほした！……彼はきやつと叫んで目を覺ました。

しかし彼は、この前の時のやうに扉口へ走つて行きはしなかつた。何かの想念が彼の第一の行動を指導したのか、第一その突嗟の瞬間に些かなりとも觀念といふものがあつたかどうか、——それは分からないが、とにかく彼の耳に、何者かがさうしろと囁いたやうな工合であつた。——彼は寢床から跳びおると、まるで身を護り襲撃を防ぎとめようとするかのやうに両手を前方へぐいと伸ばしながら、パーヴェル・パーヴロヴィチの眠つてゐた方角めがけて衝き進んだ。と彼の両手は一どきに、やはり既に彼の頭上へ差し伸ばされてゐた誰かの両手に突き當つた。彼は矢庭にぎゆつとそれを掴ん

だ。つまり何者かが、豫め彼の上におつかぶさるやうにして立つてゐたのであつた。窓掛はすつかり下りてはゐたが、さうした厚地の窓掛のない隣りの部屋から最早や白々とした薄明りが射してゐたので、部屋の中は眞暗闇ではなかつた。そのとき突然、何物かが彼の左手の掌と指に、鋭い痛みとともにしたたかに切り込んで来た。彼は突嗟に、自分がナイフか剃刀の刃に掴みかかつて、それをぎゅつと片手に握りしめたのだといふことを悟つた。……その瞬間、何物かがごとりと案外に重さうな音を立てて、床の上に落ちた。

ヴェリチャーニフは腕力にかけては恐らくパーヴェル・パーヴロヴィチよりも二倍も強かつたらうが、しかし二人の格闘はかなり長く、大丈夫三分間はつづいた。が、やがて彼は相手を床に組み伏せて両手を後ろへ振り上げてしまつた。そのみならず、何故かしら彼は、その振り上げた相手の両手を縛つてしまはなければ気が済まなかつた。そこで彼は、傷いた左手で加害者を抑へつけながら、右手を働かせながら手さぐりに、窓のカーテンの紐を捜しにかかつたが、それがなかなか見つからなかつた。がやがて捜し當てて、握りしめると、力一ぱい窓から引きちぎつた。よくまああんな馬鹿力が出たもんだと、彼はあとになつて思ひだしては吾ながら驚くのであつた。その三分間のあひだ、彼我ともに一語も發しなかつた。聞こえるのはただ二人の烈しい息づかひと、格闘の陰に籠もつた響きだけであつた。やつとパーヴェル・パーヴロヴィチの両手を振りあげ後ろ手に縛り上げてしまふと、

ヴェリチャーニフは彼を床に突つ轉ばして起ちあがり、窓掛を拂ひのけ、掻上げカーテンを引き上げた。人氣のない往來はもう明るくなつてゐた。窓を開け放つと、彼は深々と息を吸ひ込みながら、ちよつとの間たたずんでゐた。もう四時過ぎであつた。それから窓を閉め、ゆつくりと戸棚の方へ歩いて行つて、清潔なタオルを出すと、流れ出る血をとめようとして左手に固く固く巻きつけた。足下を見ると擡げたままの剃刀が絨毯の上に轉がつてゐた。彼はそれを拾ひ上げ、二つに折ると、パーヴェル・パーヴロヴィチの眠つてゐた安樂椅子のすぐ傍の小卓の上にその朝から置き忘れてあつた剃刀のケースに納めて、書物卓かきものつくえの中に入れて錠をおろした。さうした始末がすつかり済んでしまふと彼はパーヴェル・パーヴロヴィチの傍に歩み寄つて、つくづくと彼を眺めはじめた。

その間に、向ふはやつとのことで絨毯の上から起きあがつて、肘掛椅子に腰かけてゐた。着物を脱いだまま、下着一枚の姿で、靴さへも穿いてゐなかつた。彼のシャツの背中と両袖に血がべつたりついでゐたが、その血は彼自身のもではなく、ヴェリチャーニフの切られた手から出たものだつた。——言ふまでもなく、それはパーヴェル・パーヴロヴィチには違ひなかつたが、しかし不意にさうした彼にぶつかつたとしたら、最初のうちはまづ彼だとは氣が附くまいほどに、彼の顔つきは變り果ててゐた。後ろ手に縛り上げられてゐるので、窮屈さうにしやちこ張つて肘掛椅子に坐つてゐた。引き歪んだ困憊しきつた顔をして、時をりぶるぶると胴ぶるひをしてゐた。凝然と、しかしまだその場の

仕儀がさつぱり合點が行かないといった風の妙にぼんやりした眼付きで、彼はヴェリチャーニノフを見つめた。と不意に彼はにやりと鈍い微笑を洩らし、テーブルの上にある硝子の水差しを顎でしゃくると、半ば囁くやうに短い言葉を口にした。――

「水が欲しい。」

ヴェリチャーニノフはコップに注いで、手づから飲ませにかかった。パーヴェル・パーヴロヴィチはがつがつと水に吸ひついて来た。ごくごくぐりと三口ほど飲むと、彼は首をもたげて、自分の前にコップを手にして立つてゐるヴェリチャーニノフの顔を、まじまじと穴のあくほど見つめたが、やはり一言も口を利かずに、又もや水の残りを飲みにかかった。十分に飲んでしまふと、彼はふうと深い溜息をした。ヴェリチャーニノフは自分の枕をとり、自分の服を浚ふやうに手にすると、そのままパーヴェル・パーヴロヴィチをその部屋に錠をおろして閉ぢ籠めて、自分はもう一つの部屋に行つてしまつた。

先刻の胸部の痛みは跡方もなく消えてゐたが、今またたとへほんの短かい間だつたとは云へ、一體どこから湧いたと吾ながら訝しまれるほどの力の緊張が一たび緩むと、彼はふたたび極度の疲憊感に襲はれた。彼は今しがたの出来事を思ひめぐらさうとして見たが、亂れた想念はまだうまくまとまらなかつた。受けた衝撃があまりにも烈しかつたのである。彼の眼はひとりでは合はさつてしまひ、そ

れが時には十分間もつづくかと思ふと、またはつと目を覺ましてぶるぶると身顫をし、一切を思ひ出して、べつとりと血のにじんだタオルの巻きつけてある自分のづきづき痛む手もちあげ、さてまた貪るやうに熱っぽい思考をはじめるのであつた。彼には唯一つだけ明白に解決のつく事があつた。それはかうである――パーヴェル・パーヴロヴィチが彼に斬りつけようと思つたことは確かであるがしかもあの十五分前まではよもや自分が斬りつけようとしてゐるなどは、自分ながら思ひも寄らなかつたに違ひない。あの剃刀のケースは、昨夜のうちにふと彼の眼に觸れただけで、別にこれといった考へを呼び醒ますでもなしに、そのままただ彼の記憶に残つただけの話であらう。(一たいあの剃刀は、いつもは書物卓の中に錠をおろして藏つてあるのだが、昨日の朝になつてヴェリチャーニノフは、時をりの例にしたがつて口髭や頬鬚のまはりの無駄毛を剃るために、久し振りで引つ張り出したのであつた。)

『もしあの男が前々から俺の命を狙つてゐたのなら、あらかじめナイフかピストルを用意して来るに決まつてる。昨夜まで一べんだつて見掛けたこともない俺の剃刀なんぞを、どうして當てにするものか』と、そんなことも考への間には浮かんで来た。

やがて朝の六時が鳴つた。ヴェリチャーニノフは吾に返つて、着物をつけ、そしてパーヴェル・パーヴロヴィチのところへ行つた。扉の錠を外しながら、彼は吾ながら自分の氣が知れないと思つた。

「たい何だつて自分は、パーヴェル・パーヴロヴィチをあのまま表へ突き出してやらすに、ここに閉ぢ込めなんぞしたんだらう？　しかも開けて見て驚いたことには、囚人はもうちやんと服を着けてゐた。何とかして縛めを解く機会を見附けたものと見える。彼は肘掛椅子にかけてゐたが、ヴェリチャーニノフのはいつて來たのを見ると、すぐさま起ち上がった。もう帽子を手にしてゐる。そのきよときよとした眼差しは、何か周章たやうに、こんな言葉を語つてゐた。――

『何も言ひなさんな。何んにも言ひつこなし。今さら言つたつて始まらんからな』……

「出てらつしやい！」ヴェリチャーニノフは言つて、「あなたの函ヤケをお持ちなさい」と、出て行かうとする彼の後ろから附け加へた。

パーヴェル・パーヴロヴィチは扉のところから引き返して來て、テーブルの上にあつた腕環の函を驚づかみにすると、そのままポケットへ押し込んで、階段口へ出て行つた。ヴェリチャーニノフは彼の出た後に錠をおろさうと、扉口のところに立つてゐた。二人の視線はもう一度だけ合はさつた。パーヴェル・パーヴロヴィチが突然歩みをとめて振り返つたのである。二人はものの五秒ほど、お互ひに眼と眼を見合つてゐた――まるで躊躇してゐるやうだつた。やがてヴェリチャーニノフは、片手を力無く相手に向かつて振つた。

「さあ、お歸んなさい！」と彼は小聲で言つて、扉をしめて錠をおろした。

十六分 析

異常なほど大きな喜悅の感じが彼を捉へた。何事かが終つたのである、片附いたのである。今まで押しかぶさつてゐた得體の知れない苦悶が彼を離れて、跡方もなく散り失せたのである。さう彼には思はれた。その苦悶はこの五週間つづいてゐたのであつた。彼は左手をあげては、血の滲みだしてゐるタオルを眺めながら、幾度となく獨りで呟くのだつた。『さうとも、もう今ぢや何もかもすつかり濟んぢまつたんだ！』そしてその午前中といふもの、この三週間のうちではじめて、彼はリーザのことを殆んど念頭にさへ浮かべなかつた。――まるでその切れた指から流れ出た血が、彼のその惱みの『總勘定』をまでつけて呉れたかのやうに。

自分が怖るべき危険を免かれたのだといふことを、彼ははつきりと意識した。『ああした連中は』と彼は思ふのだつた、『つまり、事の一分前までは自分が斬る氣か斬る氣でないかも知らずにゐるやうな手合ひは、――その顛へる手に一たびナイフを握り、己れの指に熱い血の最初のしぶきを感じるが早いか、もう斬りつけるどころの騒ぎぢやなく、囚徒たちの通り言葉でいへば「ばつさり一首をそぎ

落とす位のこととは何とも思はんものなのだ。それは實際だ。』

彼はそのまま家にゐることが出来なかつた。今すぐ自分は是非とも何事かをしなければならぬ、或ひは必らず何事かがひとりでに自分の身に起こつて来るに違ひない——さういふ深い確信を抱いて彼は表へ出て行つた。彼は往來を歩きながら心待ちに待つてゐた。よしんば相手が見も知らぬ人間であつてもいい、誰かと出會ひたい、誰かと話をしたいと、さういふ慾望を彼はひしひしと感じ、ただそれだけのためにやがて、醫者のところへ行かう、この手も然るべく繃帯して貰はなければならんし……といふ考へに導かれた。顔馴染みの醫者は、その傷を診察すると、不思議さうな顔をして『どうしてこんな切つたんですか？』と問ひかけた。ヴェリチャーニノフは冗談口に紛らして笑ひ飛ばしたが、同時にまたすんでのことで一切をぶちまけてしまふところであつた。が彼はやつと自分を制した。醫者はその様子を見て彼の脈をとらずにはゐられなかつた。すると昨夜の發作がばれてしまつたので、ちやうど手許にあつた何とかいふ鎮靜劑を今この場で服用なさいと言ひ出して、たうとう彼に納得させた。切傷についてもやはり、『別に悪い結果を惹き起こすやうなことはないですよ』と言つて彼をなだめた。ヴェリチャーニノフはそれを聞くと大聲で笑ひだして、悪い結果どころか既に素晴らしくいい結果が現はれてゐるんだといふことを、相手に斷言しはじめた。事の一切をぶちまけたいといふ抑制しがたい慾望が、この日のうちに更に二度ばかり彼を襲つた。一度などはその相手は、そのときは

じめて喫茶店で落ち合つて世間話をしだしたに過ぎない、全くの見も知らぬ人間だつたのである。一たい彼といふ人間はその時まで、人中で見も知らぬ人間に話掛けることなどは、何としても我慢がならない男だつたのであるが。

彼は賣店へ寄つて新聞をもとめ、かかりつけの洋服屋へ寄つて服を誂へた。ポゴレーリツェフ夫妻を訪問するといふ考へは今になつても依然として彼には不愉快で、彼はあの夫妻のことを念頭にも浮かべず、況んやまた別荘へ出掛けようなどといふ氣には更々なれなかつた。彼は依然としてこの都會の中で、何事かを待ち構へてゐるかのやうだつた。レストランへ行つて楽しい氣持で晝食をとり、ポイイだの隣りで食事をしてゐる客だのに矢鱈に話しかけ、葡萄酒を半分ほど空にした。昨夜の發作が再發しはしまいかなどといふことは、彼は考へても見なかつた。彼はその病氣が、昨夜自分があつた虚脱状態のまま眠りに落ち、それから一時間半後に寢床から跳ね起き、あんな馬鹿力を出して加害者を床へ叩きつけたあの瞬間に、きれいさつぱり自分を去つてしまつたのだと確信してゐた。

ところが日暮れ頃になると、彼は眩暈を感じはじめ、昨夜の夢のなかに現はれた幻覺に何かしら似通つたものが、數瞬間づつ彼を捉へるやうになつた。彼はもう薄暗くなつてから自分の宿に歸つて來たが、自分の部屋へはいりしなに、わが部屋そのものに殆んど畏怖に近い感じを覺えた。このアパートの自分の部屋にゐるのが、彼には怖ろしくもあれば不氣味でもあつた。彼は何べんもその部屋の中

を行きつ戻りつし、これまで殆んど覗いて見た例のない附屬の臺所にまではいつて見た。『昨夜あの連中が皿を焼いたのは此處なんだ』——そんな想念が浮かんだ。彼は屏にかたく錠をおろして、平生より早目に蠟燭をともした。屏をとざしながら彼は、自分が半時間ほど前に門番の詰所の前を通りしなに、マールを呼び出して、『俺の留守にパーヴェル・パーヴロヴィチが来やしなかつたかい？』と、まるで彼の來ることが實際あり得るかのやうな質問を發したことを思ひだした。

念入りに屏をとざしてしまふと、彼は書物卓の蓋をひらいて、剃刀のはいつてゐる函を取り出し、『昨夜の』剃刀をひろげてちつと眺めた。白い骨製の柄にちよつぱりと血痕がのこつてゐた。彼は剃刀をケースに戻して、ふたたび書物卓の中に納めて錠をおろした。彼は眠りたいと思つた。今すぐ横になる必要があると感じてゐた。さもないと『俺は明日はてんで身體が利かなくなつちまふだらう』と思つた。この明日といふ日が、彼には何となくまるで宿命的な『最後の結着』のつく日のやうな氣がした。だがまた例の、往來にゐたあひだ、今日一日、一刻も彼から離れなかつた想念が、今なほ依然として群がり寄せ、執拗に執念ぶかく彼の病める頭の屏を叩きつづけるのだつた。で彼の想念は相變らずそれからそれへと駈けめぐるばかりで、彼はなかなか寢附くことが出来なかつた……。

『一たんあの男がほんの偶然で俺に斬りつける氣になつたといふことに決まつたからには』と彼は依然として考へた、『とすればあの殺意は、よし憎惡に燃えた刹那の單なる空想の形にしても、これ

まで二ぺんだつて彼の腦裡に浮かんだことがあつたものかどうか？』

彼はこの疑問に奇妙な解決を與へた。——つまり、『パーヴェル・パーヴロヴィチは俺を殺さうとは思つてゐたけれど、この未來の殺人者の腦裡に殺意が浮かんだことは一度もなかつたらう』といふのである。これを要するに、『パーヴェル・パーヴロヴィチは殺さうとは思つてゐた、が自分の殺意は知らずにゐたのだ。理窟に合はん話だが、しかしそれは實際だ』と、ヴェリチャーニノフは考へたのである、『彼が上京して來たのは、何も就職口を見附けるためでも、あのバガウトフに會ふためでもなかつたのだ——なるほど就職口も捜してはゐたし、バガウトフの家へも再三訪ねて行きはしたし、また奴さんが死んだときには半狂亂の態にもなつたが、それがそもその眼目ぢやなかつたんだ。第一バガウトフなんかは木屑も同然に輕蔑してゐたぢやないか。あの男は俺めあてに出て來たんだ。だからこそわざわざリザを連れて來たんだ……』

『だがこの俺は一たい、あの男が……斬りつけて來るなんてことを、豫期してゐたか知らん？』と考へて、彼は然りと斷定した。あのバガウトフの葬列に加はつて馬車に乗つてゐる彼を見掛けたあの瞬間から豫期してゐたのだ。實にあの瞬間から——『俺は何事かを期待するやうになつたらしい……だが勿論それは、これぢやなかつた。よもや斬りつけて來ようとは、夢にも思はなかつた！……』

『だがあれは、あれは果たして奴の本音だつたらうか？』と彼は、矢庭に枕から首をもたげて

眼をかつと見ひらいて、又しても大聲を上げた、『彼奴が……あの氣狂ひ野郎が昨夜、下顎をがたがた顫はせながら、拳固で胸板を叩きながら、眞實にこの俺を愛してゐるなどとほざいてゐたのは？』

『全くの本音なんだ！』と、いよいよ熱心に瞑想を押し進めながら、分析のメスを振るひながら、

彼はさう断定した『一體あのT市から出て來たクアジモド（譯者註。作者がここでトルウツツキイの代名詞のやうにして用いてゐるクアジモドといふのは、ヴィクトル・ユーゴーの小説『ノートルダム・ド・パリ』中の主要人物。ユーゴーはこの人物の中に、嘔吐を備さしめる底の醜怪な容顔と、頗る優美な情蕩の動きとを併せ與へて、強烈な對照の妙を發揮せしめてゐる。）と來たら、二十年のあひだ露ほどの疑念も挿まずに貞淑な女房とばかり思ひ込んで來た妻の情夫に、惚れ込んぢまふ位の藝當は何でもないんだ。それほど奴は馬鹿でお目出たくできてゐるんだ！ 奴は九年のあひだ俺を尊敬してゐた、俺の記憶を胸にはぐくみ、おまけに俺の吐き散らした「金言」をまで後生大事に覚え込んでゐたんだ——いやはやこつちは、夢にもさうとは存知上げなかつたわい！ 昨夜の彼奴の言葉に嘘いつはりのあらう筈はないんだ！ だが待てよ、奴が昨夜俺に對する愛を打ち明けて、「ひとつ總勘定をつけませう」と言つたとき、果たして奴は俺を愛してゐただらうかな？ いや、憎さ餘つての可愛さだつたのだ。これが一等はげしい愛なんだ……。』

『いや實際この俺は、Tにゐたとき彼奴の心に途方もなく大きな印象を與へたらしいぞ、それは確かにさうだつたに違ひない。つまり途方もなく大きな、しかも「隨喜の涙のこぼれさうな」印象をな。何しろ彼奴が、クアジモドまがひの醜怪な容顔へ持つて來て、根がシルレルもどきの理想家肌の

291

ロマンチストであつて見れば、さうした現象は大いに起こり得ることなんだ！ 奴は俺といふ人間を百倍にも擴大して崇拜しちまつたといふ譯なんだ。何しろ俺の出現は、哲學者みたいな引込み思案に耽つてる奴の心境にとつては、まさしく青天の霹靂だつたに違ひないからなあ。……だが一體この俺のどこにさうも感心しちまつたものか、ひとつ伺ひたいもんだわい。實際の話が、俺が眞新しい手袋をはめて、しかも巧者にぴちりとほめこなす所に、惚れ込んだのかも知れないぞ。何しろクアジモドの手合ひと來たら、審美學が大のお好きだからなあ、いやはお好きだからなあ！ かうしたいとも雅びやかな魂の持主にとつちやあ、おまけにそれが例の「永遠の良人」型だと來た日にや、手袋ひとつでもう充分なんだ。あとの所は奴等の方で勝手に千層倍にもおまけを附けて呉れるんだし、もし君の望みとあらば、君のために決闘することだつて敢へて辭しはすまい。俺はその道にかけての妻腕を彼はひどく買ひ被つたもんだわい！ ひよつとしたらこの女蕩しの腕前が、何よりも奴さんを感じさせたのかも知れないな。彼奴のあの時の絶叫を聞くがいい、——「もしあの人までがさうだとしたら、この先一たい誰を信じたらいいんです！」いや全く、あんな音を上げた後ぢや人間誰しも野獸になつちまふものさ！……。』

『ふうむ！ 奴は、「俺と抱き合つて、思ふさま泣いて見たさに」はるばる上京したとか何とか、例の厭らしい口振りで言つてやがつただけが、つまりは俺を斬るために上京して來たんだ。それを自分ぢや、

「抱き合つて泣きに」行くんだと思ひ込んでゐたんだ。……おまけに奴はリーザまで連れて來やがつた。だから萬一、本當にこの俺が奴と抱き合つて泣いてやつたとしたら、奴は本當に俺の一切を赦したかも知れんて。何しろ彼奴は、ひどく俺を赦したがつてゐたんだからなあ……ところがさうした奴さんの素志は、俺と面とつき合はせるが早いか、忽ち醉漢の道化芝居に變つちまつたんだ、ポンチ繪に變つちまつたんだ、面に塗られた泥に對するむかつくやうな女々しい泣言に變つちまつたんだ。(へんな角を、あんな角までお額でんところへ生やして見せたりしやがつたつけな!)せめて道化の面でも被つて本心を言はう一心で、奴はわざわざ酔つ拂つてやつて來たんだ。正氣ぢや何ぼ奴だつて言ひ出せまいからなあ……。だがそれにしても實に道化ることの好きな男だつたなあ、何とも好きな男だつたなあ! 見ろ、俺を無理矢理に接吻させたときの、奴の喜びやうつたら無かつたぜ! 但しまだあの時には、抱くか斬るか、どつちの結末にするか見當がついちやあなかつたんだ。勿論理想を言やあその兩方を一緒にやつて退けるに越したことはなかつた筈だ。それが一ばん自然な解決法だ!——さうだ、自然は不具者を好まない、だから「自然的な解決」といふ奴で叩き殺してしまふのだ。そこで不具者のなかの不具者とも言ふべきものは、高尚な感情を具へてゐる不具者なんだ。それを俺は自分の経験によつて承知してゐるんだ、ねえあのパーヴェル・パーヴロヴィチ! 自然は不具者にとつては慈母ではない、繼母なんだ。自然は不具者を生む、だが彼に哀憐を垂れてやるところか、却つて彼を

罰するのだ、——しかもこれは頗る道理に叶つた話さ。一切を赦す抱擁と涙とは、當節ぢやもう、立派な人間にだつて容易なことぢや手に入らないんだ。況んや俺達——俺や君みたいな人間の層に於いてをやさあね、なあパーヴェル・パーヴロヴィチ!

「まつたく俺を許嫁のところへ連れて行くなんて、彼奴はどこまで馬鹿なんだか放圖が知れんわい——いやはや! 許嫁だよ! だがまた一方から考へて見りや、ああしたクアジモド野郎だからこそ、ザフレービニ家の御令嬢マドムゼルの無垢な心にすがつて、「新生涯への甦生」を期したいといつた氣持も生まれて來たに違ひないんだ! とはいへ君には罪はないんだ、ねえパーヴェル・パーヴロヴィチ、君には何の罪もないんだ。君は不具に生まれついたればこそ、君のいづく空想も希望も、何から何までが一切不具なものにならざるを得ないのは當然の話なんだ。しかも不具でありながら、君は健氣にも自分の空想に疑ひを挿んだ。さればこそ此のヴェリチャーニノフに向かつて、己れの崇拜する者への篤い禮を致しつつ、御裁可を仰いで來たといふ譯なんだ。つまり君には、このヴェリチャーニノフの認可が必要だつたのだ。つまり、その空想は實は空想ではなくて、立派な事實なのだといふ、この俺の證言が必要だつたのだ。そこであの男は、俺に對する篤い尊敬の念からして、またこの俺が高尚な感情を抱いてゐる男に違ひないと信じながら、俺をあの家へ連れてつたのだ。——おまけに恐らくは、あの無垢な少女のゐるところから程遠からぬ茂みの蔭で、われわれ二人が相擁して泣きだすやうになる

に違ひないとまで、信じ込んでゐたかも知れないのだ。さうだ！ あの「永遠の良人」は結局は、何時か一度は自分の一切の迷誤のつぐのひに、吾とわが身を決定的に罰しなければ濟まない人間だつたのだ、さういふ約束を背負つた男だつたのだ。そこで吾が身を罰しようがため、奴は遂にあの剃刀を引つ擱んだ——いかにもそれは無我夢中ではあつたらうが、それでも兎に角ひつ擱んだんだ！ 「だがね、とにかく小刀でぐさりとやつてのけた、とどのつまりは知事のゐる前でぐさりとやつてのけた、つまりそこですよ！」——これは何時ぞや彼奴のした話だつたつけない。だが待てよ、彼奴はあの婚禮の介添人の逸話を俺に話してきかせた時、何かそんな風な下心を抱いてゐたのだらうかしらん？ そしてまた、彼奴があゝの夜なかに寢床を抜け出して、部屋の真中につつ立つてゐたとき、實際何事かがあつたのだらうか？ ふうむ。いやいや、彼奴はほんの冗談に佇んで見せただけの話なんだ。彼奴はあゝのとき小用に起きたのだが、俺がひどく怯えあがつたのを見ると、わざと十分間も返事をせず黙りこくつてゐたんだ。何しろ俺が奴に怯えてゐるところが、奴にとちやひどく痛快だつたに違ひないものな。……そしてひよつとしたら、あゝして暗がりの中に佇んでゐるうちに、實際何ものかの影が初めて奴の頭をかすめたかも知れないな……』

『だがそれにしても、もし俺があゝの剃刀を小卓の上に置き忘れておかなかつたとしたら——恐らくは何事も起こりはしなかつたに違ひない。さうかな？ 果たしてさうかな？ だつてさうぢやない

か、奴は俺をあゝの日までは避けてゐたぢやないか！ 二週間もばつたり俺のところへ足踏みもしなかつたし、俺を氣の毒に思つて、俺から逃げ隠れてゐたぢやないか！ 最初はあゝして俺をではなしに、あゝのバガウトフを附け狙つてゐたではないか！ 刃を棄てて哀憐の氣持に移りたいと念じながら、あゝのよる夜中に跳ね起きて、皿を暖めて呉れたではないか！……あゝの熱い皿によつて、彼奴は自分をも俺をも救はうと願つたのだ！……』

曾ては『世馴れた男』であつたこの男のづきづきと病む頭は、やがて彼が全く眠りに落ちるまで、空なことから更に一層空なことへと空轉からまはりをしながら、まだまだ長いこと、これに類した事柄の上さまよつてゐた。……

翌る朝、彼が眼をさましたときには、頭の痛みは前日と同じだつたが、更にそれに、全く新しい、夢にも思ひがけなかつた恐怖の念が加はつてゐた。この新しい恐怖は、この自分、つまりこのヴェリチャー・ニノフが（しかもこの世なれた男が）、今日こそ自ら進んで、パーヴェル・パーヴロヴィチの宿へ出掛けて行つて、そこで萬事の落著をつけるのだといふ、吾ながら意外にも自分の胸中に固く根を張つた否定しがたい確信から、生じて來たものであつた。——だが何故？ 何のために？——その邊のことは全く自分でも知らなかつたし、また知りたいといふ慾求から嫌惡の情をもつて顔をそむけた。ただ分かつてゐることは、何故かは知らないが兎に角自分が出掛けることになる、といふことだ

けであつた。

この氣狂ひじみた考へ——とより他に彼は呼びやうを知らなかつた——は、しかし段々に發達して行くうちに、とにかく一應は尤もらしい體裁と、かなり道理に叶つた口實とを有するまでになつた。他でもない、既に昨夜のうちから彼は、あのパーヴェル・パーヴロヴィチは宿に戻ると、びつたりと扉に錠をおろして、それから何時ぞやマリヤ・スイソエヅナが話して聽かせたあの會計係の役人のやうに、首を縊るに違ひない——と、そんな風な氣が漠然としてゐたのであつた。この昨夜來の妄想が次第次第に形を變へて、今では不合理だとは知りながら何としても否定しがたい信念に變つてしまつたのである。——『何であの馬鹿者が首を縊ることがあるもんか?』と彼はのべつに自分の想念を打ち消した。しかも彼には、いつぞやのリーザの言葉がしきりに思ひ出されるのだつた。……『とはいふものの、俺がもし彼奴だつたら、或ひは首を縊らんものでもないわい……』と、彼はふと思つた。で結局、晝食をとりレストランへ行く道を變へて、パーヴェル・パーヴロヴィチの宿をめざすことになつた。——『ただあのマリヤ・スイソエヅナの様子を訊くだけにしよう』と、彼はさう思ひ定めた。ところが、まだ往來へ出ない先に、不意に彼は門の下で歩みをとめた。——

『本當に俺は、本當にこの俺は』と彼は、羞恥の念に顔を火照らせて叫んだ、『本當に俺は、「相擁して泣かん」がために、彼奴のところへのこのこ出掛けて行くんだらうか? 俺達二人に宿命づけら

れた汚辱を完成するには、今朝がたのあのたわけた醜態だけではまだ足りないとしても言ふのか?』

ところが幸ひなことに、凡ゆる歷乎とした律氣なる人々を見守り給ふ神の攝理みかづりによつて、彼はこの

「たわけた醜態」を再び演じないでも済むことになつた。すなはち彼は往來へ出た途端に、ばつたりと例のアレクサンドル・ロボフ少年に出喰はしたのである。若者は息せき切つて興奮してゐた。

「僕はあなたに會ひに來たんです。われわれの友人、あのパーヴェル・パーヴロヴィチは、實に何たる人でせうね?」

「首を吊つたか?」とヴェリチャーニノフは荒々しく呟いた。

「誰が首を吊つたんです? そりや又どうした譯です?」とロボフは呆氣にとられて眼をまろくした。

「いや別に……ただちよつと。——で君のお話は?」

「ちえつ馬鹿馬鹿しい、あんと云ふ人も随分をかした頭の廻り方の人だなあ! あの人は首なんぞ吊りやしませんぜ。(また何で首を吊ることがあるもんか?) それどころか、恙さしがなく退京しちまつたんですよ。僕はつい今しがたあの人を汽車に乗つけて、發たたせて來たところなんです。いやはや、實にあの人と來たら飲み助ですなあ! 僕達は三本も倒しちまつたんですよ、尤もブレドボスイロフも一緒でしたがねえ。——だがそれにしても、あの方は實によく飲む、凄はい飲み助だ! 車室はの中

で何やら歌を唄つてゐましたつけが、やがて貴方のことを思ひ出して、ちよいと投げキスをして、あなたに宜敷と言ひましたぜ。だが根性の卑しい男ですね、貴方はどう思ひます、——ええ？」

青年は確かに酔つ拂つてゐた。ぼつぼつと火照つた顔や、きらきら光る眼や、うまく廻らない舌先が、明かにそれを實證してゐた。ヴェリチャーニノフはからからと笑ひだした。

「ぢやとどのつまり、君達は兄弟の盃フルイケイシヤフトといふ譯でめでたしめでたしか！ あつはつは！ 相擁して泣いたといふ譯か！ ああ君たち、シルレルのともがらよ、詩人ウタビトよだ！」

「まあさうやつつけないで下さいよ、ねえ。それよか、どうでせう、あの人はあすこのことはさつぱりと諦めちまつたんですよ。昨日もあの家へやつて來ましたし、今日もやつて來たんです。そしてやつとこさ僕たち二人のことを言附いひつけたんです。ナーヂャは閉ぢ籠められて、中二階にはいつたきりなんです。呶鳴おどつて威かしたり、泣いてすかしたり、そりやもう大變な騷動なんですが、なあに僕たち、びくともしませんや！ それはさうとあの人は實に飲みますねえ、あんたの前ですが、實によく飲みますねえ！ それにあの人は實にモオヴェトン譯者註。下品なといふほどの意ですよ、いやモオヴェトンぢやまづい、何て言ふのかなあ？……とにかくしよつちゆう貴方の思ひ出話をやつてゐましたが、同じ貴方を形容するにしてもその言ひ廻しが實に下卑くだてましてねえ！ あなたはとにかく紳士に違ひないし、また實際ひと昔前には上流社會の一員だつた譯なんですし、それがただ最近になつて、かうして落ちぶれなければならん羽目に——貧乏のためだつたかな、はてな……。ええ忌々しい、實はあの人の言ふことがよく聞き取れなかつたんですよ。」

「ははあ、あの男はそんな言ひ廻しで、私のことを君がたに話して聽かせたんですね？」

「さうです、あの男なんです、だから怒らないで下さいよ。身輕な市民になつた方が、上流社會になんぞうろついているよりは増しですものね。僕はまたかう思ふんですよ、現代のわがロシアには誰一人として崇拜に値ひする人物がゐないとね。この崇拜すべき人物がないといふことは、即ち時代の由もとしい病弊びやうへいではありますまいか？ 貴方だつてさうお考へでせう？ え、いかがですか？」

「あの男？ 誰のことだらう！——あつ、さうさう！ 何だつてまたあの人は、あなたのことをしよつちう、『五十面を下げて、そのくせ身代限りをしたヴェリチャーニノフ』と言ふんでせうかねえ？ 僕には分かんないなあ。何故なにわざわざ、そのくせ身代限りをした、なんて言ふんでせうね。ただ『身代限りをした』で結構ぢやありませんか！ それをあの人はげらげら笑ひながら、千度も繰返して聞かせるんですよ。いざ車室はしごに乗り込むと、何か歌を唄ひだしたんですが、それからめそめそ泣きだしちまつて——いやどうも胸糞むねごがわるくなつちましましたよ。それも、酔つたまぎれの醜態うしだてだと思へば寧ろ氣の毒にくしみなくらゐりましたよ。ああ厭だ、馬鹿な奴等は實に厭だ！ やがての果てには、リザヴェー

タの冥福のためだといつて、乞食に金をばら撒きはじめてたんです。——それはあの人の細君のことな
んですか？」

「娘です。」

「あなたのその手はどうしたんです？」

「切つたんですよ。」

「なあに、ぢきによくありません。とにかく彼奴め、いいあんばいに發つて行つちまひましたがね。
だが僕は斷然保證しますぜ、彼奴は行き着く先で、すぐまた結婚しちまふに相違ありませんよ。——
ね、さうでせう？」

「そんなことを言つて、君だつて結婚したいんぢやありませんか？」

「僕ですか？ 僕は別問題ですよ。——あなたと云ふ人は、本當に何て口が悪いんだらう！ もし貴
方が五十なら、あの人はもう確かに六十にはなつてますね。そこを考へなけりや駄目ですよ、ねえ、
閣下！ 序でだから言つちまひますが、僕はすつと以前には、これでも信念の堅いスラヴ主義者だつ
たんです。だが今ぢや、僕達は西方から射す曙光を待ち焦れてゐるんですよ。……ぢや、さよなら。
あなたの部屋まで行かない先に此處でお目にかかれて有難かつた。今日はお寄りしませんよ、まあ上
がれなんて言はないで下さい、暇がないんです！……」

そして彼は駈け出さうとした。

「やあ、こいつは不可ねえ」と彼は不意に戻つて来て、「僕はあの人からあなたに手紙を頼まれて
ね、その使ひに來たんでしたよ！ そら、これが手紙です。何故あなたは見送りに來なかつたんで
すか？」

ヴェリチャーニノフは部屋へ引返して、彼の名宛になつてゐる封筒を開いた。

その封筒の中には、パーヴェル・パーヴォヴィチの書いた文字は只の一行もなく、或る別の手紙
が一通はいつてゐた。ヴェリチャーニノフはその筆蹟で一目でそれと見分けがついた。それは古い手
紙で、書かれた紙も積もる歳月に黄ばみ、インクの色も褪せてゐた。つまり彼があのとときT市を去つ
てから二ヶ月後に書かれた、實に九年前の手紙だつたのである。しかしこの手紙は彼の手許には届か
なかつた。その代りに當時彼は別の一通を受け取つたのである。さうした経緯は、この黄ばんだ手紙
の文意によつて明かであつた。この手紙でナターリヤ・ヴァシーリエヴナは、當時この代りに彼が受
け取つた手紙と同様に、彼に永久の別かれを告げ、今では別な男を愛してゐると告白してはゐるが、
然しまた同時に、自分の懐妊してゐることも秘めてはゐなかつた。それどころか、彼の氣持を慰める
ため彼女は、やがて生まれる子はそのうち何とかして彼に渡すやうに取り計らふつもりだと約束し、
なほ二人の間にはこれで新らしい責務が生じたこと、そしてそのお蔭で二人の友情は、今や永遠に固

く結ばれることになつたのだといふことを、繰返し述べ立ててゐた。——要するに、話の筋道こそあまり立つてはゐなかつたが、書かれた目的はもう一つの手紙と全く同じで、つまり自分への戀は諦めて呉れと言ふことに他ならなかつたのである。尤も彼女は、もう一年したら赤ん坊を見にT市へ來てもいいといふ許しを與へてゐた。彼女がどうして思ひ直して、もう一つの手紙をこの代りに送つて寄越したかは、神ならぬ身の知る由もなかつた。

讀んでゆくヴェリチャーニノフの顔は眞蒼だつた。しかしまた同時に彼は、この手紙を發見したパーヴェル・パーヴロヴィチが、螺鈿の飾りを施した例の父祖相傳の黒檀の手文庫の蓋も閉ぢあへずに、その前ではじめてこれを読んだときの姿を、心に浮かべずにはをられなかつた。

『てつきりあの男も、死人のやうに眞蒼になつたことだらうな』と彼は、ふと鏡に寫してみた自分の顔に目を留めて、心にさう思つた、『てつきりそりやあ、讀んでは眼を閉ぢ、また急に開けて見たりしたに違ひない。この手紙がただの白紙に變つて呉れよと念じながら。……きつと三度ぐらゐは、それを繰り返して見たに相違ない!……』

十七 永遠の良人

私達が前に敍べた出來事があつてから、殆んどまる二年たつた。そこでまた私達はヴェリチャーニノフ氏の姿を、或る夏の日の午さがり、新たに開通したわが國のさる鐵道を疾走しつつある、客車のなかで見出すのである。

彼は氣保養がてら或る友人に會ふために、オデッサをさして行くところであつた。がまたそれと同じ時に、もう一つ、これも亦かなりに心愉しい事情が、彼にこの旅行を思ひ立たせたのであつた。つまり彼はその友人を介して、久しい以前から懇意になりたいと望んでゐた或る頗る魅力ある婦人と、あはよくば初對面を遂げたいものと期待してゐたのである。この際くだくだしい點には立ち入らずに、彼がこの二年のあひだにまるで見違へるやうになつた、いや寧ろ見違へるほど血色がよくなつたといふことを、記して置くにとどめよう。以前のヒポコンデリーの症狀は、今では殆んど痕跡すらも認められなかつた。その病氣の結果として、二年前あの訴訟事件の思はしくなかつた頃、ペテルブルグで彼を惱ましはじめてゐたあの色んな『回想』癖や、またあの不安な氣持からは、今ではもう、會ての自

分がいかにも小膽者だつたといふ意識から来る若干のひそやかな羞恥の情のほかは、何一つ残つてはゐなかつた。ああした事はもう二度と再び起る氣遣ひはあるまい、そしてあの事はあのまま闇に葬られて、誰かに嗅ぎ出されるやうなことは決してあるまいといふ確信が、幾分は彼の嘗めた苦勞の償ひをして呉れたのであつた。なるほどあの頃の彼は、世間を見棄てて、身装りまでを粗末にし、交際仲間の眼を避けよう避けようとしてゐたのであつた。そして勿論この奇怪な行動が、交際仲間の眼を逃がれる筈もなかつた。ところがその彼が待つ間ほどなく、悔い改めて、それと同時に新たに甦生したもののやうな瑞々しさと、いかにも自信に充ち満ちた様子をもつて姿を現はすことになつたので、みんなは直ちに彼の一時の落伍を許して呉れたのである。そののみか、彼が道で行き會つても挨拶さへしないまでになつてゐた連中の方が、却つて一番先にめざとくも彼を認めて、親しげに手を差し伸べて呉れた。しかもその連中は、まるで彼が他人の容喙の限りに非ざる家事の都合で何處か遠いところへ行つてゐて、今しがたそこから歸つて來たばかりでもあるかのやうに、煩さい質問攻めなどは一切せず、氣輕に彼を迎へ入れて呉れたのだつた。總べての情勢がかうした有利な大角度の好轉を來した原因は、いふまでもなく例の訴訟が勝訴に歸したといふ事實であつた。ヴェリチャーニフは都合六萬ルーブルの金はいつてゐた。勿論とり立てて言ふほどの金額ではないが、しかし彼にして見ればなかなかの大問題だつたのである。第一彼は、この金を、手にするや否や先づ自分の足場が再

び堅固になつたのを感じ、従つて氣がよほど樂になつた。彼はまた、いま手に入つたこの最後の金を以前に二つの財産を蕩盡したときみたいに、まるで『馬鹿者のやうに』もはや使ひ果たしはしないだらうことを、ひいてはこの金額が以て彼の一生を支へるに足るであらうことを、はつきりと承知してゐた。

『よしんばどんなにこの國の社會機構が破壊されようと、彼奴らが鳴物入りで何事を宣傳し廻らうと』と、彼は時折り自分の周圍やまたひろく全ロシアにわたつて行はれつつある、あらゆる奇怪な、信すべからざるほどの事柄を目睹し耳にしなが、考へるのであつた、『またそんな其處らの人間やその思想が、よしんばどんなに生まれ變つたにもせよだ、俺は依然として、今かうして認めつつあるやうな凝つた美味い食事ぐらゐには事缺くまい。だからつまり、何でもござれさ。』

かうした肉慾的なまでに優柔な考へ方が、次第次第に強まつて行つて今では全く彼を支配するやうになり、それが精神に齎らした變化は言はずもがな、肉體的な變化をまで引き起こしたのであつた。彼は今ではもう、私達が二年前に見た『のらくら者』、あんな風なみつともない事件が續々としてその身に起こりはじめてゐた時代の彼の姿にくらべると、全く別人の觀があつた——快活で、明るく、どつしりしてゐた。あの頃の彼の眼のまはりや額には、そろそろ性の悪い皺が疊まれたしてゐたものだつたが、それも今では殆んで消えてゐた。顔の色艶までが變つて、當時よりは色白になり、それに

つややかな紅味がさしてゐた。

その彼が今、一等車の坐り心地のいい座席にふかぶかと腰をおろしてゐるのである。そして早くもこの時、ある微笑ほほえみましい想念を心に浮かべてゐた。それは次の停車驛が分岐點に當たつてゐて、新しい支線が右へわかれてゐるところから、思ひ浮かんだものであつた。——『もし俺が一時この直通線路を棄てて、ちよいと右の線へ外れさへすりや、二た丁場も行くか行かぬうちに、序でもう一人、知り合ひの婦人を訪問できるんだがなあ……』と彼は考へるのだつた、『あの女はつい此のあひだ外國から歸つて来たばかりで、今ぢやあんな田舎町でしよんぼりくすぶつてゐるんだ。彼女にしてみりや退屈きはまる暮らしたらうが、そこがまた俺のつけ目だて。といつた次第で、あすこでもオデッサに劣らぬ面白可笑しい時が送れさうだな。況んやそれ、少々行くのが遅れたつて、オデッサの方が消えてなくなる譯でもなしさ……』さうは考へたものの、やはりまだ執れとも決心がつき兼ねてゐた。彼は『きつかけを待つて』ゐたのである。さうかうするうちにその停車場が近づいて來、彼の待ち受けた『きつかけ』の方も、やはり遅れずに向ふからやつて來て呉れた。

その停車場は四十分停車驛だつたので、旅客は降りて晝食をとることになつてゐた。やがて列車がとまると、一二等待合室の入口のあたりは、かうした場合の御多分に漏れず、せつかちな、あはたらしい連中の押し合ひへし合ふ群で埋まつてしまつた。そして、亦かうした場合の慣例であらうが、一

騷動もちあがつてしまつたのである。群衆にまじつて二等車から降り立つた婦人があつた。なかなか人眼をひく縹緞ではあつたが、しかし旅行者にしてはどうも些かけばけばし過ぎる身装りをしたこの婦人は、両手でもつて殆んど引きずらんばかりに、一人の非常に若い美貌の槍騎兵士官を、自分の後ろに引き連れてゐた。士官は彼女の手を逃がれようとして、しきりに身をもがいてゐる。若い士官はしたたか酔つてゐた。一方、どう見ても彼の年上の親戚の者と思はれるその婦人は、一度その手を離したら最後、彼が一目散に食堂の酒場へ駆け込むに違ひないと睨んでゐるらしく、いつかな彼を放さなかつた。そのうちに、何しろ押すな押すなの混雜の中のことだからその士官に、これまた泥のやうにべろんべろんになつた小商人風の男が、どしりとぶつかつてしまつた。この小商人はこれでもう二日もこの停車場に御神輿を据ゑて、色んな取巻き連にわいわい擔ぎ上げられながら、酒は浴びる錢はばらまくといつた調子で、いまだに先へ行く列車に乗り込めずゐるのであつた。そこで勿ち口喧嘩がはじまつて、士官は威高氣に喚き散らす、小商人は口ぎたなく罵り立てる、例の婦人はただもうはらはらして生きた色もない、といふ騒ぎになつた。それでも婦人は士官を喧嘩相手から引き離して、手を合はせんばかりの聲で呼びかけた。——

「ミーチェンカ！ ねえ、ミーチェンカてば！」

この呼び方が小商人の耳にはあまりにも醜態に響いたらしかつた。事實、周りにたかつてゐた人々

も思はず笑聲を立てたほどだったが、この小商人と來たらそれどころぢやなく、今までの鬱憤に更に油を加へることになつてしまつた。彼には何故かしらその呼び方が、良風美俗に悖る由々しき冒瀆と思はれたのである。

「ちえつ、『ミーチェンカてば！』だとよ」と彼は、奥さんの金切聲を憎態に眞似ながら、喰つてかかつた。「それも人中でよ、いけ圖々しいつたらありやしねえ！」

さうして彼は、そのときはもう一番手近かの椅子に崩折れるやうに身を投げて例の士官をも自分の隣りにやつと掛けさせた婦人の方へ、ふらふらとした足取りで近寄つて行くと、侮蔑の眼差しで二人を見くらべながら、鼻唄でも歌ふやうに聲を引伸ばして浴びせかけた。

「ええおめえ、とんだお引きすりだなあ、お裾の邊りが泥んこだあね！」

婦人はきやつと叫んで、救ひを求めるやうに悲しげに四邊を見まはした。彼女は恥かしくもあれば怖ろしくもあつたのだが、一方青年士官はといふと、一刀兩斷に結着をつけようとして矢庭に椅子を蹴つて立ちあがつた。そして何やら喚きながら、小商人めがけて突進しようとしたが、途端に足を滑らして、どさりとばかり元の椅子に尻餅をついてしまつた。まはりの笑聲はますます高まつて行つたが、誰一人として加勢しようとする者はなかつた。そこへヴェリチャーニノフが一役買つて出たのである。彼は矢庭にむんづと小商人の襟首をつかむと、ぐいと引き廻しざま、怯え立つた婦人のところ

から五歩ほどのところへ、突つ放してしまつた。それでこの騒動も幕になつた。小商人はこの衝撃とヴェリチャーニノフの犯しがたい風貌とにすつかり恐れ入つてしまつた。取巻き連中が早速その彼を連れ去つた。りゆうとした身装をしたこの紳士の、威風凛々たる面構へは、わいわい囃し立ててゐた野次馬どもにも、大いに威壓的な効果を生んだ。笑ひ聲はばつたりやんでしまつた。婦人は眞紅な顔をして、涙をこぼさんばかりの様子で、感謝の言葉を雨のやうに降らせはじめた。槍騎兵は廻らぬ舌で、『ありやとう、ありやとう！』と言ひながら、ヴェリチャーニノフに手を差し伸べようとしたが、その途端に氣が變つて、傍の椅子に横になることにし、二つも三つも椅子を占領して、長々とふんぞり返つてしまつた。

「これ、ミーチェンカ！」と婦人は両手をうち合はせて、情なさうな聲でたしなめた。

ヴェリチャーニノフは今の一幕にも満足だつたし、また自分が身を置いた環境にも満足だつた。彼はその婦人に心を惹かれたのである。彼女は打ち見たところ、相當裕福らしい田舎出の婦人と見える。随分と金は掛けてゐるらしいが、そのくせ無趣味な服装といひ、些か滑稽じみた身ぶり物腰といひ、——まさしく彼女はその一身に、さる下心を抱いて婦人に近づいて來る都會の氣障男に上首尾を約束する、あらゆる條件を具備してゐる女に違ひなかつた。彼等の間に話の絲が結ばれた。婦人は興に乗つて盛んに喋り立て、しきりと自分の夫のことをこぼすのだつた。

「車室から出しな、いきなり姿をかくしてしまつたんで御座いますよ。だからこんな事になつちまつたんですわ。だつてあの人と來たら、大事な場合つていふときつと、どこかへ雲隠れしてしまふんですもの……」

「小便に行つたんですよ……」と槍騎兵は呟いた。

「これ、ミーチェンカー」と彼女はまた両手をうち合はせた。

『いやこいつあ、亭主先生あとで酷い目に逢ふぞ!』とヴェリチャーニノフは思った。

「御主人のお名前は何と仰しやるんです? 私が探しに行つて來ませう」と彼は申し出た。

「パール・パールイチでさ」と槍騎兵はもつれる舌で應じた。

「御主人はパーヴェル・パーヴロヴィチと仰しやるんですか?」と、ヴェリチャーニノフが好奇心に驅られて聞き返したその時、いきなりにゆうつと見覚えのある禿頭が、彼と婦人の間に割つてはいつた。その瞬間彼は圖らずも、ザフレイベン家の庭の光景だの、無邪氣な遊戯だの、自分とナヂェーシダ・フェドセーヴナとの間にのべつに割り込んで來たあの小煩さい禿頭だのを、一どきにごちやごちやと思ひ浮かべた。

「まあ貴方は、今頃になつて!」と、奥さんはヒステリックに聲をとがらせた。

それは紛れもないあのパーヴェル・パーヴロヴィチだつた。彼はまるで幽霊と面とつき合はせでも

したかのやうに、ヴェリチャーニノフの前に啞然として突つ立つたまま、驚愕と恐怖の色を浮かべて相手をまじまじと見守つてゐた。その茫然自失の態たるや非常なもので、ために暫時のあひだは、柳眉を逆立てた妻君がいきりたつた早口でべらべらと捲し立てる御談義も何も、一切耳にははいらぬらしかつた。そのうちにやつと、彼はぶるぶると胴ぶるひをすると、途端にはつと自分が直面してゐる怖るべき事態の全容を悟つた。年端も行かぬ子供に酒を強ひた自分の罪障に思ひ當たり、ミーチェンカの醉態に思ひ當たり、そして更に『このお方が』——と婦人はどうした譯かヴェリチャーニノフのことをさう呼んでゐた——『私どもの護りの神とも、また命の大恩人ともなつて下すつたのに、あなたは——あなたといふ人は、いつも大事な場合といふと、見えなくなつてしまふんだわ……』云々といふ次第にも、同時にはつと思ひ當つた。

ヴェリチャーニノフは突然大聲で笑ひだした。

「いやあ奥さん、この人と私は親友同志なんですよ、子供の時から友人なんですよ!」と彼は、そのとき辛うじて蒼ざめた微笑を浮かべたパーヴェル・パーヴロヴィチの肩に、親しげに、また鹿ふやうに右の手を廻して、呆氣にとられてゐる婦人に向かつて叫んだ、「この人はあなたに、このヴェリチャーニノフのことを話しませんでしたか?」

「いいえ、一度も話しては呉れませんでしたわ」と妻君はいささかぎくりとした。

「ぢあ一つ、君の奥さんに紹介して貰はうぢやないか。君も友達甲斐のない人だなあ！」

「この方はね、リーポチカ、今も仰しやつたやうにヴェリチャーニノフさんと仰しやるんだよ、そしてね……」とやりかけて、パーヴェル・パーヴロヴィチは間の悪さうに絶句してしまつた。

妻君はさつと氣色ばんで、さも憎さげに眼を三角にして良人を睨んだ。明らかに今の『リーポチカ』
(譯者註。オリンピアードの愛稱である。)といふ呼び方が氣に喰はぬと見える。

「それに實に怪しからんぢやありませんかね、ねえ奥さん、結婚の通知一つよこすぢやなし、結婚式に招んで呉れるぢやなし、いやはやですよ。しかし貴女はその、オリンピアード……ええと……」

「セミヨノフナですよ」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは耳うちした。

「セミヨノフナでさ！」と、うとうとしかけてゐた槍騎兵が、突拍子もなくこれに和した。

「つまり貴女はその、オリンピアード・セミヨノフナ、もうその邊でこの人を許してやつて頂きたいですな。私に免じて、つまりかうして舊友同志が久々に對面したことに免じてですな。……この人は——いい御主人ですからね！」

そしてヴェリチャーニノフは親しげにパーヴェル・パーヴロヴィチの肩をぽんと叩いて見せた。

「私はね、お前、ただちよいと……向ふへ行つてただけよ……」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは言譯をやりかけた。

「そして家内に赤恥を搔かせたんでせう！」と、リーポチカ夫人は透かさず相手の言葉をひつたかつた、
 「大事な時にはゐもしないで、要りもしない時にや邪魔ばかりして……」

「大事な時には——ゐもせず、要らない時にやあ……要らない時にやあ……か」と、槍騎兵が調子を合はせた。

リーポチカ夫人は興奮のあまり、ふうふう言はんばかりの有様だつた。ヴェリチャーニノフのある前でこんな様子を見せるのは不可ないと、自分でも承知してゐたので、恥かしさに顔を赤らめたが、何としても腹の蟲が承知しなかつた。

「要りもしない時に限つて、あんたは用心深すぎるんです、そりやもう用心深すぎるんですよ！」とはつと思ふ間もなく彼女の聲は突つ走つた。

「寢臺の下をのぞいて……色男を探すつて寸方さ……寢臺の下をね——要りもしない時にさ……要りもしない時にさ……」と、ミーチェンカまでが怖ろしくいきり立つた。

だがこのミーチェンカには、もうどうにも手の付けやうがなかつた。とはいへ間なく、その騒動もめでたく納まつて、新らしい知人同志のあひだには完全な親交が結ばれることになつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは珈琲と肉汁を買ひにやられた。そのあとでオリンピアード・セミヨノフナはヴェリチャーニノフに向かつて、いま彼等の一行は、彼女の良人の勤めてゐるの市から、二た月の豫定で

彼等の持村へ避暑に行くところだといふことや、その村はこの驛から大して遠くない、せいぜい四十露里くらゐのもので、すばらしい家とお庭があるといふことや、その村莊には町の知人達も泊りがけで遊びに来て呉れる筈だし、また村の近隣にも同じ避暑仲間がゐて、なかなか賑かだといふこと、などを一通り説明して、もしアレクセイ・イヴァーノヴィチ(譯者註。ヴェリチャ・ニコノフのこと。)むさくるしさもお厭ひなく『私どもの佗び住居』を訪ねて来て下さる思召しさへあれば、彼女は彼を『護り神』としてお迎へ申し上げる、何となれば彼女は、『萬一あなたがいらして下さらなかつたら、どうなつたことだらう……』と思ひ出すと、覺えず膚に粟を生ずることを禁じ得ないからである……と言つたことを、縷々嬾々として喋りまくつたが、要するに歸するところは『護り神』としてお迎へ申し上げる、といふことに他ならなかつた。

「そしてまた、命の大恩人としてです、命の大恩人としてです」と、槍騎兵は熱を籠めて力説した。ヴェリチャ・ニコノフは鄭重に禮を述べて、貴女のお役になら今日のみならず何時でも立ちたいと思つてをりますと附け加へ、實は自分は何の仕事もない閑人であるから、オリンピアーダ・セミヨノフナの招待に與かつたことは實に有難い仕合はせに存ずる次第であると答へた。さういふ紋切型が一通り済むと、彼は直ちに肩の凝らない雑談に話頭を轉じて、その中に巧みに二つ三つ嬉しがらせを織り込んだ。リーポチカは嬉しさにほつと顔を紅らめ、そこへパーヴェル・パーヴロヴィチが戻つて來

たのを捉まへて、アレクセイ・イヴァーノヴィチは本當に御親切な方で、私どもの村に一と月ほど泊りにいらして下さいとお招き申し上げたのを直ぐ御承知下すつて、一週間したらお出掛けになると約束して下すつたと、早速披露に及んだ。パーヴェル・パーヴロヴィチは途方に暮れたやうな微笑を洩らしたまま、うんともすうとも言はなかつた。オリンピアーダ・セミヨノフナは手應へのない良人の様子に業を煮やして、さも輕蔑したやうに彼に向かつて肩をすくめ、そのまま空を睨む眞似をした。やがて彼等は別かれることになつた。またしても一しきり禮言が繰り返され、またしても『護り神』がとびだし、又しても『ミイチェンカや』といふ聲が耳をかすめた。その擧句やつとのことで、パーヴェル・パーヴロヴィチは、妻君と槍騎兵とを車室へ乗せに連れ去つた。そこでヴェリチャ・ニコノフは葉卷に火をうつし、停車場の前の歩廊を行きつ戻りつしはじめた。彼は、パーヴェル・パーヴロヴィチが走せ戻つて來て、發車のベルの鳴るまで話し込むに相違ないことを、ちやんと承知してゐた。果たして彼の期待は裏切られなかつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは待つ間ほどなく、眼一ぱいに否むしろ顔一ぱいに不安さうな物問ひたげな色を浮かべながら、彼の前に姿を現はした。ヴェリチャ・ニコノフは笑ひ出しながら、『親しげに』相手の肘をとつて手近かのベンチへ引つ張つて行き、自分も腰をおろし、彼も隣り合つて坐らせた。そのくせ自分は黙つてゐた。彼は先づパーヴェル・パーヴロヴィチに口を切らせたかつたのである。

「ぢや貴方は私どものところへいらつしやるんですか？」と、彼は見得もへつたくれもなく露骨に本題へ入りながら、舌つたるい聲を出した。

「さう来るだらうと思つてましたぜ！、あなたといふ人は相變らずですなあ！」とヴェリチャーニノフは噴き出した、「一體あなたは」と相手の肩をもう一度ぽんと叩いて、「本當にあなたは、私が實際にあなた方のところへ泊りに行く、おまけに一月も泊りに行くなつてことを、よしんば一瞬の間でも大真面目に考へたんですかい——はつ、はつ！」

パーヴェル・パトヴロヴィチは總身をぶるぶると顫はした。

「ぢやあなたは——いらつしやらないんですね？」と彼は、喜びの色をまるでにして頓狂な聲を上げた。

「行きやしませんよ、行くもんですかね！」と、ヴェリチャーニノフは得意の笑聲を立てた。とはいへ彼は、何で自分がこんなに笑ひたいのか、吾ながら合點が行かなかつた。しかしまた、時の進むにつれて彼はますます可笑しくて堪らなくなつた。

「本當ですか……本當ですか、あなたは本氣でさう仰しやるんですか？」さう言つてしまふとパーヴェル・パトヴロヴィチは、相手の返事がさもどかしいといつた焦り焦りした様子で、矢庭に腰を浮かせた。

「今も言つたぢやありませんか、行かないつてね。——あなたは何てをかしな人だらう！」

「弱つたなあ……もしさうだとすると、もう一週間して、あなたはいらつしやらない、オリンピック・ダ・セミ・ヨノヴナは待つてゐる、といふことになつたら、私は彼女おれに何と言つたもんでせうなあ？」

「何でもないぢやありませんか！ 私が足を挫いたとか何とか言つて置きやいいですよ。」

「本當にしちや呉れますまいよ」と、パーヴェル・パトヴロヴィチは情ない聲を長く引つぱつた。

「そしてあなたが叱られるか？」ヴェリチャーニノフ相變らず笑ひながら、「いやどうも、あなたも氣の毒な人だな。お見受けするところ、あなたはやつぱりあの綺麗な奥さんの前で、ぶるぶる顫へてをられるやうだが——ええ？」

パーヴェル・パトヴロヴィチは微笑しようとしたが、注文どほりに行かなかつた。ヴェリチャーニノフがもともと來訪するつもりは無かつたといふこと——それは勿論ありがたかつたが、その彼が女房のことをさも馴れ馴れしげに口にするに至つては、既に面白からぬことであつた。パーヴェル・パトヴロヴィチはぶんとつむじを曲げてしまつた。ヴェリチャーニノフはそれを見て取つた。そのうちにもう第二のベルが鳴つた。遙か彼方の方で車室はこの窓からパーヴェル・パトヴロヴィチを呼ぶ心配さうな金切聲が聞こえて來た。彼は坐つたままでそはそはし始めたが、それでもまだ呼ぶ聲に應

じて駆け出すでもなく、何かまだヴェリチャーニノフの言葉を待つてゐることは、その素振りに現はれてゐた。——その言葉とは、言はずと知れた、彼が来ないといふ重ねての保證であつた。

「奥さんの里の苗字は何といふんです？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチのやきもきしてゐる様子なんぞ、全く目にも留まらんといつた調子で、ヴェリチャーニノフは問ひ掛けた。

「うちの持村の僧院長のところから貰つたんですよ」と、氣が氣でないといつた風に列車の方をきよろきよろ見たり、妻君の聲に耳を澄ましたりしながら、相手はさう答へた。

「ははあ分かつた、縹緞に惚れて貰つたんですね。」

パーヴェル・パーヴロヴィチはまたもやぶんとした。

「ところであのミーチェンカといふ人は貴方がたの何なんですか？」

「ああ、あれはね、私どもの、と言つてもつまり私の方の、遠縁に當れる者なんです。今では亡くなつてゐる私の従姉の忘れ形見でしてね、グループチョコフといふ苗字なんです。一度は品行不良の廉で一兵卒に貶されましたね、今また改めて士官に昇進したといふ譯なんです。……今度の任官についても、用意萬端すつかり私どもの手で調べてやりましたがね……。不仕合はせな青年でさ……。」

「いや、成程、成程、實によく出来たもんだわい。よくもかう何から何まで道具立てが揃つたもんだなあ！」とヴェリチャーニノフは心に思つた。

「パーヴェル・パーヴロヴィチ！」と、遠くの車窓から呼ぶ聲がふたたび聞こえた。その聲はもう苛立ちを通り越して今にも泣きだしさうな調子だつた。

「パール・パールィチ！」と別の嗚れ聲も聞こえた。

パーヴェル・パーヴロヴィチは又もやそはそはと浮腰になつたが、ヴェリチャーニノフはしつつかとその肘をとらへて引き留めた。

「どうですね、ひとつこれから奥さんところへ行つて、貴方が私を斬り殺さうとした事の次第を話して見ませうか、——え？」

「何を仰しやる、飛んでもないこつてす！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは血相變へて仰天した、「それだけは勘辨して下さいよ。」

「パーヴェル・パーヴロヴィチ！ パーヴェル・パーヴロヴィチ！」とまた向ふでは聲を合はせて呼んだ。

「ぢや、もう行らつしやい！」と、相變らず、穏やかな笑ひを續けながら、ヴェリチャーニノフは到頭相手を放してやつた。

「ぢや貴方は来ないんですね？」殆んど決死の覺悟をきめたやうな面持ちで、パーヴェル・パーヴロヴィチは最後にもう一度念を押すやうに嘯き、そのみか大昔の型で、彼の前に兩の手を合掌して

拜む真似までした。

「ええ、誓ひますよ、誓つて行きませんよ！ 駈けてらつしやい、乗り遅れたら事ですぜ！」
さう言ふと彼は、ぐいと勢よく相手に片手を差し伸べた、——差し伸べて、忽ちぎよつとした。パーヴェル・パーヴロヴィチはその手を取らなかつたばかりか、却つて自分の差し出してゐた手を引つ込めた。

第三のベルが鳴つた。

忽然として或る奇怪なことが二人の上に生じた。二人ともまるで人間が變つてしまつたものやうだつた。つい今しがたまであれほど笑つてゐたヴェリチャー・ニノフの身裡で、何ものかが振動したかと思ふと、途端にどつと堰を切つて迸つた。彼はぐいと狂暴な力を出して、パーヴェル・パーヴロヴィチの肩を引つつかんだ。

「もし私が、この私がかつちの手を出したとしたら」と彼は、太い切傷の痕がまざまざと残つてゐる左手の掌を示して、「あんたの方ちや平氣で握り返して來たに違ひないんだ！」さう彼は、血の氣の失せた唇をわなわなと顫はせながら、相手の耳に囁き込むやうな聲で言つた。

パーヴェル・パーヴロヴィチも色を失つた。彼もやはり唇を戦かせた。一種の痙攣がさつと彼の額をかすめて過ぎた。

「だがあのリーザはどうです？」と彼は、廻らぬ舌で早口に囁くやうに言ひ放つた、——と突然、その唇も頬も下顎も何もかも一どきに顫へだし、兩眼からはどつとばかり涙が迸つた。ヴェリチャー・ニノフはその前に化石したやうに突つ立つてゐた。

「パーヴェル・パーヴロヴィチ！ パーヴェル・パーヴロヴィチ！」と、まるで斬り殺されでもするやうな聲が車窓から叫んだ。——その途端に汽笛が鳴つた。

パーヴェル・パーヴロヴィチははつと吾に返つて、兩手を打ち合はせると、一目散に駈け出して行つた。汽車はもう動き出してゐたが、彼はどうかかうにか昇降口にしがみついて、自分の車室へばつと身を翻へして跳び込んだ。ヴェリチャー・ニノフは停車場に居残つた。そして夕方まで待つて次の列車に乗り継ぎ、もと通りの本線によつて更に旅を續けるべく出發した。右へ分かれる支線、つまりあの田舎町にゐる知合ひの婦人の方へは行かなかつた。——その道をとるには、あまりにも白けた氣持になつてゐたのである。そしてそれを、後になつてどんなにか悔んだことだらう！

永遠の良人了

譯者のあとがき

この『永遠の良人』といふ中篇小説は、ドストイェフスキイの全作品中で、おそらく純粹の二字を冠して呼びうるころの唯一の心理小説である。

心理の追求といふことを一應度外に置いてみれば、小説の筋はすこぶる簡単な、ありふれた三角關係にすぎない。男二人に女一人の三角關係を、ドストイェフスキイは初期の短篇『白夜』でも取扱ひ、おなじく初期の長篇『虐げられた人々』でも扱つてゐる。女二人に男一人の三角關係は、『白痴』において扱はれてゐる。『永遠の良人』は、この二種の三角關係のうち、前者——つまり男二人に女一人の場合を扱つた作品の一つに當然算へられるのであるが、しかも同時にまたこの小説に固有の特徴は、實はその三角關係が事實上すでに終了した後において、物語が發端し展開する點にあるのだ。すなはち當の女主人公はすでに死んでをり、物語は残された男二人の、いはば「二角關係」としてのみ、發展して行くのである。けだしこの作品が純粹な心理小説とならねばならなかつた所以である。

フローベールがある實際の有夫姦事件にヒントを得て、不朽の名作『ボヴァリー夫人』を書いたのは、一八五七年のことであつた。それから十三年を経てドストイェフスキイは、有夫姦の後日譚として不磨の傑作たるべき『永遠の良人』を書いたのである。この二人の文豪のあひだにおけるこの奇妙な分業は、この際一應は想起されてよいであらう。

ところで小説『永遠の良人』は、どういふ物語であるか。筋は前にも言つたとほり頗る單純で、ある地方官吏が、その妻の死んだ後、妻には情夫が何人もあつたといふ事實を、古手紙の束からして嗅ぎつける。なかでも情夫の一人たるヴェリチャーニノフの如きは、その地方官吏（トルウソツキイ）が今の今まで最愛の亡き妻の忘れ形見ともし且つは自分の一粒だねともして養育してきた娘の、實の父親ですらあるらしいのだ。

この事實を知るとともに、それまでは引つこみ思案の因循家であつたトルウソツキイ（これはトルウス、すなはち「臆病」「小心」といふ語根から作られた名である——）は、翻然として意を決して、その因果の娘を伴つてペテルブルグに出てくる。表面は何かの用事にかこつけてゐるが、實は復仇の一念に燃えてゐるのである。

一方、亡妻の情夫だつたヴェリチャーニノフは、天性すこぶる陽氣なドン・ファン型の世間師なのであるが（事實その名ヴェリチャーニノフは、「尊大」「高慢」ないし「大風呂敷」ほどの感じを含蓄する作り名である——）、その時たまたま色んな事情から心身ともに困憊の極にあり、神経衰弱ぎみでいらいらしてゐる折も折、はからずもこの復讐鬼につかまつてしまふのである。そこでこの二人の中年男のあひだに、當然おこることになつた心理的決闘の一部始終を、おそるべき精緻さをもつて描きだしたものが、小説『永遠の良人』なのであつた。

全篇を通じて、意地わるいまでに執拗なスポット・ライトの下に終始さらされてゐるのは、良人トルソツキイの方である。それに反して、相手役のヴェリチャーニノフや、例の三角関係の歴史などは、ともすれば幽暗朦朧のさかひに沈みがちであつて、さうした明暗の對照が、いやが上にもこの作品のニュアンスを増し、奥行を深めてゐるのである。ドストイェフスキイの作風を語る場合、レンブラント光線のことと言及するのは今や殆ど常識のやうにさへなつてゐるが、その意味から言ふなら、『永遠の良人』はまさにドストイェフスキイの全作中で、最も高い位置を占めるものと安んじて言へるのである。

かうして明暗のみごとな交錯のうちに浮きつ沈みつしながら、良人と情夫とは互ひに秘術をつくして渡り合ひ、息づまらんばかりの凄愴な場面を次々に展開し重疊させてゆく。したがつてその劇的迫

力の點から言つても、この小説はひとりドストイェフスキイのみならず、ひろく世界文學を通じて最も力學的な作品の一つにかぞへられるのであるが、さらにもう一つ言ひ忘れてならないことは、意識下の世界が人間生活において演ずる怖るべき役割が、いまだ曾ていかなる作家によつても企てられなかつたほどの精緻さと明確さをもつて、把握され分析されてゐることである。この小説の末尾にかい章が、「分析」と題されてゐるのは偶然ではない。

そのやうな潜在意識の世界の探求は、當然の歸結として、この作品に更にもう一つの特徴を加へることになる。それは人間心理のうちに潜んでゐる倒錯状態についての、大膽な探検報告書としてである。

その著るしい例證の一つは、『ザフレービニンの家で』と題する第十二章に見いだされる。妻に裏切られつづけた良人——つまり典型的なコキユであるトルソツキイが、再婚を思ひたち、わざわざ曾ての戀仇、ヴェリチャーニノフを連れて、意中の令嬢のゐるザフレービン家を訪問するくだりである。しかもこの中年男のめざしてゐる當の結婚相手は、長女などではなくて、まだ女學校へ通つてゐる、十五歳の第六女なのであつた。このやうに無垢な童女によつて呼びさまされる中年男の一種倒錯

的な情欲は、すでに早く『虐げられた人々』にもあらはれて、少女ネリは危くその毒牙にかからうとした。『罪と罰』のスヴィドリガイロフは、十四歳の少女を犯したとか言はれてゐるし、さらに『悪霊』のスタヴローギンに至つては、正にそのやうな倒錯症のもつとも完全な像をなしてゐると言へよう。トルツキイの求婚も、この作者が照明を當てることを故ら好んだかに見えるこの種の倒錯状態の一つの場合にすぎないのであるが、しかもまたこの求婚の場面の含んでゐる興味は單にそれのみにとどまらない。中年男のうちにひそむ奇妙なマゾヒズム的衝動をとらへて、これを白日のもとにさらけ出した點でも、この章ははなはだ珍重すべき一文献をなしてゐるのだ。つまりこの典型的コキユは、自分にだつて女を手に入れる腕はあるのだといふことを、往年の戀仇の前に誇示しようとして、わざわざ彼を伴つてこの奇妙な求婚訪問を敢行するのだが、その結果は幸か不幸か、自分が數年前にこの同じ才氣煥發たる社交人ヴェリチャーニョフによつて陥し入れられたことのある不名譽な地位に、もう一ぺん自分を置いてみたいといふ怪しい自虐的な潜在意識の誘惑が、たまたま満足されただけのことになつてしまふ。それのみならずこのコキユは、みづからそのやうな不面目な役割を進んで再演することによつて、亡き妻への斷ちがたい愛執のすくなくも一部を、同時に潜在意識的に満足させたものに相違ないのである。

さうした人間心理の識闕下に横たはる幽暗界の照らしだしにかけて、ドストイェフスキイが古今獨

歩の巨匠であることは、今さらあらためて述べる必要もあるまい。この追求を更に推し進めてゆくと、例の「愛憎二ならず」といふ命題がしだいに判然と描きだされて來ることにもなるが、事實この『永遠の良人』一篇を成り立たせてゐるぎりぎり結着のテーマは、この怖るべき命題の説きあかしに他ならぬとさへ、思はれるほどである。

この命題は、また愛憎の二重人格性とも呼べるだらうし、もつと簡略にして愛憎の二重性とも呼ぶことができるだらう。たしかに愛は常にそのうちに憎しみを含み、ために愛の愉快は滅殺されるのが常例である。また愛は常に屈辱を含み、ために人間の矜持は傷つけられるのが常例である。愛はともすると、憎しみが地平の上に描きだした蜃氣樓のやうにすら思はれるほどである。この愛憎の二重性をはじめてドストイェフスキイの作品中にはつきり採りあげられたのは、おそらくあの『地下生活者の手記』をもつて嚆矢とするであらうが、それはまた『罪と罰』のなかのラスコーリニコフと豫審判事ポルフィリーイとの間の奇怪な心理的葛藤としても再現し、『永遠の良人』はその意味から言へば三番目の作例をなしてゐる。しかもこの作品におけるこの命題の現はれ方は、それ自體が一篇の正主題として殆どモノグラフィイ的な探求の對象をなしてゐるばかりでなく、更にその内部において二重にも三重にも分裂して複雑きはまる様相を呈し、それがますますこの小作品のたたへる陰影を深からしめてゐるのである。すなはち裏ざられた良人は、その戀仇を憎むと同時に、抵抗すべからざる愛着

をその反面に覺えてゐる。これはまた、良人のその亡き妻にたいする追憶についても同様である。さらに奇怪なことには、この良人も戀仇も一人ながらに、どつちの胤だか結局は分らない娘にたいして、やはり愛憎未分の混沌たる執着をおぼえてゐるのである。

ついでに後年の作品について言へば、『悪靈』の主人公スタヴローギンの性格の基調をなすものは、やはり紛れもないそのやうな二重性であつて、この偉大なる倒錯者の本質をつきつめて言ふなら、矜持と自卑との内的對立、ないしはその内的二重奏とでも呼ぶほかは、なささうに思はれる。それはまた傑作『未成年』において、息子の父親にたいする、また父親の女主人公にたいする、微妙な感情の地盤をなすものであらうし、更に『カラマーゾフの兄弟』に見られるカテリーナとミーチャとの關係に至つては、その最も明らかな例といつてよいであらう。

ところで、小説『永遠の良人』はほぼ右に眺めたやうな物語であり、さらに右に見たやうな心理小説ないし分析小説なのであるが、それではこの作品は、ドストイェフスキイの文學生活のなかでどんな位置を占めるものであるか、或ひは、意識下の世界の照明を主題の一部ないしは副主題としてゐる彼の他の諸作品のあひだにあつて、どのやうな地位に立つものであるかといふことが、つぎの問題に

なる。

まづ、この作品の書かれた一八六九年といふ年は、ドストイェフスキイの生活のうちで、どういふ季節であつたか？

一八六四年、四十三歳のドストイェフスキイは、最初の妻マリヤ・ドミートリエヴナと死別し、さらに兄ミハイルを喪なひ、さらに親友A・グリゴリエフをも喪なつた。疾風が枯葉を卷いて身邊をかすめすぎたやうなこの年を境として、ドストイェフスキイの文學生活は、急テンポにその中期の豊穰きはまる一時期を展開したのである。翌年の秋、ドイツのヴィースバーデンで起稿され、さらにその明くる年一八六六年の殆ど全部を費して完成された『罪と罰』は、その季節の序びらきをなすものであつた。次の年の早春には、アンナ・グリゴリエヴナといふ若い賢い妻を得て、係累の煩らはしさを逃れるため、直ちに外遊の途にのぼつた。ドイツでは持病のルーレット癖が出て、早くも新妻の装身具をまで質入れする體たらくだつたが、その年の八月の末には、やうやくスイスに落ちつくことができた。『白痴』はこの年の末に起稿され、翌年いつばいを費し、やうやく一八六九年の一月にフイレンツェで完結した。その間、ジュネーヴで長女ソフィヤが生まれ、三ヶ月ほどで死んだ。『カラマーゾフの兄弟』の原型も頭にひらめいた。

一八六九年の夏には、スイスにもイタリヤにも見切りをつけて、ドレスデンへ舞ひ戻つた。その九

月、次女リュボーフィ（いはゆるエーメ嬢）が生まれ、さらに『永遠の良人』が出来あがつた。ドストイェフスキイ四十八歳の秋である。彼がこの長い外國滞在からロシアに歸つたのは、その翌々年つまり一八七一年夏のことであるが、のこる十八ヶ月のドレスデン滞在は、『悪靈』の執筆にささげられてゐる。

かうして眺めると、『永遠の良人』という小形な作品が、『白痴』と『悪靈』といふ二つの大きな作品のあひだに、ひよつこり挟まつてゐる事情が、かなりはつきり見てとられる。それは二つの大きなうねりの間に介在してゐる束のまの風——あの英語でいふ *Whiff*——の産物のやうな氣さへする。

「世間の人はわたしに藝術を求め、純粹な詩趣を求め、いらだちのない毒つ氣のないものを書けといふ。トゥルゲーネフやゴンチャロフに見習へといふのだ。わたしがどんな有様で仕事をしてゐるか、見せてやりたいものだ」と、ドストイェフスキイはあたかも『永遠の良人』を執筆最中の一八六九年十月十六日、早くも雪のふりだしたドレスデンから、マイコフに宛てて書いてゐる。そして、前借申込みの電報を打つには、ズボンに質に入ればならぬ。それどころか、授乳期にある細君の冬スカートまで、質に入ればならぬことにもなり兼ねない——と訴へてゐる。そんな中でこの小説は、ドストイェフスキイとしては珍らしく三ヶ月といふ短い期間にすらすらと脱稿され、そ

の春彼が大枚三百ルーブリを前借したストラーホフの新雑誌『黎明』（ザリャー）の、一八七〇年一月號と二月號に分載された。

相も變らぬ窮乏生活のなかで、卒然として書き上げられた作品ではあつたが、しかもこの『永遠の良人』には案外なほど苦澁の痕は見られず、むしろ反對に、かなり明るい氣輕な調子が全篇を貫いてゐる。そこにはひよつとすると、よしんば外國を漂泊する身であるとはいへ、中年もやうやく過ぎようとして辛うじて手に入れることのできた家庭生活から來る一脈の安らぎや、また長女の夭折のあとに訪れた次女の誕生のよろこびが、反映してゐないとは言ひ切れないかも知れないのである。

事實この中篇小説のもつ特質として第一に特筆せらるべきは、これが今も言つたやうな氣輕な、伸び伸びとした、いはば嬉遊的な作風のものとして、彼の全作品のなかで珍らしい例外を形づくつてゐることである。強ひて言へば、ごく初期の作である『ステパンチコヴォ村とその佳人』に、わづかにこのやうな嬉遊性の萌芽は認められると言へるかも知れない。また、後年の長篇『未成年』には、この種の嬉遊性が一そう圓熟した一そう充足された形で、現はれてゐると言へるかも知れない。それはともあれ『永遠の良人』一篇は、この作家の中期から後期にわたる大作巨篇のあひだに介在して、

あたかもミケランジェロの筆になる巨大な壁畫の列なりのあひだに挿まれた一枚のレンブラントの繪——といった風の感じのすることは、蔽ひがたい事實である。そこにはミケランジェロ風の乃至はダント風の、巨大な構圖はない。その代り、レンブラント風の明暗の布置やフロイド風の探求の精緻さは、ほとんど人力の及ぶ極限にまで達してゐる。したがつてまた、中篇小説としてのまとまりに於ても、これほどに凝縮した、しかもなだらかな思想の流れに貫かれた見事な結晶體を、ドストイェフスキイは後にも先にも産んだことはないのである。『白痴』『悪靈』の二大巨篇のあひだに介在する位置から見れば、この小作品は作者が一つの野心作の制作を終へて、しばらくその巨砲の鳴りをしづめて、おもむろに次の大作のための力を蓄へつつあつた時期に成つた、いはば本道からの息抜きのやうな氣味のある作品とも取れるのであるが、そこにはまた藝術家としてのドストイェフスキイの本質が、それなりに一そう露はな、一そう純粹な形で、發現してゐないとは言へないのである。ひよつとするとこの謂はば例外的な一篇は、「いらだちのない毒つ氣のない藝術や純粹な詩趣」を彼にまで要求する世間の聲にたいして投げ返された、ドストイェフスキイ一流の誠意ある皮肉にみちた答辯であつたかも知れないのである。

この想像は、一見すこぶる大膽なやうではあるが、しかもまた或る程度の裏書きを、ほかならぬこの作品自體に求めることも、さほど難事ではないのである。トルウツキイとかヴェリチャーニノフ

とかいふ主要な登場人物の名が、それぞれ「小心」とか「尊大」とかいふ語根を踏まへた一種諧謔的な作り名であることは、前にも一言しておいた。そのみならず、そもそもこの『永遠の良人』といふ題名にしてからが、かうして日本語に直譯された字面から受けとられるやうな仰々しい、取り澄ました、言つてみればわが國の婦人雑誌などの連載物の題として正に打つてつけでもあらうところの尤もらしくもあり魅惑的でもある感じとは裏はらに、あからさまに言つてしまへば讀はば「萬年寝とられ男」とでも言ひあらはし得べき、頗るおどけたニュアンスを含んだ一種の成語にほかならないのである。このことは、この作品の第四章に、いはゆる「永遠の良人」なることばの意義を説明して、「この種の男はただただ妻帯せんがためにのみこの世に生まれ、……太陽が輝かすにはゐられないのと同じ理窟で、寝とられ男にならずには濟まない」とヴェリチャーニノフをして言はせ、更に第十三章では、同じ「永遠の良人」なることばを、卑屈な薄笑ひを浮べたトルウツキイの口を通して重ねて發言させてゐるところからも、讀者は容易に見破られることであらう。かうしたことから『永遠の良人』なる作品の基調が、なんとしても喜劇的なものであることは、あらかじめ推測のつく事からでなければならぬ。

ロシヤ出來のボヴァリー夫人の死んだ後での後日譚といふテマを、ドストイェフスキイが採りあげたことは一再にとどまらない。『虐げられた人々』や『白痴』では、作者はそれを悲劇的に取扱つて

ゐるのであつたが、今や『永遠の良人』において、彼はその同じシチュエーションを裏側から眺めて、これを一つの喜劇として、辛辣にパロディ化してみようといふのである。そこでは筆致までが平生のドストイェフスキイ調から逸脱して、ほとんどフローベールやモーパッサンの壘をも磨するほどの、明晰な辛辣味にすら達してゐる。

とりわけ『永遠の良人』の幾つかの場面が、つい七ヶ月前に筆を擱いたばかりである『白痴』の息づまらばかりの場面を、單に戲畫化したものであることに、烟眼な讀者は氣づかれることであらう。例へば第二章でヴェリチャリニノフがカーテンの隙間から、情婦の良人トルウツキイがこちらの窓を見上げてゐる姿を盗み見するくだりは、『白痴』のムィシキンの姿をロゴジンがひそかに窺つてゐる場面と全く同じ畫面構成であるし、戀仇どうしが寢室をともしして、もの狂ほしい双傷沙汰になるあたりの構圖も、兩作品を通じてほとんど同じと言つていい。ただそれを支配してゐる調子が、『白痴』にあつてはむしろ悲劇的であるに反し、『永遠の良人』においては喜劇的であつて、ために一そう露骨に諷刺的であるにすぎない。

諷刺はもともと、自己笑殺の衝動のうへに成りたつ行爲である。そこには常に、痙攣的なもの、い

はば魔的なものの干渉がある。ゴーゴリの笑ひは正にその典型的なものであつた。一般に考へられてゐるより遙か以上に、ゴーゴリの正しい子であり果敢な繼承者ですらあつたドストイェフスキイが、そのやうな諷刺癖を、とぎすまされた自意識の壓力のもとに謂はば一そう近代的に變容された形において、多量にその血管のなかに湛へてゐたことは當然中の當然にすぎない。

ただこの性癖は、ほかのドストイェフスキイの作品にあつては、概して烈しく抑壓されてゐるのが常である。そのためにまた一そう毒々しい様相をすら帯びて、何かまつたく別の要素のやうに見まがはれがちなことも事實なのであるが、そのやうな自己笑殺癖に作者が暫くのびのびした自由を許し與へたこと——それがまた、この『永遠の良人』なる作品のもつ著しい特質の一つをなすものであつた。言ひかへるとそれは、この作品がかなり「自傳的」な要素に富んでゐるといふことである。

トルウツキイの今は亡き妻ナターリヤ・ヴァシーリエヴナは、この一篇の心理小説のいはば「見えざる」導火線をなす「見えざる」女主人公なのであるが、その面影に作者の最初の妻マリヤ・ドミートリエヴナの性格や行狀が、かなり色濃く宿つてゐることは、今では通説のやうになつてゐる。ドストイェフスキイ自身の言葉をかりれば、マリヤは「奇怪な、疑ぐり深い、病的なほど空想力の強い女」で、彼に再縁してのちも一再ならず不貞をはたらいた形跡があるばかりか、果てはその情交の一つを公然と良人の前でぶちまけて、「一體まともな女が、牢屋で四年前も泥棒や人殺しと一緒に苦役し

てゐた男なんか、戀するなんていふことがあつて堪るものですか」などと啖呵をきるやうな、ヒステリックな婦人であつた。もつともその一方ドストイェフスキ自身も、決して身持ちのいい良人ではなかつたから、要するに勝負は五分々々であらうが、その妻の死後五年、相變らずの貧乏ぐらしではあるがとにかく安らかな新たな家庭生活にめぐまれて、この「息抜き」的な作品の筆をとりあげた彼の胸裡には、あらためてその亡き妻の面影が、例によつて愛憎相表裏する思ひをもつて、まさまさと描きだされてゐたに相違ない。ドストイェフスキのやうな人情の厚い男としては、いつの日かは何らかの形において、亡き妻の記憶に心からなる永別の情を序したい、お互ひの身に受けた傷痕のうへに心からなる鎮魂の歌をうたいたい——といふ悲願は、けだし妻の歿後かた時も念頭をはなれぬ夢魔のごときものだつたに違ひないのである。だとすれば、この作品の大團圓の部分に突發する寢室内のをかした双傷沙汰で、情夫ヴェリチャーニノフの左手の先に血がにじみ出した瞬間、さながらキツネが落ちるのと同じ筆法で、亡き妻の怨靈もドストイェフスキ自身のもやもやした愛憎も、一度にさらりと落ちたのかも知れない。まさしく喜劇の成就である。

そのほか、ザフロービニン家でトルウツツキイの演ずる滑稽な役割は、『白痴』のムイシキン公爵がエパンチン家で演じた喜劇の變奏であるとともに、その幻想の根據はやはり、作者自身が妻マリヤの歿後何ヶ月もたたない一八六四年の夏、あの有名な女流數學者ソーニャ・ユヴァリョーフスカヤ

の實姉アンナ・クリコーフスカヤに對して實演した奇妙な求婚沙汰へのにがにがしい自己笑殺的衝動のあらはれと見てよいであらうし、第六章に見られるボゴレーリツェフ家の描寫にいたつては、作者が一八六六年の夏二ヶ月あまりを楽しくすごした、モスクワ近郊リュブリノなる妹ヴェーラの婚家イヴァーノフ家の別荘の雰圍氣の、かなり忠實な再現であることは疑ひもないのである。尤もこれはもはや、自嘲とか諷刺とかいふ動機とは全く縁もゆかりもない、そして大きな二つの文學的うねり——『白痴』と『惡靈』——の間に介在する小康期の産物たるこの作品にいかにもふさはしい、やうやく中年を過ぎようとするこの作者の抒情精神の、束のまのうち寛ろいだ流露のほかの何物でもないのである。

一九四八年二月鎌倉にて 譯者しるす

永遠の良人

昭和二十三年四月十五日 印刷
昭和二十三年四月二十日 發行

定價 百三十圓

譯者 神西清

發行者 矢部良策
東京部中央區日本橋小舟町二ノ四

印刷者 荒井政吉
東京都江戸區平井二ノ四一〇

發行所 株式會社 創元社
東京部中央區日本橋小舟町二ノ四
(大阪市北區麵上町四五)

電話茅場町(66)二〇〇六
四三番 會員番號A二一九〇五

東京光印刷・山田製本所

創元社發行
護法圖書

